
緋弾のエリア 重力と五式の銃弾

桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 重力と五式の銃弾

【Nコード】

N0098W

【作者名】

桜花

【あらすじ】

武偵高に通う男、小野新光はある日一つの指輪が届けられた。

そのたった一つの指輪が新光とその仲間、キンジとアリアまでも巻き込まれてしまう事になった。

そして、色んな秘密が明かされることに……

かなり駄文！

不定期更新ないし毎週日曜日更新。

感想バンドンドンドンーい！

1・夢?それとも…(前書き)

始めての二次作品です。

描写足りない気がします、あと誤字ありそう……) ^ - ^ ;

1・夢？それとも…

とある山中に村がある。

その村には誰にも居なかった。

戦時中だから避難しただろう。

私は部隊と逸れてしまいここに来た。

手には米軍の銃をコピーした銃であるが普通に壊れてしまい使えない。

ただ突き進む。

ある民家に入ってみた。

ただ壊れてもない家になんとなくだ。

玄関に上がり古ぼけた階段、昭和のテレビ、電球。

そして……

「……………！」

私は言葉を失った。

居間に老人が死んでいることを。

その老人の手に木箱を握っている。

恐る恐るその木箱を取る。

木箱から出てきたのは黒い宝石が嵌め込まれた指輪であった。

一体……………なんなんだこれは？

遺留品だが私は木箱をポケットに入れその家から去った。

「……………夢か」

東京の人工浮島、武偵高の男子寮。

俺、小野新光おのしんこうは怠そうにボサボサになった茶髪を整え服を着替える。二年の強襲科アサルトであるが中々楽しんでる。

あの夢は……祖父さんの記憶なのか？

だが祖父……小野総一郎は既に他界している。おもむろに携帯を手に持ちメールを確認する。

「メールは……いつもだな」

メールナツシングだ。

まあ先日遠山キンジチャリジャックの件は来たが。

それにしても五月蠅い。

声的にアリアとキンジだ。

全く、何やってんだか。

「おいシン、早くしろ」

岸田浩司きしだこうじ

俺と同じくアサルトの同年だ。

そして同じ部屋に住んでいる。

ランクはA

それにしても黒髪をオールバックするのなんかカッコイイな。

こいつは冷静沈着であまり暴れないからアサルトの中でも部屋の原形が留まっているほうだ。

シンと言うのは俺のニックネーム的なもの、かわりにこいつにはコウと呼んでいる。

「ああ、今行く」

7時58分のバスに乗れたがキンジとアリアが五月蠅い。
てか仲良しじゃないかあいつら。

「はあ……」

「どうしたキンジ」

遠山キンジ、二年の探偵科Eランクインケスタの武偵、こいつ入学試験の時にSランクを取った武偵でもある。

一時間目から四時間目まで一般科目の授業を行い五時間目以降はそれぞれの専門科目に分かれ実習を行う。

さっき言った通り俺はアサルト、キンジはインケスタだ。

「なんでこんな事になるんだよ」

「ははっ、ドンマイだ」

俺は笑いながら言った。
本当にドンマイだな。

「ドンマイじゃねえ、俺は平和に過ごしたいんだ」

平和に……ねえ。

まあ無理だな。

「恐らくアリアはキンジをしつこく狙うんだろうな。

……去年Sランクだったろ？」

「おまえもSランクだったじゃねえか」

「今はBランクだがな」

去年の入学試験の時Sランクだった。
キンジはヒステリアモードのおかげでSランクになったんだ。
それで入学試験の生徒参加者を駆逐し、そのうえ抜き打ちとして教官五人も駆逐したようだ。

俺の場合も生徒参加者を駆逐したのはキンジと一緒に。
だが抜き打ちで隠れていた教官五人を殺す気でやっちまった（勿論殺してはないが）

親父いわく「殺さなければ殺される」と言っていたが絶対祖父さん譲りだろそれ。

それでSランクになった。

だがあまり目立ちたくないから三学期にてきとーにやったらBランクまで下がった。

てかキンジとぶつかったらどうなっていたんだろ？

俺の親父は自衛隊の幹部だし祖父さんは大日本帝国の軍人だった。

だから俺は必然的に此処に入った。

キンジは何か特別な家系で此処に入ったが来年は一般校に行くようだ。

悲しいねえ。

「まあよかつたじゃないか、パートナーが出来てさ」

なかなかよいパートナーになる気がするぜ？

「俺は平凡な生活を送りたいんだ。Sランク武偵とパートナーなんてゴメンだな！そうゆうおまえはどうなんだ？」

「俺？俺はまだ居ないぜ？いつか見つけるさ。じゃあな」

キンジが学ぶインケスタの専門棟に来たからそこから別れた。さて、明日無き学科『アサルト』に来たぞ。

100人に3人弱は生きて卒業できない学科だ。すなわち97名くらいしか卒業出来ない確率だ。

「シン、やっと来たか」

コウが専門棟の前で待っていたようだ。

「三十秒遅刻だぞ」

いや、いいだろそれ。

「悪かった。で今日は何をやる？」

「今日は……………組み手だ」

コウとの組み手はまじ冗談じゃない。

重装備で戦わないといけない。

武器使用可でなんでもあり。

ただし目潰し、殺害は駄目。

武偵法9条で殺害は認められないしな。

俺はAK47、命名アカちゃん（AKをロシア語読みでアーカーと発音します）

それを持ち置がある道場へ。

普段は体術の訓練に使うのに何故か銃弾痕があるんだ。

コウが目の前に立つ。

いつもこの棟は銃声等が絶えない棟だが俺とコウが組み手をするだけ静かになる。
なぜだし。

「いくぞ！」

コウが右ストレートで放つ。

コウは拳銃だけ携帯しメインは体術系をこなすエキスパート。
てかアカちゃん邪魔！

今すぐぶん投げたい。

右ストレートを避け右腕を掴み背負い投げをする。

しかしコウは足で受け身を取りいったん離れる。

今度は俺の番だな。

俺はコウと同じく右ストレートを放つ。

右ストレートはコウの中心、すなわち腹だから避けることも難しい。

その右ストレートを右手で止められたがまだ攻撃する。

止められた瞬間に左チョップを繰り出す。

だが相手がコウだから簡単ではなかった。

それも止められしかも相手の力を利用した合気道を繰り出したのだ。

こんなの対応できるはずもなく倒されるが受け身で距離をとった。

合気道嫌いなんだよなあ。

「そろそろやるか」

とコウは拳銃、デザートイーグルを取り出す。

反動が強く威力も高い拳銃だ。

俺のアカちゃんとは違い小型、小回りが効きやすいがどうにかなるだろう、多分。

コウはデザートイーグルを一発撃つ。

かなりの爆音だがほぼ同時にAKも撃つ。

俺は照準器アイアンサイトから覗く『のみ』命中率があがる。

たとえ500m先の敵が移動していても偏差射撃で当てる程の腕前。もちろんアイアンサイトから覗いて撃つたから何かが命中した。

何かというのはデザートイーグルの弾だ。

それがどっかに跳んだ。

見えないもん。

しかしまさかの不幸が訪れた。

弾いたデザートイーグルの弾がどっかの鉄製の棒に跳弾しAKの排出口に直撃し弾が嵌まった。

「ああー！アカちゃんがぁ！」

取り出そうにも嵌まって出せない。

分解しても部品がオジャンだろうな。

AK47ここにて殉職しました。

その日、俺は泣いた。

嘘、泣いてない。

まあアカちゃんを（グラウンドで）埋葬した時は泣きそうだったが。

さて、新しい銃どうしよっかな。

アムドに注文したあの拳銃か持っているトカレフTT-33のままか。

どうしよっかな。

ピンポーン、とチャイムが鳴った。

「誰だ？」

コウは何か注文したか？
と思っドアを開けると、

「ちわ〜っす。郵便です。ハンコお願いします」

まさかの郵便。

差出人は……！？

親父！？

何を送ったんだ！？

驚きながらハンコを押して自室に戻る。

「何を送ってきたんだ？」

かなり長細い箱だ。

銃器かと思ってしまうのはもう俺やばいか？

箱を開けてみるとうわ、と思った。

勘が当たった。

入っているのは銃、菊水の紋章が刻み込れており固定弾倉が少し飛び出ている銃だ。

あと黒い宝石が嵌め込まれている指輪だった。

EJと刺客

どうゆうことだ？

これは五式自動小銃。

米軍が持っていたM1ガーランドをコピーした欠陥銃だが……うん、壊れているな。

あとこの指輪は……祖父さんが持っていた指輪だな。夢が正しければ盗んだ指輪だが。

あとは……下に軍資金百万円があるし。

絶対直せと言うことか！

はあ……アムドのあの子に注文するかと考えていた時に携帯に着信音が鳴る。

誰だ？

親父かな？

「ん？非通知？……はい、もしもし」

「公園の公衆電話に来なさい」

弱々しい老人のような声が聞こえ、ブツツと切れた。

「な！おい！……？」

公園の公衆電話に來い？

一体誰だ？

しかたねえ、行くか。

トカレフTT-33をホルスターに入れ近くの公園に向かう。

この公園はカップルが多くデートスポットとして有名な公園だが、すでに暗く人気もない。

「この公衆電話だよな？」

新手の悪戯かもしれない。

と思っただら公衆電話からトゥルル！と鳴り響く。
しかもタイミングよく、だ。

「うわっ！？本当だったのかよ」

これは本当だ。

受話器を取りとりあえず確認する。

「も、もしもし？」

「小野新光くんかね？」

あの声と一緒に。

監視されてるのか？

周りを見渡すが誰も人気もない。

どっからか監視しているのかわからない。

「え、ええ、そうです。しかし何故公衆電話から？」

普通に携帯で話せばよかったものの。

「何、盗聴される危険もあるからな。しばらくこれで連絡をとる」

盗聴？

何かやばい組織か。

切るか？いや、もう面が知られているためもう駄目だな。

「……………で何の用なんですか？」

「まず君が持っている指輪、あれは危険だ」

指輪？

これが。ポケットに突っ込んでいたな。

しかしこの指輪が危険？

「それはイ・ウーとロシアのとある組織が狙っている。奪われると厄介な事になる。」

我々EJが君達を援助し、そして自分の身を守りたまえ」

イ・ウー？

ロシアの組織？

EJ？

よくわからん単語がよく出るな。

「待て！どうゆう事だ！どうして援助する！？」

「……………同胞なのだからだよ」

同胞……………日本人か。

ブツツ、と通信が途絶えた。

一体なんだ？

この指輪に何が？

とりあえず帰ろう。

帰り道が暗いな。

それに空気が妙にピリピリしてだんだんと薄明るくなってきた。

「……………ん？」

足元見るとその中心が明るく上も何故か明るい。

まてまて、整頓するぞ。

周りピリピリ 足元が妙に明るい 何が起きる？

！

「うわぁー！！」

何か危ない気がしたから離れて三秒後に爆音、閃光が煌めき激しい衝撃と煙が立ち込める。

「あ、危なかった」

雷だったのかよ。

しかし雲なんて無いし一体何故？

す、すぐに帰ろう。

また同じ目に遭いたくないし。

新光から約五百メートルほど離れた建物の屋上に銀髪の男が暗い道に走っている新光を見ていた。

「チツ！妙に勘のいい奴め」

奇襲をかけたのがいいが避けられたな。

スウと何もなかったところから紳士の服を着た白髪まじりの老人が現れた。

腰に両刃剣を挿していることからただの老人ではないとわかる。

「今すぐ始末しますか？」

老人の目がギツ、と光りまるで殺しのプロのように見えた。

「いや、今は泳がせる。奴が弱小のイ・ウーと戦わせるまで様子見だ。もちろん『緋弾』もな。ウヒツヒヤヒヤ！」

高笑いしながら二人は空気に溶け込むように消えていった。

あれから何も襲撃は無く寮に帰ってこれたが、

「そう言えばキンジはどうなったかな？」

かなり気になるからキンジの部屋に行くか。

で、来たが。

「……………アリアいるのか？」

キンジの部屋からアリアの声が微かに聞こえる。

風穴やら風穴やら風穴やらと聞こえるがよし、押すか。

ピンポン、とチャイムを鳴らし、一秒、三秒、五秒でやっとドア

が開いたがキンジ？傷だらけじゃないか。

「どうしたキン」「このバカキンジー！」あぶね！」「ふみゃ！」

刀を持ったアリアが突撃してきたから（しかもキンジが避けたから関係ない俺に向かって）流し技と突き飛ばしをやっちまった。

そのせいでアリアが壁にビターン！と張り付き……もといたたき付けたが。

「だ、誰よあんた」

アリア……同じアサルトなのに知らないとかなんか悲しい。

「そんなことより入れ」

キンジがぶつきらぼうに言ったが近所迷惑だからな。

「じゃ、遠慮なく入るぜ」

入るとキンジの部屋は綺麗だな。

一人暮らしとか淋しいが。

「ところであんた誰よ」

アリア……マジで知らないのか……まあいいけど。

「二年A、アサルトの小野新光だ。」

アリアはふーんとなんか興味なさそうで何か考えているな。

「じゃあ新光……」

「シンでいいぞ」

あ、しまった。つい……
まあいいか。

「じゃあシン……」

「おい、アリアまさか!」

どうしたキンジ。

そんなに慌てて、まさかチーム組めとかじゃないだろうな?

「あんだ、あたしのドレイになりなさい!」

……なにそれ人権無視?

惑星シャモから連れて（ryの扱いされるのか?

「なあキンジ、どうゆう事だ?」

俺はキンジを捕まえアリアから遠い位置で小さな声で訳を聞いてみる。

「俺だつてしらねえよ。昨日いきなり上がり込んでドレイだチームを組めとか言われて今日のクエストにもついてきやがったんだ」

へえ〜だから朝っぱらからアリアと喧嘩?つぱいことやってたんだ。

「そのクエストは?」

「迷子の猫捜し」

……まあそうだな。

「悪いがアリア、ドレイ……もといチームに入らん」

「どうしてよ。ハムッ」

あれは……見た目は桃、中身はあんまん、その名ももまん！
うん、まんますぎる。

「もうチーム組んでいるんだよ。そもそも何故組みたがる」

そう、チームはすでに組んでいる。

俺と浩司、狙撃科スナイプの鷹と通信科コネクトの春奈の四人構成。

「さ、さっきの攻撃であんたかなりの実力者だとわかっていたわ！
だから今すぐドレイになりなさい！」

殺気！

アリアが大型拳銃ガバメントを取り出し俺に撃った。狙っている所は胸の中心。
同時にポケットからナイフを取り出し弾丸を切る。

後ろにバシッ、と音が鳴ったが多分割れた弾丸がいったんだろう。

「あ、あぶねえな!？」

いまのは危なかった。

そしてアリアはガバメントを振り回しながら

「いい！？ドレイにならないと風穴よ！」

と乱射しながら言った。

「まってまってえー！」

俺はナイフで弾丸切りをしながらアリアを制止させようとし

「俺の部屋で乱射するなあー！」

とキンジは流れ弾を避けながらそう叫んだ。

2 パートナー

アムド棟は地上一階と地下三階と、地下部分の方が広い。セキュリティ管理の厳重な一階から階段で地下に降りると……無数の銃器があるではないか。

『ひらがあや』と平仮名で書かれた表札のついたB201作業室。

朝早くアムドの平賀文に電話したらここに居るから来てなのだ、だそうだからここに来た。徹夜で何かやっているのだろう。

包んであるものを持ち軽くノックをした。

「はい！開いてますのだ！」

子供みたいな平賀の声が返ってくる。ドアを開けると……うん、物屋敷だなこりゃ。

「待つてましたのだー！」

平賀文……^{アムド}装備科二年の武偵だ。

子供に近い身長の高さだがこの子はメンテナンス、カスタマイズが大の得意で自分で開発してしまうほどの天才だ。

前にホンダCBR1100XXというバイクを改造してくれた。

武藤が乗せてくれと言ったが……乗せてやった。

それにアメリカの武器の企業やら大きな会社からの依頼が来てるから凄い。

その平賀は何か持っている。

あれは前、俺が注文したやつだな。

ルガーP08/14アーティラリー

ナチスの拳銃と言われている拳銃でかなり人気が高かった銃だ。

スライドして装填する拳銃と違いトグルを後ろに引き上げて離すことで第一弾が装填されるこの銃はカッコイイ。

銃身が長く八発入り弾倉と三十二発入り弾倉が四つずつ置かれている。

「注文通り撃針の交換と強化バネに交換、完全セーフティと三点バースト、フルバーストを追加したのだ!」

「ありがとう平賀」

おかげで15万払ったんだ。

大事にしないとな。

「どういたしましてなのだ」

「ところでもう一つ注文したいんだ」

包んであるものを平賀の前に置き見せる。

「あやや!こりゃ凄い!」

見せたのは五式自動小銃、平賀はかなり古いと言ったがまあ六十年以上前の銃だからな。

泥もこびりついているし。

「こいつを生き返らしてほしい。口径を5・56mmに変更及び銃身をこれくらい長く、あとセーフティ、三点バースト、フルバースト」

ストを追加、とガス圧向上、弾倉をクリップから箱型に変更してくれ」

「あやや！そんなに注文多いと高いよ？」

そろばんを凄いい勢いで弾いている平賀。

そんなに高いか。

「別にいい、新しい愛銃になるからな」

アカちゃん殉職したしな。

「あやゝ70万円だね」

た、たけえ…

でも予想範囲内だな。

懐から100万円のうち70万円を出す。

「うししゝ毎度ありゝなのだ。」

「楽しみにしているぜ」

と言ってルガー拳銃と弾倉を持って退出した。

午後になってアサルト棟施設でルガー拳銃の試射をする。

まずエイムはと言つと……

タンタンタン！と撃つた時に軽い音と9mm弾が目標である頭、胸、

……等の急所に命中。

うん、中々いいな。

次は三点バースト。
タタタン！とかなりいいリズム。
しかも反動はあまりない。
平賀、他にもいじくつたな。
上出来だ。

さらにフルバーストはどうだ？
三十二発入り弾倉を挿入しトグルを引き上げ装填。カッコイイな。

「さあ！撃つぞ！」

タタタタタン！と拳銃に似つかわしくない連射音。
反動少しあるな。

ジャムは今の所は無し。
三十二発連射つてもう機関銃だなこれ、拳銃なのに。

そう言えばメールでキンジはここにくると連絡がきたな。

「キンジい、アサルトに帰ってきたのか？」

「違う！自由履修だ！」

「キンジ！ようやく戻ってきたんだなあ！帰ってくると思ってたんだぜ？」

「いいぞ！楽しませてくれよ」

「お前らを楽しませに来たんじゃない」

「キンジい、お前はアサルトに戻って来ると思ってたぞお、お前の居場所はここしかねえ！」

「安心し「やかましい！願ひ下げだ！」」

外からの声が響いてくる。

この声はアサルトの同僚とキンジだ。

もう来たんだな。

俺もルガー拳銃をしまい外に出る。

俺はキンジに盛大に

「おおトニー！久しぶりだなあ！」

「誰がトニーだ！」

ぐ、ツッコミをするとはキンジも中々だ。

「キンジ」

キンジの後ろからアリアが話しかけてくる。

「アリア……」

「じゃあまたなキンジ」

同僚は一目散に散って行ったが俺は帰らない。

「シン、あんたも来なさい」

というか帰れなかった。

アリアが来いに行ったから。

「シン、会議は1600でその喫茶店だ」

浩司が出て来て俺に伝える。

そうだな、アリアとキンジをチームに入れるかどうかだったな。

「分かった」

ドアが閉まる。

そういえば鷹と春奈にも知らせたか？

「会議って？」

「アリアとキンジをチームに入れるかどうかの会議だ」

「もしも組まなかったら風穴！」

おお、怖い怖い。

三人で校門に向かう。

「あんだ人気者なんだね」

「あんな奴らに好かれたくない」

キンジは若干めんどくさそうに言い、アリアはため息をついてこう言った。

「あたしなんか誰も近寄ってこないわ。実力差がありすぎて誰にも

合わせられないのよ」

「なるほど、名前通りアリアって訳だな」

……すまん、どうゆう事だ？

「キンジのくせによく知ってるんじゃない。

そう、アリアはオペラの独唱曲。一人で歌うパートよ」

へえーそうなんだ。

「で、ここで俺をドレイにしてデュエットにでもなるつもりか？」

俺を外したなキンジ。

まあまだ結果は出てないけど。

アリアはここでくすつと笑う。

「あんたも面白いと言えるんじゃない。あ、シン。調べたよあんなの資料。Sランクだったのね」

もう調べたのか。

早いな。

てかそのランク入学試験の！

「今はBランク。入学試験の時はたまたまだ」

「お、俺もたまたまだぞ！」

キンジはここで便乗する気か！？

そして諦めさせる気が!?

「バカキンジは黙ってて!あの時の動きはBランクではないわ。…
…やっぱりドレイにならないと風穴!」

だからまだ検討中だ!

ガバメントだすな!

「はあ、キンジはこれからどうする?」

なぜ校門まで歩いて来たか不明だが。

「俺はゲーセンに寄って行く。シンは用事あるだろ?」

えーと、

時刻1500

ゲーセン寄ってく時間はないな。

「ああ」

「ゲーセンって?」

アリアがキョトンとして首を傾げる。

「知らないのか?ゲームセンターの略だ。じゃあなシン」

「おう、じゃあ」

と言って見送る。

アリアもついて行ったな。

会話が、ついてくるな！ やだ！ ついてくるな！の叫びが聞こえるぞ。

つか速いなお前ら。

さて、どうやって時間潰そうかな。

「あ、あのー！」

ん？どこからか声が聞こえたが……いた。

「おい、こんなところでなにやっている」

茂みに隠れていた女子がいた。

なぜ？

そう思い、近づく。

「あ、あのー！小野新光さんですか！？」

茂みから跳び上がり俺の名を言った。

俺を捜していたのか？

それよりも彼女が背負っている銃器に目が行った。

一 ウツキ式機関短銃

大日本帝国が装備していた接近戦闘の機関銃だ。

祖父さんに教えてくれた。

弾は南部弾と言って殺傷能力があまりなかった弾を使う。

しかし今は南部弾はもちろん一 式機関短銃はほとんど廃棄されたとネットにも出ていたが武偵にはこれを使う人がいるんだな。

「そつだが……なにか？」

彼女の特徴はオレンジ色の髪で髪型はポニーテール。身長はアリアより十センチほど高いな。

胸は……………うん、あれだがそこそこだな。

「わ、私二年の九条香苗くじょうかなえと言います！め、衛生科メイカです！っ、付き合っ
つて下さい！」

へえ、香苗か。

で付き合っ……………て？

「い、今なんて言ったんだい？」

幻聴だと信じる。

いきなり付き合えとか何かの冗談だろ。

「っ、付き合……………って下さい」

顔を真っ赤にして付き合っつて下さいと告白する香苗に俺はある意味
真っ白？になっていた。

……………なんだと？

チーム

俺は今、窮地に立たされている。

「っ、付き合って下さい」

なぜ……こうなった。

いやまて新光。

れ、冷静になれ。まやかしだ。

と言つのは置いといて。

本気で冷静になろう。

「えっと、香苗ちゃんだっけ？なんでかな？」

思わず接尾辞を付けてしまったがどうにか質問することができた。

「え、えっと……実は今朝こんな紙が……」

一枚のA4の紙。

拝借して読まして貰う。

こう書かれていた。

『二年B組九条香苗

貴女は本日より二年A組小野新光のパートナーになれ。

彼に「付き合って下さい」と言いなさい（笑）

『EJ』

と書かれていた。

………EJよ。

あんだ……なんてはた迷惑な。

これが昨日言っていたパートナーの派遣か。これ派遣じゃなく推薦だろ。

しかしこの子内気だな。

結構テンパっていたし。

「えっと、香苗ちゃん」

また接尾辞が付いた。

「香苗でいいです」

訂正された。

「香苗、この紙が記されたこと信じるか？」

普通なら信じないだろう。

普通なら。

「信じます！新光さんはアサルトです！怪我しやすい人を見捨てません！」

信じちゃった。

凄い執念だな。

こりゃ受け入れた方がいいな。

「そ、そうか。なら俺のパートナーになってくれ」

「はい！よろしくお願いします！」

現在時刻 1545

俺と新しいパートナー九条香苗と一緒に集合場所の喫茶店で時間を潰していた。

「へえ、香苗の実家は医者関連なんだ」

パートナーになるなら互いの情報交換をする。

「はい！私の祖父が日本の軍医さんだったんです。それで父も医者で私は懂れています！」

へえ、軍医か。

メデイカなら衛生兵と一緒にだから前線で負傷しても手当てしてくれる。

うん、かなりよいチームになったな。
で、

「その一 式機関短銃もその祖父の物だったのか？」

彼女は椅子の横に立て掛けた一 式機関短銃を机の上に置く。

「はい、祖父に貰ったんですけど壊れていて……それでアムドの平賀さんに依頼をして直して貰いました」

平賀…… すごいなやっぱ。天才じゃないか。

一 式機関短銃を手に取り確認する。

強度やコッキングレバー、弾倉…… すごいよ。

弾も9mm弾に変更されているわ。

「やっぱすげえ……お、来たな」

武偵制服を着ている三人、大柄おおがらで髪を後ろに結んでいる男は二年スナイプの田中鷹たなかたか、タカと呼ばれている。

ランクはS

彼が後ろで包んでいる物はKar98kというボルトアクションライフル。

完全に見せないように配慮している。

香苗にもそう言っとくか。

後ろに居る花のヘアピンを付けている女子は二年コネクトの高千穂たかちほ春奈はるな、ハルと呼ばれている。

彼女は通信で連絡をとり指令を出したり盗聴を専門としている。

武器は……ナイフだけ。

ランクはB

でコウ……岸田浩司も来た。

これが俺達のチーム、

アサルト二名、スナイプ一名、コネクト一名、あとメディカー一名も加わった。

アサルトが前線で戦いスナイプは後方支援と偵察、それを中継して全員に伝達するコネクト、そして負傷した仲間を治療するメディカ。かなりバランスがいい気がする。

「シン、この子は？」

鷹が見下した目（というか身長がデカすぎるため見下さなければ見えない）で見る。

「あ、あの私は二年の九条香苗です！新光さんのパートナーとなりました。よろしくお願いします」

と深々とお辞儀をしたが香苗、そんなに堅くならなくてもいいぞ。

「俺達はチームだ。そんなに堅くなるな。

それとシンのパートナーということは……」

浩司は俺と同じことを考えていたが、やばい。

もし香苗があれ（紙）のことを言ったら更なるめんどい事が。

「お、俺が決めたんだ。これからのクエストで多分怪我するの増えるからさ。な！香苗！」

「ふえ！？は、はい」

「そうだったのか」

よし！浩司の他にも鷹も納得してくれた。

「香苗さん。チームに入ったお近づきのしるしにはい」

春奈が新しい手帳を出して香苗に渡した。

そう言えばどっかのお嬢様だったな。

しかも……

「あ、ありがとうございますー！」

まあいいが。

俺達のチームに皆と少し違う物がある。

三人にあつて俺にはない物が……

で、会議をした結果アリアとキンジをチームに入れるのは流石に無理なようで（香苗を受け入れるのは早かったのに）同盟を結ぶ方針に決まった。

喫茶店で皆と別れ香苗と一緒に帰ろうとしたところ

「あーシンシンだ！」

この声はまさか。

「理子か」

白いフリフリを付けた改造制服（白ロリ風）を着ているのは紛れも無い理子。

峰理子……二年インケスタの武偵だ。

バカキャラだが情報収集はかなりのものだ。

「あー、シンシン彼女出来てるー」

「か、かの!？」

香苗、落ち着け。

こいつの挨拶的なものだ。多分。

「理子、こいつはパートナーだ。彼女じゃない」

「おー、パートナーか。アリアと二股？」

何故アリア出るし。

「二股じゃない。てか彼女二人居る的なこと言つな」
彼女居ない歴〃年齢の俺がそんなバカな事を。

「うーうー。違つんだあ。そんじゃばいなら」

ぶーん、と飛行機のような仕種でどっかに去って行った。
まるで台風のように過ぎてしまった感じがする。

「そ、それじゃ行くか」

なんか後味が悪いが気にしないところ。

「は、はい……」

寮に向かい歩いているが……気まずいな。あ。

「そつだ。ほら」

「え……新光さんこれは」

渡したのは寮の鍵。

「もうメンバーの一員だからな。鍵くらい渡さないと」

「あ、ありがとうございます！わ、私も！」

と今度は香苗の部屋の鍵が渡される。
無理矢理だが。

「お、おう。ありがとう。……なあ香苗」

「はい？」

「俺達のチームではミッション中、名前の二文字を抜いて呼び合っている。俺の場合はシン、的な感じだな。

だから香苗、ミッション中はカナと呼ぶよ」

「そ、そんな……あうう」

恥ずかしいのか赤くなる香苗。
すぐく内気だな。

「大丈夫だ。日常では香苗と呼ぶ。まあ日常でもシンとか呼んでもいいけどな」

「は、はい！シンさん、これからもよろしくお願いします」

こうして新しいメンバー九条香苗が入りアリア達と行動することになった。

あ、キンジにこのことを知らせないとな。

3 バスを追跡せよ

次の日キンジはかなり時間があると思いい今、バス停に向かう。

「よし、何時ものバスには余裕だな……ってあれ？」

今、寮の前にバスが通り過ぎて行った。
しかも武藤の姿も見えた。

「武藤！？ってあれは58分の！」

キンジは走ったが時既に遅くバスは寮の前から消え去った。

「マジかよ……」

チャリは前、チャリジャックされて爆発してオジャン。
歩いて行くしかないが遅刻確定だな。

キンジはトホホと思い徒歩で学校へ歩いて行った。

「はぁ、ツイてねえ……」

電話の着信音が鳴る。

誰からだ？

アリアからだ。

朝っぱらから一体なんだ？

「もしもし」

「キンジ！？今何処！？」

「学校に向かっていているところだ。どうした？」

「事件よ、バスジャックが起きた」

「な！」

驚いたあまりバツクを落としてしまった。
またジャックだと？

その頃新光は……

やべえ、ルガーの整備に没頭しちゃった。

先日ルガーを撃ちすぎたため問題があるかメンテをしたらかなり時間を使った。

そして現在0800

完全に乗り遅れた。

仕方ない、バイクで行くか。

ルガーをホルスターに入れバイクのヘルメを持った時に

『シン！大変！』

頭の中でハルの声が聞こえた。

そう、ハルは超能力に等しいテレパシーを持っている。他にもあるがそれは今はいい。

『どうした？』

頭の中で念じて返信する。

何が起きた。

『バスジャックされたわ』

「何だと!？」

すぐに外に出てバイクに向かう。

『状況は?』

『減速すると爆発すると警告され、今外に無人車とUZIで身動き取れない』

くそ、まさかキンジと同じジャック……武偵殺しか。

『今すぐ向かう。場所を逐一報告してくれ』

走りながらそう伝えバイク、ホンダCBR1100XXを乗りバスの元へ向かった。

武偵高校行きバスには爆弾が仕掛けられている。しかも外には無人車とUZIに監視されており思うように動けない。そしてバスの窓硝子は碎け散り車内に散らばっていた。

カナは硝子で切ってしまった生徒の手当てをしている。

そんな中、タカは爆弾を捜していた。

動かすにずっと。

「……………見つけた」

タカの目は闇視、透視、望遠という能力が備わっている。ただ月の出に関係あるが。

見つけた所、それはバスの下、普通では取れそうもない所に金具で固定されていた。

「車体の下にC4爆弾。約五百グラムはある」

「やはり下か。かなり危険だ」

外にはUZIが待ち構えている。

出れば蜂の巣だ。

どうする？

「あの外車を黙らせてやる」

三人の武偵はとうとう我慢出来なくなつたのかあの無人車を破壊するために動こうとしている。

「おい、無茶するな！」

武藤が三人の武偵を制止をするが

「俺達は武偵だぞ！このまま引き下がれるか」

なかなか引かない。

不知火は外の無人車を見る。

「犯人は僕たちの動きを監視している」

「ああ、たがもうすぐトンネルだ。監視カメラなら露出補正のタイムラグが出来るはずだ」

確かにもうすぐトンネルだ。
監視カメラなら葬り去ることは出来るが。

「そこで三人で叩けばいける」

「不確定要素が多すぎる！危険だ！」

「もういい！俺達だけでやる」

あと五百メートルでトンネルに入る。

既に三人は入った瞬間を狙うため待機。
そんな時に

「……シン？」

ハルがそう呟いた時に無人車に搭載されていたUZIがガンと鳴り
ガシャンと外れた。

「なんだ！？」

皆は何が起きたのか理解出来ていない。
だがコウ、タカ、ハルは分かっていた。

「やっと来たか」

遅刻だ、とコウは呟いた。

少し時間が遡る。

「見つけた」

右下の道路にバスとハルが報告した無人車だ。しかもUZIを搭載している。

この先はトンネルとレインボーブリッジ。あんな所で爆発したらやばいな。

右に曲がり目の前に置かれているジャンプ台のような板から飛ぶ。グオオオとエンジンとタイヤの空回りが鳴り響きながらバス後方千メートルほどの位置に着地。

衝撃はかなりあったが異常はない。

そのままアクセルを絞りスピードを上げながら蓋が付いているスイッチを押す。

するとライトの下に一本の棒が出てくる。

正体は二十ミリ機関砲。

アムドの平賀に改造を頼んだ理由はこれだ。ただ武装しただけだけだ。

簡易照準器を立てて十字に無人車、UZIに合わせる。

一発で充分だ。

右にある発射ボタンを軽く押す。

機関砲だから押し続けると発砲し続けるから軽くだ。

ドッ！と凄い反動がバイクに伝わり二十ミリ弾はUZIに命中し道路に転がり落ちる。

バスとの距離が縮まりさてどうやって乗り込もう？

「やはりこれしかないな」

武装解除された無人車をバイクで踏みジャンプ台代わりにして飛ぶ。

「うおっ!」

後輪から着地し滑り込みで乗った。

「よし、間に合ったな」

トンネル内に入り気流の流れが変わる。

落ちない様にワイヤーでバイクを固定してバス車内に入った。

爆弾処理出来るかな？

「よつと」

窓硝子から入る。

足元に硝子の破片があるな。

「新光！？今のやつ新光がやったのか！？」

武藤がそう叫んだ。

まあそうだよな。

「タカ、コウ。爆弾は見つかったか？」

「爆弾はバスの下だ。かなり危険だ」

そうだな。

減速すると爆発すると言うことはこの速度の中で解体しなければならぬ。

「おい、何で爆弾の位置が分かる？まさかお前が……」

武藤、疑うな。

そして皆も疑うな。

「違う、武藤。俺達はな」

と弁解しようとしたらガシャーンと前のドアに誰かが飛び込んできた。

「皆！怪我はない！？」

おいおい、まさかアリアがここで来たか。
どうやって来たんだ？

また誰か飛び込んで来た。
キンジだ。

そうか、組んでいたからな。

「よっ、キンジ。約束の一件だな」

メールでキンジは事件を一件だけ付き合う事がわかったからな。

「ああ、最悪の事件だぜ」

「シン、爆弾の場所は分かっているの？」

「ああ、タカが見つけた。このバスの下だ」

と言ったらアリアは驚いたような表情に。

「なんでバスの下だと分かったの？見えないのに」

やっぱり疑っている。

無理もないな。

「それはこれが終わってからだ」

「そ、そうね」

と言ってアリアはバスの後ろに行きベルトで命綱を作り車体の下に見に行く。

「遠山君、ちょっと」

不知火がキンジに話し掛ける。

「不知火どうした」

「恐らく犯人は僕たちを監視している。センサーが発信する装置があるかもしれない」

キンジと不知火の会話を盗み聞きしていたが発信する装置なんてあったか？

……あ、バスの上に何かあったな。

「キンジ……っていねえ!？」

「キンジならバスの上に……」

キンジも分かったか。

「本当にあつたわ」

腰にベルトを巻き付けぶら下がったアリアは車体の下を搜索すると爆弾、プラスチック爆弾を発見した。アリアは解体するために手を伸ばす。

「く、届かないわ」

だが短すぎて届かない。

キンジか誰かを呼ばないと爆弾は回収できないと判断し、

「キンジ、手を貸して！キンジ！あのバカ」

キンジを呼ぼうとしたらその頃のキンジはバスの上にある通信装置を見つけそれを無理矢理剥がしていた。

それを見たアリアは怒った。

「アリア！通信装置を見つけた！奴はこれで俺達を「バカ！早く戻りなさい！」な、なんだよ！お前が爆弾を解体している間にこつちを……」

と通信装置投げすてる。

「無防備すぎるわ！早く車内に……」

後ろから何が走っている音が聞こえた。

それは先程と同じ型の無人車のオープンカーだ。

そこからUZIが出てきた。

熱感知のセンサーがキンジを捕捉、銃口がキンジに向けられ9mm弾二発がキンジに襲い掛かる。

「伏せなさい！キンジ！」

アリアがすぐにバスの上にはい上がりキンジを庇おうとした。

その数秒前、タカは周りの様子を見ていた。

レインボーブリッジには誰も居なく、空にはヘリが一機いること、後ろには……

「後ろに追っ手が来るぞ！」

「何！？」

「何だと！？」

俺とコウは後部座席に乗り掛かりその追っ手、無人車を発見した。

「くそ、ここは……」

ルガー拳銃を取り出し引き金を引くが撃鉄の音がしない。

まさか……作動不良！？

メンテで部品を組み忘れたのかどっかが外れたのか、使い物にならない。

「くそっ」

トカレフTT-33を取り出す間に無人のオープンカーからUZIが出てきてすぐに発砲した。

銃口の向きから見て俺ではない。
若干上だ。

「伏せなさい！キンジ！」

と下からアリアが跳び上に行った。

まさかキンジを狙っていたのか。

9mm弾が亜音速で飛んでくるのがわかる。

くそ、あの弾がキンジを死なす弾かもしれないのに何も出来ないのかよ。
当たるなよ！どっかに逸れるんだ！仲間である武偵を死なせたくない！

そう願うとあの日から付けていた指輪がうつすらと光り輝く。
その変化はシンしか気付かなかったが他にも変化が起きた。
それは銃弾がゆっくりと左に逸れて行った。

同時に無人車のオープンカーのタイヤがバーストし回転、爆発した。

弾はどうなった？

アリアとキンジはどうなった？

トンネルから抜けレインボーブリッジに入った。

その時、外からヘリが一機飛んで来た。

「…………レキ」

スナイプのレキ。

タカと同じくSランクで狙撃銃……ドラグノフを所持している。
そのレキが匍匐状態で構えていた。

「私は……一発の銃弾」

スコープの倍率を上げ爆弾に狙いを定め撃つ。
ダウン！と発砲音が鳴り響き銃弾はレインボーブリッジの転落防止
柵を潜り爆弾を固定していた金具に当て、弾きとばす。

爆弾はレインボーブリッジの下に落ち爆発、海水がレインボーブリ

ツジを、バスを濡らす。

この時、やっとバスが止まった。

任務を終えたヘリは去って行き、シンとカナはバスの上にかかる。

「大丈夫か？」

カナはキンジとアリアを診る。

キンジは大丈夫だがアリアは、

「アリア、アリア……」

「キンジ、こんなのかすり傷よ」

左手に血が流れていた。

UZIの銃弾が左手に掠っただろう。

カナは救急バックから包帯を取り出し止血する。

「一回お医者さんに診せたほうがいいね」

膿ができるかもしれない、と判断をしたカナはそうアリアに告げた。

「大袈裟ね、かすり傷よ」

「いや、診せたほうがいい」

こうしてバスジャック事件は終わった。

爆弾処理出来るかな？（後書き）

そうそう、今更だが後のメイン銃、五式自動小銃の説明活動報告に公開しました。

できれば見て欲しいです。

4・明かされる真実

武偵病院に入院したアリアは軽い傷だった（何当たり前のことを）ただ、左手に一本のかすり傷だけで入院するんだな。

「新光さん、皆さん」

ドラグノフを背負ったロボット（表情的な意味で）少女レキが俺達に話しかけてきた。

CGのように整った表情から何もわからない。

「レキ、あの狙撃はレキだったんだな」

「アリアさんが作戦進行上必要になるかも知れないと依頼されました」

あのアリアが……そうか。

「ありがとな。お前が居なかったら俺達は死んでいた」

「……………」

レキは無言のまま立ち去って行った。

「新光さん……ナンパしてない」

香苗がなぜか無表情なのはなぜだ？
うし、やっと見つけた。

皆で入るが現場はなぜか修羅場と化していた。

「とにかく……俺は武偵なんてもう辞めるんだ」

なにこれ、一番ダメなタイミングに来ちまった。
はむっ。

「聞いているのか」

すまん、盗み聞きしているよ。

てかアリアに聞いているんだな。

はむっ。ももまん甘！

「分かった…分かったわよ。あたしが探してた人はあんたじゃなかったわ」

なんか本当になにこれ来ちゃ駄目な所だな。
はむっ。

「……で、シン達はいつまでそこにいる？ってあたしのももまん！」

お、気付いたか。

食っているももまんも。

「あんたの分もあるよ」

とももまんが入った紙袋をアリアに渡す。

シュパ！

速、もう食ったぞ。

「で、なんでこんなに空気が重いんだ？」

「シン、それ言うな」

……そうだな。

「……武偵憲章一条。仲間を信じ、仲間を助けよ。あたしは同盟として組んだチームに半信半疑を持ってしまった。武偵失格ね」

ああ…それか。

「き、気にしないで！私だって最初信じてなかったから」

香苗はそう言った。

そりゃそうだ、チームの大半が超能力使うでな。

「まあこいつらは普通ではないからな」

「おい」

と浩司が怒り春奈は苦笑いして鷹は無表情。

「皆違う科なのに超能力使えるなんて思いも知らなかったもん」

アリアはツーンとする。

ツーンとするなよ。

「じゃあ説明する。」

説明しようとした時にアリアが、

「シン。あたしはあんたたちの同盟を切るわ」

と、同盟の契約破棄を告げた。

「……………何故だ？」

俺のかわりに浩司が言った。

「あたしはバカだったのよ。出てって」

今のアリアではどう説得しても意味ないようだ。
てか何がバカだったんだ？

「……………分かった」それから皆は解散した。
少し外で話し合いをしたが結論は保留。
少し様子見となった。

バスジャック事件は終わった。
しかし武偵殺しは捕まっていない。
そしてこの指輪。

あの時光り輝いていたが今は輝いていない。
どんな指輪だ。
と考えていたら公衆電話が鳴り響く。

「うおっ！なんだ？」

このタイミング……………まさか。
公衆電話の受話器を取る。

「もしもし」

「久しぶり。新光くん」

この声は！……

EJ……俺を支援してくれている（まだしてないが）組織。まずは質問させてもらおうか。

「EJ……どうゆう事だあの紙は！」

香苗が持っていたあの文章にイラツとした。
なぜあんな風にしたんだ。

「すまん、すまん。だが中々の人材だったろ？彼女は」

「ああ、バスジャックの時の対応。あれは素晴らしかった。……で、今度はなんだ？」

「ああ、もう知っていると思うがもうあの指輪の秘密を知ったかね？」

秘密？なんの事だ。

「その様子だとまだ知らないようだね。……えーと、あの指輪は全ての質量、重力操作が出来る。もちろん空気もね」

重力……ねえ。

いまいちよくわからんが……

「成る程、それでロシアの組織もイ・ウーというやつも欲しがる……というわけだがイ・ウーとはなんだ？ロシアの組織の名くらい知

っているだろ？」

かなりの質問責めだがこれぐらいしないと気が済まない。
それに情報が欲しい。

「……イ・ウーは我々と同じく過去の産物であるもの。
そしてロシアの組織……ヴィンチェンゾ・ファミリーも超能力を持
つ者を集めて主に殺し屋としてやっている」

ヴィンチェンゾ・ファミリー、殺し屋か。
そんな奴らと戦うのか。

「こんな指輪があるから俺にも超能力使えるのか」

全く、はた迷惑な指輪だ。
まあ超能力使えるからいいが。

「君も超能力持っているじゃないか。自前の」

「は？俺は持ってませんよ？」

現にどんな超能力なのかもしれないし。

「君は超能力を持っている。それにパートナー、香苗も別の超能力
を持っている」

「……そうか」

と、通話を終え帰る。

俺に超能力が？

香苗も超能力を持っている？
そんな偶然があるのか？赤く染まる夕暮れに白いフリフリが目立つ
制服が目止まる。

「あー！シンシンだあ！ヤッホー！りこりんだよあ！」

峰理子が凄いハイテンションで抱き着いて来た。
ぐ、む、胸がああ！

「撫で撫でしてえ！」

頭を擦って誘惑している。

誘惑する気だが俺はそんなに弱くはないぞ。
それにな……

「理子、どうしたんだ？」

「うーんとね。……なんかこうしたいんだあ」

俺はフー、と息を吐きこう言った。

「理子……いや、武偵殺し」

俺は静かにこう言った。

理子とはぼけたような顔をしていた。

そう、理子はバスジャックの調査をしていたのだ。
調査をしていた奴が犯人とはわからないだろう。

「ふーん、どうやって分かった？」

理子の能天気な声が消え殺気が滲み出る声が出た。

「通信科コネクトの春奈からだ。あいつをただのコネクトだと思うなよ」

そう、春奈はテレパシーの他にサイコメトリングという超能力を持つており他人の記憶や残留思念を読み取ることができ、自分の思念を送る事ができる。

オープンカーの残骸に残っていた残留思念を読み取った結果、理子が犯人だと判明したが極秘にしてアリア達には知らせていない。

「うわー、ばれちゃったかー。それよりも新光、イ・ウーに來ない？」

武偵殺しの上にイ・ウーだと？
てか勧誘かよ。

「何故俺を狙うんだ？」

「知らないよフロフヘシオン。教授達フロフヘシオンはあんた達を欲しがっているようだけど
教授？なにそれおいしいの？

「あんた達？俺の他にもいるのか？」

イ・ウーは俺の他に違う人を狙っているのか？

「そうだよお、ココウでしょ、タナでしょ、ハルハルでしょ、カナカナでしょ。皆新光の仲間。今回のことでよくわかったよ」

ココウ……浩司のことで

、タナ……鷹のことかな、てか田中の二文字かよ。
ハルハル、……春奈で、カナカナ……多分香苗か。
チーム全員がイ・ウーに狙われている、だと？
なぜだ？

「ふふふ、新光驚いてる？そうだよ。どう？来る？来ない？あそ
こ天国だよ？」

天国？地獄の間違いじゃないのか？

「お断りするよ。何故俺達を狙うかわからんからな」

「ふうん、わかったよ。じゃあね」

と、理子がガス缶を投げ白い煙が立ち込める。
まさか毒ガス！？
色々な化学兵器を思い浮かびその場から離れる。

煙が晴れた時、理子は姿を消した。

ただの目くらまし……まさか理子がイ・ウーの一人だったとは……
油断が出来ない。

日曜日

日曜日、アリアは退院し俺と浩司と香苗は武偵病院に行ったが既に
出ていったようだ。

だがすぐに見つかった。歩道に歩いている私服姿とピンク色のツイ
ンテール、アリアが居たのだ。

ただ手に包帯を巻いている。

離れすぎず近すぎずの距離を保ちながら尾行を開始。

「アリアはどこに行く気だ」

「シン、あまり前に出るな。気付かれるぞ」

「あ、キンジさんもいる」

アリアとはかなり遠いがキンジが信号で待っていたが見つけたらし
くアリアが歩いて行った方向に行く。

どうやらキンジも尾行するようだな。

アリアは新宿に向かっていているようだ。

なんかアリアへ向ける視線が急に増えた気がするな。

そりゃそうだ。あんなに可愛い子はめったにいないからな。

そしてアリアが向かっていた行き先が判明した。

「警察署？」

新宿警察署。

アリアはここで一体何をするんだ？

てか警察署でかいな。

「下っ手な尾行。シッポがによるによる見えるわよ」

ばれたか!?

いや、ばれたのはキンジだけか。

「なんだよ、気付いていたなら言えばいいだろ」

「迷っていたのよ。教えるべきかどうか。あんたは武偵殺しの被害者の一人だから。あとシンも出てらっしゃい」

「え!?!え!?!」

アリアが指を指した向きに向いたキンジは目を点にした顔をした。

「あはは〜」

ばれたかあ。

「す、すみません」

「キンジ、貴様インケスタだろ。尾行くらい気付け」

浩司は中々きついこと言うがキンジ、お前気付けよ。何、目が点になっっているんだよ。

「一般中出身一般中の女子には気付いたけどなあ」

とキンジが言い訳しているがキンジに尾行する人なんているんだな。

やはりキンジファンの女子か？

「まあ、もう着いちゃったし。いいわ、ついてきて」

と署内に入っていくアリア。

キンジは……疑問符が見えるぞ。留置人面接室、どうやらアリアは留置中の誰かと話すのか。

留置人面接は三人までしか入れないからここは俺が行く、というわけで二人は外に待機となった。

アクリルの板越しのドアから出てきた美人、美しい長い髪にオニキスのような瞳。

アリアと同じ白磁のような肌。

こんな綺麗な人が一体何をしたんだ？

「アリア。この方、彼氏さん」

「ち、違っわよママ」

アリアの傍に居たキンジを見たようでアリアは

「ち、違っの。こいつは遠山キンジで……そっいつのじゃないわ。絶対に」

とスパッと言い切る。

「後ろに居る方は？」

と今度は俺達に向けられる。

「あ、ああ。俺は小野新光」

「初めまして。わたし、アリアの母で、神崎かなえと申します。娘がお世話になってるみたいですね」

「あ、いえ……」

とキンジは滑舌を悪くして返す。

「ママ、面会時間が少ないから手短に話すけど、こいつは武偵殺しの被害者なのよ」

「まあ……」

「奴らの動きが活発になってきているのよ。すぐにとっ捕まえてやるわ。待ってて！」

この言葉を聞いたかなえさんは目をそらし暗い表情を見せる。

「武偵殺しの件だけでも無実を証明すれば、ママの懲役864年が一気に742年まで減刑されるわ。最高裁までの間に、他もぜったい全部なんとかするから」

懲役864年!?

終身刑みたいなものじゃないか！
キンジもかなり驚いている。

「気持ちは嬉しいけど……アリア、もうパートナー見つかったの？」

「そ、それは……」

「大きな敵と戦う前にあなたを理解してくれる人を見つけないきゃ」

「あたしなら一人でも…」

「いいえ、アリア」

顔を伏せたまま言ったアリアをかなえさんがそれを否定する。

「あなたを受け継いだ才能を発揮するには必要なことよひいおじい様やおばあ様にも優秀なパートナーがいらっしゃったでしょ？」

「わかっている。いつまでもパートナーを作れないから、欠陥品とまで言われて……でも時間が」

「人生はゆっくりと歩みなさい。早く走る子は、転ぶものよ」

アリアがやっと顔を上に上げかなえさんの目を見る。

「神崎。時間だ」

管理官が壁の時計を見ながら告げる。

もう面会時間が終わったのか。

「ママ、待ってて。ママに濡れ衣を着せた奴らを公判までに必ず全員捕まえるから！」

「駄目よアリア！イ・ウーに挑むのはまだ早いわ！」

イ・ウー……イ・ウーだと！？

「時間だ！」

管理官が無理矢理かなえさんを引きずり無理矢理退室させる。
これが重罪を犯した者の扱いかよ。

「止めろ！ママに乱暴にするな！」

「アリア。まずパートナーを見つけて！その手の傷は一人で対応できない危険に踏み込んでいる証拠よ」

アリアが左手に包帯で隠しかつ見せないようにしていたがとっくに気付いていたらしく、かなえさんがアリアを叱る。

「アリア！」

「ママ！ママ〜！」

アクリル板を叩きドアが閉ざされ叫びが虚しく消え去った。

曇り雲の中アリアは新宿駅へ戻る。

「……すまん、皆。先に帰ってくれ」

キンジはすでにアリアの後を追い新光は先に帰るように浩司と香苗に言った。

「分かった」

浩司が短く言い香苗は

「私は新光さんと一緒に居ます。パートナーですから」

と香苗は同行する事になった。

歩きながら考えていた。

イ・ウー

かなえさんを懲役864年を着せた組織が俺を、俺達を狙っている。そんな事が……

「あ、雨降ってきましたね」

歩き始めてから十分くらいにポツポツと雨が降り始めた。

嫌な雨だ。

こんな時にジメジメとした空気は。

そんなのを気にせず歩いている時に黒い車と一人の男が立っていた。

近くに御偉いさんがいるのか？

いや、そうではなかった。

「お待ちしておりました。小野新光くん、九条香苗さん」

ゆっくりとはつきりと言った男、一体何者だ。

「私はEJの者です。車の中でお話しましょう。」

岸田浩司くんもいます」

浩司もだと!?

しかもEJの一人。

「わかった。香苗、来てくれ」

「え、はい」

と黒い車……リムジンに乗る。

流石高級車、ワインとかある。あとなぜか菓子もある。

そしてあの男が言ったように浩司も乗っていた。

「浩司！どうしてお前も」

「お、俺はシンの知り合いだと言われたからだ」

お前はそんな風にホイホイとついてくるわけないだろ。

あ、リムジンが動き出した。

どこに向かおうっていうんだ？

「大丈夫です、君達の寮に向かっています。」

と男が誘拐はしませんと言っているような事を言う。

「貴様は何者だ」

と浩司が威圧をするが、

「私は草加匠くさかたくみと申します。イ・ウーの敵対組織であり、あなた方を保護、援助するEJという組織の一人です」

草加はその威圧を感じないのか動揺しないのかそれを返す。
本当に肝が据わっているな。

「あなた方は昔、日本のある機関のメンバーが持っていた超能力を
持っています」

「日本の機関ですか？」

と香苗は前に置かれていた菓子を食べる。

「はい、そしてイ・ウーはその力を欲しあなた達を狙っています」

成る程、その日本の機関のメンバーと同じ力、超能力を俺達が持つ
ているのか。

イ・ウーはそれを欲している。

持っている？おかしいな。俺や香苗は持っていないぞ。

「さてよ、浩司とかならわかるけど俺と香苗は持っていないぜ？
持っていない人間がイ・ウーに狙われるなんて……」

「それはあなたがまだ知らないだけなのです。あなた方の武偵高に
も超能力関連の科がありますからそこに行けばわかると思います。」

SSRのことか。

俺には無縁のことだと思っていたが。

「それよりも何故EJが俺達を保護するのかよくわからんが」

「……………預言者」

草加は小さく呟いた。

預言者？

「預言者が言っていました。『機関のメンバーを持つ超能力者が東京武偵高校に集まり大きな組織と大きな戦いに巻き込まれるであろう。あなた方は彼らを守って下さい』と……そしてその指輪はEJの計画の一部だったからです。」

指輪が……計画の一部？

それに預言者がそんな事を？

先に女子寮の前に止まり香苗が降り、今度は男子寮に止まり二人は降りる。

「では何かがあった時に電話してください」

と草加が窓硝子を閉じ走って行った。

あの運転手もEJの一人なのか？

腰に挿していた中国が使っているような剣も持っていたし。てか電話番号しらねえぞ！

「シン、話したいことがある」

「ワリイ、今したくない」

自室に戻りベットにダイブする。

後で風呂に入るか。

「ん？なんだこれ」

机の上に何か箱が置かれていた。

「誰のだ？てかどうやって入ってきた」

と疑問に思い開けると弾が入っていた。
しかしその弾は武偵弾らしきもの。

「なぜ武偵弾が!？」

武偵弾とは超一流の武偵にしか流通しない特殊強化弾。一発百万は
下らない弾がある。

5・56mm弾と9mm弾が百発はあるぞ。

そこに手紙があつた。

どれどれ？

.....

EJ.....一言言わせて貰う。

これ何て言う対空兵器ですか？

日曜日（後書き）

さて、新キャラである草加匠……草加はアニメ・漫画である『ジパング』から抜き出した（キャラ的にも）

匠は……まあ……あれだよ。ニコ動の『iningo』さんが言っていたあの大工さんだ。

詳しくはニコ大百科にて。

で、草加匠となったが……あれ？アニメも『たくみ』と言わなかったか？

という疑問で調べてみたら……『草加拓海』

……まんまー！？ただ匠と漢字が違うだけだったー！

どうしよっかなー？と考えた結果、そのまんまにしました。

「草加ー！見つけたぞお！」

角松さん、出て来ないで下さい。あなたが出るのはアニメと漫画だジパングのことけですよ。

「るせえー！作者あー！俺にも出させろー！」

断る！（キリッ）

5・ハイジャック

次の日、アリアは休んだ。
なぜか知らないけど。

そして四時間目を終えた時にキンジが校門から出ていくのを見た。
あいつ……どこに行くんだ？

そんな事を考えたが止めて。
アサルトの施設に行くか。

雨だ。風も強い。

台風が近づいている証拠なんだろう。

ただ、キンジとアリアの行方がわからない。

あ、理子も朝から居なかったな。

そっいえばあいつイ・ウーの一人だと言ったな。

射撃場でルガー拳銃を撃つ。

バシバシ、と板に当たる。

「ふー、休憩するか」

ルガー拳銃をホルスターに納め休憩をしていたら携帯の着信音が鳴る。

浩司からだ。

「もしもし」

「シン！アリアが乗った便がハイジャックされた！教室に來い」

「なんだと!？」

すぐに教室に向かい走り出す。

「おい！本当か浩司！」

全速力で走り教室に来た。

やべえ、疲れた。

「シン、ああ今通信でキンジと連絡とれた」

そうか、キンジはアリアの元に……それに武偵殺しも。

「だが問題が起きた。燃料漏れが起きてあと15分しか持たない」

「それどころか自衛隊が羽田空港を封鎖しやがった」

「しかも撃墜しようとしている」

武藤、不知火、浩司が次々と情報を出す。

「なんだと!?!」

防衛省の野郎。

すぐに電話を取り出し自衛隊……親父に連絡をつける。

『はい、こちら陸上自衛隊』

よし、繋がった。

「初めまして。小野新光と申します。父、おのまらひ小野勝と連絡をとりたい

のですが」

『勝一佐ですね。少々お待ち下さい。ブツッ。……勝一佐だ。新光
どうした？』

「親父に頼みたい事がある」

実は…と言いたかったが。

『新光、分かっている。ハイジャックの事についてだろ？俺も今
まで防衛大臣、航空自衛隊幹部に交渉しているが動いてもくれない。
申し訳ない』

バ幹部（バカと幹部を合わせた言葉）は市民の命を見捨てるほど腐
つちまつたんだよ。

自衛隊の本分を忘れるな。

「ありがとう親父」

と回線を切る。

「武藤、代わってくれ」

「あ、ああ」

武藤が握っていたスタンドマイクを借りてキンジに連絡をつける。

「キンジ、防衛省……自衛隊に交渉した結果……駄目だった。無理
矢理着陸するしかない」

台風で海は荒れている。
水上での不時着は駄目だ。

『武藤。滑走路にはどれぐらいの長さが必要だ？』

キンジ、この冷静さは……お前まさかヒステリアモードに……それにどこに着陸しようとしてるんだ？

「風向きにもよるな。二千メートルちょっとは必要だ」

二千メートル……まさか！

「おいおい！学園島に着陸するつもりか？」

南北二キロ…理論上はできるが二キロメートル以上は必要だ。
だいたい二千ちよつとだから直線では無理だぞ。

『少し正解だ、シン。正確には空地島のほうだ。
東西五百、南北二キロ、対角線上に降りれば二千六十一メートルはとれる』

こんな土壇場な状況でか、キンジ凄いな。

「ただキンジ、あそこには何もない、ただっ広い空地島だぞ。着陸できるわけがない」

空地島はたしか風車しかなかったはずだ。
明かりのあの字もないぞ。

『なんとかするよ』

「お前……チキショー！勝手にしやがれ！」

スタンドマイクを叩きだし武藤は教室から出ていく。

「シン……」

「なんだ？」

「草加から聞いた。その指輪、質量や空間の重力を操れるようだな」

草加から？

あいつ、浩司にも言ったのか。

「その力を使えばあの航空機も短い距離で止めれるはずだ」

航空機の重量を増加させ止めるとして事だな。

「……そうだな。コウ、空地島に行こう」

ミッションは開始した。

航空機を止めるミッションが。

「時間がない。俺の力で行くぞ」

「ああ！」

二人は空地島に向かった。

この指輪の力を使えば助かる。

そう信じて。

暴風に見舞われた東京都に浮かぶ空地島。

風車が多数立っており、強風のためブレードが回らなくなっている。そして、武藤がアムド等の懐中電灯マッライトを無断で借りて滑走路の誘導灯となり航空機が降りてきようとする。

「見えた。降りてくるぞ」

チャンスは一回きり。

ミスれば乗客全員死亡する。

着陸した瞬間に使う。

キィィとエンジン音を鳴り響かせ航空機が降りてくる。

そして着陸、やはり地面が濡れているからあまりスピードが落ちていない。

「今だ！」

使い方は覚えている。

念じていれば使える。

指輪が黒く光り輝き航空機のタイヤの重量を増加させる。

ただタイヤの重量が耐え切れなくなりバーストしたら火花が地面に付着している燃料に引火、爆発する惨事にも。

これは時と運。

「止まれ、海に落ちる前に止まれ！」

その願いが叶ったのか海まで約五百メートル程の地点で止まった。

「シン、止まったぞ」

「ああ。よかった」

今回も指輪のおかげでまた命を救ったんだな。

……ヴァインチェンゾ・ファミリー、イ・ウーはこれを何に利用するつもりなんだ？ キンジはあの後一回病院送りになり現在、部屋のベランダでぐっ तरीとしている。

キンジから聞いたがやはり武偵殺しは理子だったようだ。

俺は見舞いしに行くがアリアがキンジの部屋から出ていく。

「アリア？ どうしたんだ？」

ぶつきらぼつに聞く俺はアリアの顔を見た。

かなり暗い表情をしていた。

そして素通りした。

「アリア……」

キンジの部屋に乱入するとキンジはぐっ तरीとベランダに寄り掛かっていた。

「キンジ」

「よお、シンじゃないか」

キンジが生気が失ったような顔をしている。

何を話したんだよ。

「お前いいのか、アリアどっか行っちゃまうぞ」

「……いいんだよ。これで……普通の高校に通えるんだ」

……だめだこいつ、はやくなんとかしないと。

「キンジ、転出申請の書類はどこだ」

キンジが軽く指を指した。

机の中か。

書類を取り出しルガー拳銃で穴を開ける。

「お前なんて事を！」

風穴と化した書類をベランダから放り投げる。

紙は風に乗って飛んでいった。

「春奈から聞いた。お前、遠山家は正義の味方とかな」

「ああそつだ！だが俺は兄さんが死んで」

「そのお兄さんは市民を守るために正義の味方として動いたんだろ？お前はどつするんだ。お兄さんと同じく市民……アリアを守れよ」

怒りを任せキンジに怒鳴ってしまったがキンジは部屋から飛び出して行った。

「それでいい……」

疲れたな。

すこしテレビ見させて貰う。

キンジが出ていってから三十分くらい経ったのだろう。

『次のニュースです。チューク諸島近海に出没した海賊が残骸として発見され漂流者の証言では旧日本』

「まだ分らないの？」

ドアの開く音がした。

アリア、戻ってきたんだな。
とりあえずテレビを消した。

「あたしは神崎・ホームズ・アリア！」

ホームズ？

「ホームズ？お前が？」

「うん」

それを聞いたキンジ手を頭に当て何か悩んでいた。

ホームズってなんだ？
あとで聞いてみよう。

と、思ったその時にドンドンと誰かがドアを叩く音がした。

「キンちゃん！どうしてメール返信してくれないの！」

うおー！キンジが凄い速さで机の上に置いてあった携帯を取ったぞ。
そしてキンジ、青ざめている。

「入るよ。キンちゃん」

待てよ、この声、まさか！

ズダン！と派手な音と煙を撒き散らかせながら入ってきたのは……

ほしぎしらのゆき
星伽白雪

武装巫女で来やがった！

「やっぱり居た！神崎・H・アリア！」

抜刀した白雪はアリアに殺気立たせて走る。

「し、白雪！これはだな……」

キンジはアリアの前に出て弁解をするが、

「キンちゃんは悪くない！キンちゃんは騙されているだけえ！この泥棒猫！キンちゃんを汚した罪死んで償え〜」

完全にアリア狙いに刀を降り始めた。

ああ、ヤンデレ白雪、ここに参戦か。

「じゃあ、ry」

「死んじゃえ」

キンジの部屋に乱入してきた武装巫女のこと白雪はアリアに刀を振り下げる。

「みやあ！？」

なんかネコみたいなかわいらしい声を上げたアリアはぱい、と真剣白刃取りをする。

初めてみたぞ、それ。

流石Sランク。

俺には無理な芸当をこなすな。

「ちょ！？なんなのよ！？」

訳もわからないアリアはそのまま巴投をし飛ばされた白雪はくるりと空中回転をし着地する。

あんなところから巴投とか無理すぎるぞあれは。

「死んじゃえ死んじゃえ死んじゃえ！キンちゃんは私の物！キンちゃんのもの〜！」

白雪が泣きながら刀を振り回している。

よかつたなキンジくん。

彼女の所有物でもあり君の所有物でもある発言があつて。

「キンジ！あたしに援護しなさい！」

「キンちゃん、この女を後ろから刺して！」

と援護を要請する二人だがキンジは

「勝手にしろ」

と強く拒否をする。

そしてキンジはベランダに向かう。

「おい、キンジ。どこに行こうというのかね？」

「キンジいゝゝ！！」

バババン！とガバメント二挺……一挺はベランダに、もう一挺は白雪に向け発砲し白雪は刀で弾丸を切っている。
もちろん俺は……地に伏して身を固めている。
そしてキンジは防弾製の物置に引きこもった。

「キンジ！入れてくれ！てかお前戦えよ！」

「逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ」

物置から微かに震え上がるキンジの声。

お前はシンジくんじゃないだろ！

てか逃げちゃダメだって言うのなら出てこい！

キンジの部屋はまだ銃声と刀が何かとぶつけ……切っている音がま

だ響く。

はあ…二人を駆逐するか。

部屋に戻り指輪を光らせ二人の空間に超重力化させる。

「うっ！」

「な、に!？」

ズン、と重くなり刀がドスン！ガバメントがガン！と重い音を鳴らし床に落ちそして床に凹みが生じる。

「シン……な、にを……した……の」

「う、うう……」

超重力に押し潰されそうな二人に俺は

「何、ただどうゆう訳か聞きたいんだ」

尋問を開始した。

戦争映画みたいな音がようやく止んだので出たら……

「成る程、キンジに悪い虫がついたからそれを抹殺しようとなえ」

なんか新光が二人を地に伏させ尋問している妙な光景が見えた。
オイオイ、床が凹んでいるぞ。

「うう……あ、キンちゃん！」

「あ、シンジ……じゃなかったキンジ。一応こいつらを止めたぞ」「シンジって誰だ。」

「キンジ！はやくこいつをどうにかして！」

アリアは面白いほど頭が床に接しており持ち上がらないようだ。

そのままにしてほしいが床に底抜けが起きたら面倒だな。

「シン、もう止めとけ」

「わかったよ」

新光がそう言ったら二人は力が抜けて震えている。

新光、何をしたんだ。

てか白雪、服が開けてるぞ。

しかも下着が……黒だと？

やばい、ヒスる。

「キンちゃんさま！」

服はそのままにし俺の前に正座をした。

「し、死んでお詫びします、キンちゃんさまが私を捨てるんならアリアを殺して、わ、私も今ここに切腹して、お詫びします」

なんだか訳のわからないことを言い出したな。

「白雪」

「は、はい!」

俺はしやがみ白雪の肩を掴む。

白雪は「ほう」と言ったがそれはスルーの方向で。

「俺は白雪を捨てない。だからアリアを殺したり自殺なんてしないでくれ」

ああ、ヒスつちまったな。

白雪は頬に赤く染まる。

「は、はい。キンちゃんさまがそう言うのでしたら」

よし、今回のヒステリアはよくやったな。

俺の部屋で戦争をするのは止めてほしい。

「アリア、俺はお前も捨てたりはしないぜ」

.....は？

ヒステリアモードの俺、何言ってるんだ？

「な、何言ってるの!? あんたド「ストップ」」

シンがアリアの口を手で押さえドレイという単語を出さないようにする。

ナイスだ新光、よりややこしくならずに済んだ。

「アリアを捨てない……やっぱりそんな関係に」

「白雪、誤解だ。一時的にパーティーを組んでるに過ぎないんだ。俺のあだ名を知ってるだろう？言ってみろ」

「女嫌い」

「だろ」

「あと昼行灯」

「それは今関係ない」

「は、はい」

余計なあだ名まで出すなよ。話がこじれるだろ。

「で、でもキンちゃん……それ」

白雪はその白魚のような指で俺のズボンのポケットを指す。そこにはゲーセンで取った、謎のネコ科動物レオポンのストラップが露出していた。

「ペ、ペパールツクしているうー！」

「ペパールツク？」

アリアは眉を細め新光は……笑い堪えていた。白雪は噴水みたいに涙を流していた。

「ペアルックは好きな人同士でするもんだもん！何度も夢見てたのに！」

「あたしとキンジはそういうんじゃないのよ！こんなヤツとなんて一ピコグラムもそっとう関係じゃない！」

「おいおいシンジ……じゃなくキンジ。いつの間にそんな関係……ってアリア！跳び蹴りすんな！」

新光があほらしい事を言いアリアは凄い勢いで跳び蹴りをした。

「じゃあ、キンちゃんとアリアはキスとかしてないよね？」

「……………」

「したのかキンジ」

「……………」

新光は怪しい目で二人を見るがアリアは真っ赤になり俺は白雪、新光の目線をそらせた。

「し……………た……………の……………ね。ふふ、うふふ」

白雪、今のお前R指定だぞ。

すでに白雪の瞳孔がっぴらいておりまるでホラー映画に出てきそうな目をしている。

「た、確かにしたけど……………だ、大丈夫だったのよ！」

大丈夫？

「昨日分かったんだけど！」「……」

「こ？」

「子供はできなかったから！」

「アリアは力いっぱい腕組みして」「どうよ！？」とドヤ顔をし、さらにチーン……………」

とお葬式の音が聞こえ白雪から魂みたいなのが抜けていき倒れ、

「ぶははは！こ、子供！？」

と新光は大爆笑。

「アリア、なんで子供なんだ？」

冷静な俺はその理由を聞く。

「だ、だってキスしたら子供ができるって、小さい頃、お父様が」

ホームズ家……………性教育くらいちゃんとしろよ。

「そうか、アリア。それは間違っている」

「じゃあどうやったらできるのよ！教えなさい！」

「駄目だ。今知ったらアリア仰天しちゃうよ」

「そんなこと言って、本当は知らないでしょ！」

「知っているぞ」

「じゃあ教えなさいよ！」

「教えれない」

と、ヒスったキンジがアリアに説得をしている間に白雪は忽然といなくなる。

そして俺の足元に紙が落ちていた。

「なんだこれ？」

何か書かれていたから拾い読んでみた。
ただ一文、

『SSRにお越しく下さい』

と書かれていた。

白雪さん、もしかして……気付いたのか？

「あ、そうそうシン」

とアリアが何か思い出したようなことを言い始める。
それは、

「再度あんたのチームと同盟よ！」

チーム同盟のことだった。

なんだそのことか。

「わかった。皆に伝えとくよ」

それにしてもこの部屋……かなり凸凹だな。

誰がこんな事を……俺か。

6・能力判明

次の日、朝から超能力捜査研究科（SSR）に来た。

SSR……超能力を調査する科だがなんかすっげえ悪趣味な場所だった。

なぜか黒いローブを着たなんかオカルト臭プンプンで悪魔でも呼ぶような儀式があったからだ。

まあ白雪達小数は普通の予言とか科学で解明するとかマシなのもあるが……

「……えーと、香苗？お前もか？」

普通朝からSSRに来る人はいないのに、まして違う科である香苗も来たのはなぜ。

もしかして……

「草加が言っていたこと気にしていたのか」

「はい、凄く気になります。自分にも本当に超能力があるのかどうか確かめてみたいです」

確かにあるかも知れないけど……見に行くだけでもわかるかもしれないな。

「そうだな。行くか」

確か、白雪が居るのは……どこだったけ？

SSRの棟はなんか大半が魔法陣らしいものが一部屋に一つずつあ

り凄く気味が悪い。

だが気味が悪くない場所もある。
ある部屋、真っ白な教室に白雪が居たが……出迎えしてほしかった。

「小野くん、ごめんなさいね。こんな朝早く。
あの人は？」

「く、くくく九条香苗です」

香苗のテンパリが半端ないな。

「そ、そんなに緊張しないで。小野くん、なぜここに呼んできたの
かわかりますか？」

んー、うん、あれだな。

「超能力を持っているかもしれない、と？」

白雪はコクリ、と頷く。

「はい、だから調査します」

白雪は制服の懐から白い札二枚取り出した。
ただ真っ白な札である。

それが渡される。
俺と香苗に。

「それに強く念じて下さい」

念じる？

超能力だから念じるのが普通か。

心の中（ふん！ぬぬぬぬ！）

だめだ。

……ん？何か文字が浮かび上がったぞ？

「……小野くんサイコキネシス念動力ですね。香苗さんは治療ヒーリングですね」

サイコキネシス……念動力か。

しかしまさか本当にあったのか。

香苗は治療ヒーリングか。香苗らしいな。

「す、凄いです！私にも超能力があるなんて！」

そつだよなあ。

今まで使わなかったのが不思議だ。

まあ元々使えたのかわからなかったし。

「……知らなかったのですか？」

いや、白雪。知らなかったらなんだよ。

まあいいや。

「この結果、SSRに報告するのか？」

そつなったら面倒だ。

SSRの変な奴らに目を向けられる。

「は、はい。あとその指輪を見せて下さい」

この指輪か……例の重力操作で悟られたか。
まあ白雪なら

「！……小野くん、これは……いえ、なんでもありません」

いや白雪、かなり気になるぞそれは。

「……あ、そろそろ時間だ。ありがとな白雪」

で香苗は……おい大丈夫か？

「それよりも小野くん。キンちゃんとアリアの関係はどうなの？」

白雪が涙目+なんか死んだような目で見てくるがやめろ、怖いわ。

これはどうするべきだろうか。

言っちゃうか。

「あー、そうだな。……付き合……じゃなくいい関係になると
思うよハハハ……」

やべ、何故か白雪の目が一段と怖くなっている。

逃げたい。

「うふ、そう……うふふ、わかったわ。うふふふ」

こ、こえー！

に、逃げよう。

「も、もう時間だし、い、行かないとな。おい香苗、行くぞ」

「ふ、ふえ!?!」

お前何驚いている。

逃げるぞ、香苗まさか、

「腰抜かしたか？」

「す、すみません」

テンパリすぎて腰抜けるのおかしいぞ。
仕方ないな。

「すまん、香苗」

「ひ、ひゃあ!?!」

お馴染みのお姫様抱つこだが香苗、ほんとテンパリすぎ。

「ありがとな白雪」

「ちよ、ちよつと新光さん!?!」

香苗は頬を染めながら叫ぶが俺は颯爽と立ち去り、残ったのは白雪一人。

「いいなあ、私もキンちゃんにあんなことされたいなあ」

通常モードに戻った白雪はただぽつんと呟いた。

アドシールドと対ナイフ術

でお姫様抱っこしたわけだが香苗にぶたれた。
気持ちにはわかるけどさ、腰抜かないでくれないか？

あと朝面白かったな。

アリアが朝っぱらから本を読んでからキンジに風穴をあけられそうだったし。

「新光くん、どうしたんだい？」

俺がある考えごとをしながらパオズを食っていたら不知火が心配そうに話しかけてきた。

パオズとは中国の料理の一種で小麦粉の生地を蒸して作り豚肉やらの具を包む食べ物。

肉まんに近い食べ物だ。

因みに好物だ。

そして今回の中身は豚肉だ。

「ん？なんでもない」

パオズ美味しいな。

そして考えたのは超能力だ。

あったことが嬉しい。

ただそれだけ。

「聞いたぜキンジ。ちよつと事情聴取させる。逃げたら轢いてやる」

車輜科の武藤が押しかけてくる。

「なんだよ事情聴取って」

キンジがわけわからないように聞く。

「キンジお前、星伽さんと喧嘩したんだって？」

ほお、もう噂が広がっていたのか、流石武偵高。

「星伽さん沈んでたみたいだぞ？どうしたんだ？」

「白雪とはどうしたも何も……武藤お前、白雪見かけたのか？」

「今朝、温室で花占いしてたのを不知火が見たって言うからよ」

へえ、あの後に花占いか。

あれ？俺があんなことしたせい？

「なんだよ花占いって」

知らないのかキンジ。

「ポピュラーじゃないか」

「知らねえよ。アリア聞いたことあるか？」

アリアは知らないと首を振る。

因みにアリアはただ今もまんをハムスターのように頬張って食っているため静かである。

「あれだろ、花から花びらを一枚ずつちぎって、スキ、キライ、スキ……ってやつだろ？」

キンジはあー、あれか。と見える顔をする。

「僕に見られて気付いたのと、一時間目の予鈴が鳴ったのとで……占い自体は中断したけど。なんか、涙ぐんでるみたいだったよ？で、なんで別れちゃったの？もう、愛が冷めちゃったとか？」

うきゆうつ、とアリアがももまんをノドに詰まらせる音がした。

大丈夫か？アリア。

アリアが使うコップを渡し水で詰まったももまんを胃に流す。

過剰反応しすぎだろ。

「あのなあ……どこでどう話がこじれてそうなるんだ。そもそも俺と白雪はそういう関係じゃない。ただの幼馴染だ」

あれは幼なじみか？

キンジと白雪の関係は知らんけど。

「幼なじみ、かあ。はぐらかし方としてはポピュラーな選択肢だね。噂では神崎さんがヤキモチをやいて、星伽さんに発砲したって聞いたよ？だから、僕の読みは遠山君と神崎さんがうまくいって、女子二人が決闘した……ってセン。だって神崎さんアサルトでも遠山君の話ばかりしてるもんね。しかもすごく楽しそうに。あと小野君のモ」

何故そこで俺がくる！？

しかもオマケみたいな感じに、悲しいぞ。

「こ、こっ、このヘンタイ！」

「ぐっ!?!」

「あぶね!?!」

アリアは真っ赤になってキンジの顔面と俺の顔面にパンチを入れてきたがキンジにはヒット、俺は反射的にガードし難を逃れたがアリア、おかしいぞ。

不知火にやれ。

「ハッキリいっておくけどねっ。あたしが白雪を追い払ったのは、ヤッ、ヤキモチとか、そういうんじゃないの。あたしとキンジはパートナー。す、好きとかそういうんじゃない。絶対、絶対、ぜえー! ったいそれはない。これは本当に本心の本音よ!あとシンはドレイ兼同盟!」

とアリアが言ったら不知火はこっちに向いて。

「小野君、アリアとどんな関係になっているんだい？」

不知火、違う。

誤解だ。

「不知火、違うぞ。ドレイはキンジだ」

「おい、シン。余計な話をするな」

とキンジは反論する。

「余計な話とはなんだ。
キングオブドレイ、遠山キンジの誇りはどこに行っちゃっただよ！
？」

「何わけわからんことを言うんだ」

そこから発展し、武藤がヘンな遊びしているのか？という疑惑があったが無視し、

「不知火、アシアードはどうする？代表とかに選ばれていたはずだが」

アドシアードとは年に一度行われる武偵高の国際競技会だ。

「たぶん競技にはでないよ。補欠だからね」

「じゃあ、イベント手伝い（ヘルプ）か。何をするんだ？何かやらないといけないんだろ、手伝い」

「まだ、決めてなくてねえどうしようか？」

「アリアはどうするんだ？アドシアード」

キンジはアリアに何に出るのか聞く。

「あたしは競技には出ないわよ。拳銃射撃競技代表に選ばれたけど辞退した」
ガンシューティング

へえ、アリアにしては珍しいな。

「じゃあお前もイベント手伝いか。何やるか決めたか？」

「あたしは閉会式のチアだけやる」

「チア……？アルカタのことが」

アルカタとはイタリア語の武器アルマと日本語の型カタを合わせた用語だ。
女子はそれをチアと呼ぶ。

「シンとキンジもやりなさいよ。どうせ手伝いなんでもいいんでしよ？」

「ああ、ああ」

あ、ハモった。

まあいいか。

「音楽か……まあ得意でも不得意でもないし……それでいいか、もう」

「あつ、遠山君と小野君がやるんだったら、僕もそれにしようかな。武藤君も一緒にやろうよ」

不知火、ここで営業スマイルな笑顔でいくか。
歯並びいいな。

「バントかあ、かつこいいかもな。よし、やるかあ」

「そうだなあ、それしかないし」

俺も本当に暇だからな。

「……でも神崎さん、代表を辞退するなんてもったいない。ポピュラーな話だけど知ってる？アシアードのメダルを持っていると、人生バラ色になるんだ。武偵大も推薦で入学できて、就職にも有利。武偵局にはキャリア入局できるし、民間の武偵企業だって一流どころの内定がよりどりみどりで話したよ？」

なにそれおいしすぎる。

てか不知火ってポピュラーってよく言うな。

三回くらい言ったし。

「そんな先のことはどうでもいい。あたしは今すぐ、やらなきやいけないことがある。競技の練習なんてでているヒマなんてないわ」

やらなきやいけないこと、それはかなえさんを助けること。

だがアリア、イ・ウーの他にも相手しなければいけない組織もあるかもしれないぞ。

五時間目、アサルトの棟である訓練をする。

それは対ナイフ術だが、蘭豹が投げってくるナイフを対処しろというのだが……

「ほら、いくぞー！」

と蘭豹がマツハを超えそうな勢いで投げってくる。

アリアは白刃取り、浩司は流し技でナイフを明後日の方向に飛んでいったが俺はどうしよう、一か八か！

「でやあいー！」

足を振り上げてナイフの刃に当てたたき落とす。

……うん、実戦では使えないな。

我ながら凄いが。

7・放課後の訓練と呼び出し

「……………」

空き缶がフワフワと宙に浮いている。

そうこれは超能力、念動力サイコキネシスでやっている。

もちろんどんなのか確認するためにやっている。

集中力が必要なようだが疲れとかはない。

ただ白雪曰く、精神力使い切ると動けなくなると言っていたが疲れ
なんかないが……あと香苗ヒーリングの治療もどれくらい効くのかわからない。
てか見てないから。

そして次の日の朝、

「はー」

「どうした、シン」

そして放課後、浩司と一緒に帰ろうとしていた。

俺はため息をつき浩司は手帳を見ながら言った。

まだ謎が多い。

まとめると一日に三十分しか使えない。

「この能力、使いづらくなってさ」

持続性がないもんな。

これ。

「確かにそうだが」

浩司が言っている途中に校内放送が流れる。
内容は、

『あー、二年A組強襲科小野新光、岸田浩司、B組衛生科九条香苗、超能力捜査研究科星伽白雪、C組狙撃科田中鷹、通信科高千穂春奈。至急職員室に来やがれ。カー、ペッ』

……………はあ？

呼び出しかよ！？

てかなんだカー、ペッて。

「俺達と白雪だと？めずらしな」

偏差値75を持つ優等生で生徒会長……………等キンジ関連を除けば完璧な模範生の白雪が呼び出しとは。
てか何故チーム全員呼び出し喰らうし。

「チーム全員とはな。何かあるな」

で、職員室に来たらタイミング良く皆と合流。

因みにこの武偵高で三大危険地域と呼ばれるゾーンがある。

アサルト強襲科、ジャンクシオン地下倉庫、マスタース教務科だ。

ここの教師がかなり物騒な人物が多い。

マフィアとかいろいろな。

そんな危険なところに呼び出したのは二年B組担当で尋問科ダキユラの教諭、綴先生だ。

俺達は個室の隅っこで待機、白雪は綴と対面している。

「星伽い、おまえ最近急に成績下がっているよなあ。九十点切るなんてな」

九十点を切る……白雪的にはおかしいが普通なら凄いで。

「す、すみません綴先生」

「ま、点数なんてどうでもいいけどさ」

おい、教師らしからぬ発言するな。

「おまえらしくないからなあ、フシユー」

その煙草……絶対日本には売ってないヤツだろ。

「なあ星伽い。おまえもしかしてあいつにコンタクトされた？」

「あいつ？」

「おまえを狙う可能性が高いつて謀報科レセプトのレポートデユランダルルに書いてあっただろ。SSRにも似たような予言があった。魔剣デユランダだよ」

デユランダル？

確か超能力を用いる武偵・超偵を狙う誘拐魔。

「ああ、でもデユランダルは存在自体がデマだって皆が……」

ん？どうした鷹……『アリア、キンジ、ダクト、センニユウ』だと？
ああ、白雪の弱みを握るために潜入しているのか。

「デマじゃなかったらどうするんだ？」

「だとしても大物超偵を狙う誘拐魔って話ですし」

「あのお、あなたは武偵高の秘蔵^{ウチ}つ子なんだぞ……そして何故かSSRにおまえ達にもデュランダルが狙っているとも出ていたが……どうゆうことだ？」

あれ？いきなり矛先がこっちに向いたぞ。

「い、いや。俺達にも聞かれても……」

綴はなんか紙で変な草を包み煙草に火を点け、フシュー。
やめろ。

それ絶対違法のやつだろ。

「まあ、小野と九条は最近超能力を持っていると情報が来たからわかるけど残りのおまえ達にも持っているのか？」

そうか、浩司達は超能力をあまり使わないからSSRにも知られていないんだ。

「さ、さあ？」

「わからんな」

「同じく」

春奈、浩司、鷹もしらばっくれる。

「まあ、後で尋問すればわかるからいつか」

つ、綴の尋問……それは止める。B組ほとんどの男子あんに女王様とか言っているような廃人と化される。

「星伽い、いい加減ボディガードつけろ」

「でもボディガードが来るとキンちゃんのお世話が出来なくなっちゃっから」

白雪……おまえ本当にキンジLoveだな。
キンジも大変だな。

「アドシールドが近づくと外部の人間がわんさかと来る。その期間だけでもどうだ？気休めにはなるだろ」

「で、でも「ガシャン！」きゃ！」

ダクトの 通気口のカバーを蹴破ったのは、

「そのボディガードあたしがやるわ！」

アリアだ。

ついでにキンジもいる。

鷹の言う通りダクトに潜入していたようだ。

「ア、アリア！？キンちゃん！？」

「二十四時間体制、無償で受け付ける！」

とうつ、とアリアとキンジはダクトから跳び降りる。

「へえ、Sランク武偵がタダで護衛を引き受けてくれるのか、そりや上等だ」

「嫌です。アリアと一緒に居るなんて汚らわしい」

白雪、そこは引き入れてやれよ。

「はあー、護衛させてくれないとこいつを撃つわよ！」

「アリア！武偵法九条！九条！」

アリアはガバメントをホルスターから抜き出すがフツ、とガバメントが消えた。

「あ、あれ？」

もう一挺出そうとしたが既にホルスターには納められてはいない。

「はあ、アリア。あまり銃を取り出すな」

浩司の両手に二挺の白銀と黒のガバメント……超能力で奪ったな。まあ綴にはばれていなさそう……うん、ばれているわ。

「キンちゃん！」

「ふーん、そんな人間関係か、でどうする星伽」

「アリアに護衛を頼みます。ただし」

ズバッ！とキンジに指を指す。

「キンちゃんもボディーガードして！二十四時間体制で！わ、私もキンちゃんと一緒に暮らすうー！」

まさかの白雪とキンジとアリアの同棲宣言で、
ドサツ！と白く灰になったキンジが後ろに倒れた。

「あとシン、あんたたちも白雪の護衛ね」

……………アリア？

俺達、デュランダルというやつに狙われているけど……………

因みに尋問は無かった。

災厄の占い

ボディーガード……有名人などの護衛を引き受ける俗に言うSP。
その対象は星伽の巫女、白雪である。

「で、なんでこうなる」

キンジは目の前で正座しているエプロン姿の白雪に苦笑いしながら聞いてみた。

「こ、これからお世話になります。星伽白雪です。ふ、ふつかつか者ですが、よろしくお願いします！」

因みにキンジの部屋はもう廃墟みたいな感じになっているが今俺達は残骸と化した家具を片付けている。

「あのなら、なにテンパってんだ、今さら」

「キ、キンちゃんのお部屋に住むって思ったら、緊張しちゃって…
…あ、お掃除しなくっちゃ」

白雪は自分で荒らした（アリアと俺含む）部屋の片付けをし始めた。

「おーい、アリア。これどこに置くんのだ？」

ついでに魔剣対策として罫トラップを仕掛けるがこれってクレイモアだよな？

「ああ、そこのベランダに置いて」

アリアは天井に監視カメラを設置しながら言った。

「おい、アリア。何しているんだよ」

「ああ、ここを要塞化しているじゃない。護衛の基礎中の基礎よ」

「てかアリア、おまえなんで白雪の護衛なんか承けたんだ？昨日なんか犬猿の仲だったのに」

「デュランダルはね。あたしのママに罪を着せている敵の一人なのよ。捕まえればママの刑が残り 635年まで減らせるし、うまくすれば高裁への差戻審もできるかもしれない」

成る程、そいつを捕まえれば減刑されアリアの母さん、かなえさんの釈放が近づくわけだな。

「だがデュランダルって都市伝説って話だぜ？居るはずないって」

キンジが胡座を掻きながらそう言った。

確かに周知メールでも出ていたがデマらしいんだが。

「うるさい！とにかく居るったらいるの！」

「居ないかもなー」

キンジ、おまえ。

どうせいないだろ、と思っているだろ。

「とにかく働きなさい！廊下のタンスの危険物チェック！」

「廊下のタンス？」

「あたしは寝室にも仕掛けるから、さっさと動いて！」

アリア、キンジを犬みたいに扱っているな。

まあドレイ？みたいなこと言っていたし。

キンジが廊下に出た時に携帯の着信音が鳴る。

「あ、すまない。もしもし」

通話相手は……意外な人からだった。

『久しぶり、小野くん』

この声は……草加匠か。

「草加、一体どこからかけているんだ？」

たしかEJは盗聴の心配とかなんとか。

『大丈夫、以前おっしゃっていた盗聴の心配は無くなりました。明日、話があるので夕方頃にあなたの部屋に行きます。皆さんも呼んで下さい』

「俺の部屋？ああ、わかった」

通信を切った。

話か、それに皆ねえ。

何かあるな。

「皆、明日の夕方に俺の部屋に来てくれ」

「どうしたの？」

春奈がクエスチョンマークを浮かべながら聞く。

「いや、明日会わせたい人がいるんだ。いいよな？」

「べつにいいけど……なにか持ってくるものある？」

「なくていいよ」

どっかの親戚にお土産かなんかを持ってくるような言い方をするんだな。

この後食事となったが親切にも白雪が俺達の間も用意してくれた。

キンジ含む七人分の豪華な料理を用意したのだ。

なぜか「キンちゃんの子供が沢山できたら……」

とキンジじゃなくても寒気が立つことを言っていた。

そしてアリアの分が無くアリアは激怒と犬猿の仲状態となった。

食事が終わり動物奇想天外2時間スペシャルと日曜動画劇場を見た
いというアリアとキンジがチャンネル争いをしているとリビングに
白雪がカードゲームみたいなものを持ってきた。

「キンちゃん、あのね、これ……巫女占札っていうんだけど……」

「みこせん？占いか？」

そんな占いあるんだ。

「うん、キンちゃんのこと占ってあげるよ。将来のこと気にしてたみたいだから」

「ふーん、じゃあやってもらおうか」

「占いなら俺達にもしてくれないか？」

かなり気になるからな。

しかも白雪の占いは当たりやすいし。

キンジにもチャリジャックからの女難というのも当たってたみたいだし。

アリアも興味があるらしくなにしてそれと録画をセットしてからこちらに来る。

「キンちゃんは何がいい？金運とか恋占いとか恋愛運みるとか健康運占うとか恋愛占いがあるけど」

白雪二回恋愛っていったな……キンジLove恐るべし。

「じゃあ、数年後の将来、俺の進路がどうなるか占ってくれ」

「チッ」

今、白雪が舌打ちしたような……そんなに恋愛運占いたいのか。天使のような笑顔で「はい」と答え、カードを星型に並べて伏せて並べ何枚か表に返し始めた。

「どっちなよ？」

アリアが興味深そうに尋ねると白雪はあまりにも凄すぎるほどの険しい顔をしていた。

「どうした？」

まさか最悪なことじゃないだろうな？

「……え、あ、ううん。総運、幸…運……です。よかったねキンちゃん」

「おい、それだけかよ？何か具体的なこととか分からないのか？」

「えっと黒髪の子と結婚します。なんちゃって」

占いでなんちゃってはないぞ。

そして黒髪の子って白雪、おまえか。

「じゃあ今度は俺だな。俺も総運を占ってくれ」

後ろでアリアがグルルと唸っているが無視しよう。

白雪は札をめくり占うとキンジの占いをしたような表情になった。そんなに悪いのか？

「ど、どうした白雪？」

「えー？はい、……だ、大丈夫ですよ。いい人生を送れます」

いい人生か。

楽しみだな。

それから皆のも占ったが白雪はなんか凄く悲しそうな表情をしていた。

白けたような占いをしたアリアの運勢にも。

その白けた占いで怒ったアリアは白雪と口喧嘩みたいな状況になりそれから自室に籠ってしまった。

「じゃあ俺達は帰るでな。……キンジ、頑張れ」

自分にもある意味、意味不明な事を言ってから帰った。

帰る時に暗い表情をしていた白雪の姿は今にも鮮明に覚えている。

白雪が占った結果は……アリア含む俺達は死んでもおかしくはないと言ったこと。

そしてキンジは……『死』と出された。

しかも犯人までみえた。

それは……

キンジの腹を突き刺したアリアだった。

災厄の占い（後書き）

いまさらだが注意！！

ジャンヌの扱い酷い……かもよ？

8・特殊能力（スペシャル）

白雪の護衛は朝、全員で登校、四時間目まではアリアと香苗が、昼休みは俺、浩司と新光……もちろんアリアは近くでチアの練習、新光達は遠くでパオズを食いながら監視、放課後はキンジ、鷹、春奈……パートタイムでたまにレキが監視する。

今日は訓練をすっぱかして俺は白雪の護衛をしながら帰宅する。

「え、また喧嘩したのか」

「だってアリアが、昼休みは調教の時間だから邪魔するなって言うから」

「調教じゃなく訓練な」

なんで調教になるんだよ。

「アリアってうるさいよね。いつもキンちゃんに文句を言って、私とキンちゃんの世界に踏み込んで来るし、一歩も退かない」

そんな世界あったっけか。

「だけどある意味凄い子だと思うよ。それに……キンちゃんを死なせたくない……」

ぼそり、と言った言葉にクエスチョンマークが浮かぶ。
なんて言ったんだ？

「……………？なんか言ったか？」

急に暗くなった白雪に聞くとびっくりしたように一メートルほど浮かんだ。

ほんと、どうやっているんだ？

「え……………うつん、何も」

そうか、ならいいや。

夕方、俺達は自室で草加が来るまで待っていた。

白雪の護衛はキンジに任せた。

「新光、誰が来るの？」

ソファーに座っている春奈は誰が来るのか聞く。

二人は誰が来るのかわからないだろう。

「ああ、……………この事件によく知っている人だ」

本当に知っているかは不明だがEJの事だ。

このタイミング、そして俺達を狙っているデュランダル……………誰から見ても薄々感づくはずだ。

ドアのチャイムが鳴る。

ドアの覗き穴から覗くと確かに男が三人居た。

一人は草加匠、もう一人は日曜日、アリアがかなえさんと会った日、車の運転手だったあごひげがあり腰に刀を挿している男、残りの一人は帽子を被ってウエーブかかった紫色の髪が特徴な男。どうやらEJの者だな。

「どうも」

ドアを開けるとやはり草加だ。

「こんばんは、皆さんお揃いでしょうか」

「来ているよ」

「ではおじゃまします。式師さんは外で待機して下さい」

式師と言われた紫色の髪の男は外で待機し草加ともう一人の男が入って来た。

リビングで草加は窓側のソファーに座り俺達は机を囲むような形に座り、草加が連れてきた男は窓際に立っていた。

「はじめまして、皆さん。EJ所属草加匠です」

「あ、あの。EJとは一体なんですか？」

春奈が草加にそう尋ねた。鷹と春奈は初対面とEJという組織は何なのかわからないからだ。もちろん俺もわからないが。

「詳しくは言えませんがあなた達を援助、サポートする組織、と言ったほうがいいでしょう」

「俺達を援助する組織……なんておかしいな。まるで俺達だけの組織みたいな言い方だな」

「そうだな。見ず知らずの者に援助などおかしい」

俺と浩司はこのEJという組織の誕生に不信感を抱いていた。いや、俺と浩司だけではない。

春奈も鷹も感じていた。香苗は……わからないようだな。

「素晴らしいです。確かにあなた方を援助する組織ではありませんでした」

「ということはEJとは別の目的として出来たか？」

浩司は組織は前から何か計画を遂行するために創られた、と推測する。

「浩司の言う通りなら何故その目的を遂行しないんだ？」

この疑問に草加はこう答えた。

「確かに私たちは別の目的がありました。しかしその目的を果たせずに失敗し第二の計画を開始しました」

「第二の計画……俺達をイ・ウーから、ヴィンチェンゾ・ファミリから守るといふ計画か」

だがただの超能力を狙うなんておかしい。SSRにゴロゴロいるのに。

「その前に何故俺達を狙うのか、理由はわかるのか？」

鷹は眼を鋭く光らせ草加に質問する。

「そうですね。その前にあなたは特殊能力と呼ばれる能力を備えていることを教えなければいけません」

「特殊能力？超能力ステルスとは何か違いがありますか？」

香苗はそう質問する。

確かに超能力と特殊能力の違いはわからないな。

「特殊能力とは……ただ体質が変わっている能力者のことです」

「体質？なんか人ではない、と言われている気がするな」

「ある意味そうかもしれませんが。属性を利用し変異する能力者もいます」

「特殊能力ということは超能力とは何か違うメリット、デメリットがあるのか？」

浩司は草加にそう質問した。

超能力のメリットは身体能力向上させれる等だ。

デメリットは精神力を削ってしまうこと。

それと特殊能力の違いは一体なんだ？

「特殊能力は精神力を削り通常戦闘に支障が出るような能力ではなく身体と能力が別れた通常戦闘と能力戦闘両方使い分けれるのです。能力は環境、身体の一部を代償・代価を支払い行使させます」

環境と身体の一部をだと！？

代償ってまさか。

どうやらこの能力かなりやばいかもな。

「待つて！代償って……」

春奈が慌ててそう聞いた。

それでも草加は涼んだ顔で答えた。

「代償・代価とは細胞や内臓の一部を失わせることです。もっと悪質な物だと命、脳まであります」

そんな悪質な能力かよ。

「あと環境です。時間や月の光等が関係しているものです。しかしこれは使用出来ない環境もあります。我々はこれらを」

「『制約』……だったな」

草加が答えたではない。

浩司が答えたのだ。

「昔、祖父から聞いた。

俺と同じ能力を持ち性質も一緒だった」

祖父と一緒にだったんだな。

それを聞いた草加は一瞬驚いた顔をしたがすぐに普通の表情に戻った。

「そうでしたか。なら説明しなくてもいいですね」

あんたかなり説明しただろ。

午後七時にまわり空は夜になり部屋の明かりだけになった。

「では本題に入ります。デュランダール魔剣についてです」

やはりか。

草加もデュランダールを知っていたようだ。

俺達を狙う敵は何者かを。

「魔剣は氷を使う超能力者です。魔剣は一対一を好む敵ですので複数で行動して下さい。とは言っても魔剣ははつきり言いますと弱い
です」

弱いってのはつきり言うなあ。

「成る程、複数で叩けば問題ないと」

「そうです。ではもう話すことはないので帰ります」

役目を終えたかのように草加は立ち、連れの人も帰ろうとしたが廊下で止まる。

「そういえばまだ言ってますでしたね。ヴィンチエンゾ・ファミリーの狙いは貴重な能力者を集めているみたいですよ」

それだけ言って帰った。

残った俺達はまだ、何か、言っていない何かがあると分かっていた。部屋から出た草加と男、外に待機していた武師と一緒に通路に歩き始めた。

「草加、もつと教えるものがあつただろう」

あごひげがある男はそう言った。

「そうですね。ですがまだ言わないほうがいいのです」

そう、言っていないことがあつた。

ヴィンチェンゾ・ファミリーは近いうちに接触してくることを。対超能力者用の道具を使つても意味無いことを。

ついでに特殊能力は色金とは無関係であることを。

「ところで久世くん。彼らを見てどうおもいましたか？」

久世と言われたあごひげの男は後ろに誰もいない廊下に目を向けた。かなり懐かしそうな顔だつた。

「面影がありすぎてなんて言えばわからん。

桜井機関のメンバーと全く一緒です。能力も面影も。勲大尉もご存命ならどんな顔をしていたのか……」

久世は懐かしそうに語る。

その時、

「じ……このおおお……この馬鹿キンジいいい！」

二つドア先にいきなり怒鳴り声が聞こえた。

「ま、待てアリア！誤解だ！」

「ちよっ、ちよっとな任せたらこれ？この強猥魔！死ね！」

そう、これはアリアはキンジと白雪が何かをしようとしていた時のことであった。

銃声が鳴り響きキンジがベランダに逃げ込むが袋小路に遭う。

物置に逃げ込もうとしたがアリアが持ち上げて投げられるかもしれない。

「あ、あああたしに強糺したあげく今度は白雪！？こ、このド変態！」

「ま、待て！アリア！
は、話せばわかる」

「問答無用！」

ドオオオオン！

ガバメントから吐き出された弾がキンジの、男として大事な部分にクリーンヒットした。

幸い防弾下着だったのが救いだったが反動でキンジは東京湾の空を、宙を舞う。

そしてキンジはこう思った。

「話せばわかる」は死亡フラグではないかと。

「……なにやらすごいですね」

草加は面白そうに向こうの部屋が何が起きたか推測しながら言った。

「『緋弾』と遠山家、星伽か。ヴィンチェンゾも狙っているはず」

久世がそう言い。
草加は見据えたように言った。

「これから始まる戦いはヴィンチェンゾも、EJも介入する。酷い戦いになるだろう」

「……また預言者のことですね」

久世は思い出すようなことを言った。

「ええ、そしてヤツも現れる。近いうちに……」

二人はその話をしているが紫色の髪のウェーブがかかった男、式師は黙っている。

彼は今日、キンジと白雪が帰る途中すれ違い式師は白雪を……あのキンジの占いの結果をすっぱりと記憶から消し去ったことは誰も知らない。

8・特殊能力（スペシヤル）（後書き）

今回の話で一体何を織り交ぜているのかわかるはずですよ。
わかった人は感想に書いて下さい。

面白かったら気軽に？と感想を書いて下さい。

次回からラルド先生の作品とコラボ！
キャラ

9・色金VS特殊能力(前書き)

コラボ!

ついにあの男が!?

9・色金VS特殊能力

次の日、海に落とされたキンジは、

「ぶえつくしよん!!」

とベットの上でくしゃみをしていた。

くそ、最悪だ。

昨日白雪が風呂場に突入した揚げ句脱ごうとするわアリアに男として大事な部分に撃つわ海に落ちるわ風邪ひくわで散々だ。はあ、寝よ。

寝たほうが早く治ると思い布団を顔に被せ寝る。

寝始めて何時間たったのだろうか。

昼ごろ、キンジの寝室のドアが開いた。

ピンクのツインテールの少女、アリアが何かをキンジの傍に置き出た。行った。

ところ変わって武偵高。

アリアは三時限目に抜け出したようだがどうやら昨夜、キンジを海に落とした揚げ句風邪をひかせたその責任か罪悪感で風邪薬を買いに行ったようだが何を買ったんだ？

あいつは普通の薬には効かないんだよな。

そんな事を思いながら昼休みにアリアに聞いてみたら、

「あ、あなたには関係ないでしょ！べ、べつにキンジが風邪をひいてしまったのあたしのせいじゃないからね！」

と見事なツンデレ？をかましたが確かに関係はない。

「ああ、そうか。今日アリアが護衛担当だったな」

ホントはキンジだったけれど風邪だから代わりにアリアが白雪護衛担当することになった。

ただ昨日、ガチの殺し合いをしていたが。

「ふわああ、寝るか」

グラウンドの側に生えている芝生の上に寝転がり少しだけ寝ることにした。

「あゝあ、暇だあ……」

藍の色素が混ざった漆黒の髪はきわらげんの武偵、萩原願は昼休みにやることもなく適当に歩いていた。

彼は強襲科ですとSランク（Vランク）を取っており誰かが「あ、悪魔たん……」と言われている程の実力だ。

自衛隊の虎の子である特殊部隊『Fユニット』を指揮する自衛官であり、日本の治安を維持する裏の組織『大和』の総帥でありながら裏の世界では『日本の首領』トシと呼ばれる萩原家の第八十八代当主でもある。

そんなチート男が暇だあ、と叫んでいるがさて、今日は誰をフルボッコにしようか。

おお、こわいこわい。

「よし、あいつにしよう」

すぐ近く、芝生の上に寝そべっているやつだ。

たしか小野新光だったな？

そんな事を思いながら近付く。

「おい、お前」

と俺は見下しながら寝ている新光を起こす。

「ん？なんだ？」

寝ぼけるながら起きた。

そんなに爆睡していたのか。

まあいいや。

「おい、暇だから勝負しろよ」

やはり、と言うか完全にキョトンとしている。

「お前……萩原願か!？」

新光は驚愕し嫌そうな顔をした。
そりゃそうだ。

俺は自衛官でありマジで悪魔と言われている奴だ。

そんな奴が勝負しろ、と言われたらただでは済まないだろう。

まあ、すぐに終わりそうだな。

寝そべっている雑魚（新光）に不可視の銃撃インフュージビレを放つ。

不可視の銃撃とは最速の、銃が見えない程の銃撃だ。

普通ならリボルバーの拳銃『ピースメーカー』が最適だが俺は自動拳銃、デザートイーグルを使う。

この一発で終わる、と思った。

「うおっ!？」

だが新光は寝そべった状態から片手でジャンプをした。高さ二メートルほど高く跳び上がったのだ。そして俺と約三メートルほど離れた。

「あ、あぶねえな!いきなり撃つことはないだろ！」

なんだ、今のは？

普通の武偵の動きじゃない。

「新光!五分間遊んでやる！」

と言ってやる。

「おいおい勘弁してくれ」

新光は最悪だ、と知っているが俺は面白いやつを見つけた、と知っているぜ。

デザートイーグルを二発撃つ。

さあどうする？

デザートイーグルの50AE弾が新光に迫る。

「……なるほど」

50AE弾はしっかりと新光に向かって飛んでいた。

だが実際、50AE弾は足元に着弾した。

超能力持ちだな。

とすればあれをやるか。

ブレザーの中から89式小銃を取り出しランボアの如く片手で撃つ。そして、

「シャットダウン（能力強制終了）」

これで超能力……恐らく念動力だと思うがこれで一時使えないはずだ。

だが予想が外れた。

銃弾は新光の周り、円を描く様に着弾したのだ。

「ばかな!？」

能力強制終了は超能力を強制的に終了させる技だ。それなのに超能力を使えるだ……

「うわっ!？」

持っていた89式小銃が下から上に力が加わったように吹き飛んだ。そうか、念動力か。

負けられない!

Vランク武偵として!

「シン!」

別の男が現れた。

確か岸田浩司か。浩司は走りながらデザートイーグルを取り出し発砲する。

だが俺はサムライエッジで銃弾撃ち（ビリヤード）をして撃ち落と

し更に一発、浩司の眉間に銃弾が迫る。だが浩司の姿が消え銃弾は強襲科の施設を貫いた。そして新光の後ろに浩司が現れる。瞬間移動か。念動力と同じく厄介な超能力だ。だが雑魚とは変わらないな。

「シン、何故こうなった。何故願と戦っている」

「俺だつてわからない。……来たぞ！」

新光が叫んだ時、ナイフが俺の後ろから飛んで来た。むろん俺には当たらず新光と浩司向かって行ったがいきなりナイフの進行方向が変わり空に向かって飛んでいった。

「遅いぞ！ 遼」

「いや、何故遅いと言う！？ てか俺のタクティカルナイフがあああ
！！」

新光が弾き飛ばしたタクティカルナイフは絶賛飛行中のようだ。

浩司と突如乱入してきた霧藤遼きりがふじはるかが介入、風が強く吹き砂が舞う。俺はルガー拳銃を抜こうか迷っている。

「新手だな」

「シン、奴は化け物だ。打破する策はあるか？」

浩司はデザートイーグルを構える。

「無い。それに霧藤遼も現れた。あいつも化け物だ」

遼はUSP45を取り出した。9mm弾の自動拳銃だが改造されているかもしれない。

それに願は厄介だ。

DX-9とMP5Kを構えている。

ホントにおかしいぜ。

USP45とDX-9とMP5Kが同時に火を噴いた。

同時に浩司のデザートイーグルも火を噴き少し遅れて俺のドラムマガジン型を挿入したルガー拳銃も火を噴く。

50AE弾と9mm弾は弾かれ、三十二発の9mm弾はMP5Kから吐き出された十五発の銃弾に当たるか当たらないか、それかすれ違うところで全て爆発し、その衝撃、銃弾の破片で切り裂き、弾き飛ばした。

吹き荒れた砂埃から遼がコバルト製のタクティカルナイフを持ち浩司に攻撃を仕掛ける。

「うりゃあー!」

「ふっ!」

浩司は遼の腕を掴み、流す。

流した後デザートイーグルで追撃するが遼が振り向きタクティカルナイフで50AE弾を切る。

それから遼から掴みかかるが腕で弾く。

装填し終わったUSP45がまた火を噴き至近距離に置かれた浩司に襲い掛かるが一瞬姿が消え、現れた場所が遼の後ろ。見事真後ろ

に瞬間移動した浩司は僅か数センチのところまでデザートイーグルを発砲するが遼は人間ではありえない捻り方で身を翻し避ける。

「あまい！」

遼はナイフで浩司の首を突き刺そうとするが先に浩司が遼の腕に触れ遼が消えた。

遼が現れた場所は上空五十メートルの位置。

「くっ！」

「うらぁっ！」

そこから新光の念動力、浮かした遼を冷たい東京湾に向け……約数百キロの速度で飛ばす。

「うわあああ!?!」

これで一人退場。

そして浩司の能力は使えない。

あと……20分か。

砂埃から無数の銃弾が飛び交ってきた。

しかもまばらに。

否、これは跳弾だ。

四方八方なら能力では対象できないと思ったのか。

「うお~~~~でやあ！」

指輪から超重力化させた黒い玉を真上に上げる。

強い重力に吸い込まれるように砂が上昇気流に乗ったかのように巻き上がる。

もちろん俺達も無事では済まないから通常の空間を創り安全を確保する。

四方八方から迫りくる銃弾は上空にある玉に吸い込まれるように入る。

そして白き閃光、爆発が起き校舎の窓硝子が奮え、木々が靡く。そして巻き上がった砂が落ちて視界を遮る。

「萩原家八十八代当主、萩原願。いざ尋常に参る！」

漆黒のナイフを取り出した願。

オーラが変わった。

巻き上げられた粉塵から抜けて来た願は新光と浩司に向かい光の速さで走る。

「S・HSS……以下省略、キャンセル能力破壊開始」

この時、新光は指輪から小さい、黒い塊を願に向けて射出したが俺は無視をして肉薄する。

砂が前から後ろに向かって吹き荒れる。

小野新光、岸田浩司、貴様に敬意を示しこれを喰らえ。

「承認。キャンセル！」

そしてナイフの刃は新光と浩司の制服を十字を描き切り裂いた。

「十字字切り」

「ぐ！」

「な……に！？」

二人は力無く倒れた。

その瞬間、後ろにある黒い塊は消え去り、収まった。

「ふん、雑魚が」

……生きてるか？おい。

……駄目だ。反応がない。ただの屍（ry

俺は倒れた二人を置いて教務科に足を運んで行った。

願が教務科に向かってから二分程経った時、

「ふ、ふはははは！おもしろえー！」

気絶した筈の新光は笑いながら起き上がった。

そして浩司も起き上がる。

「シン、何をした」

「まあ、いろいろとな」

そう、新光はあるやり方で難？を逃れたのだ。

新光が投げた黒い塊は超重力の塊。

ただ小規模な為人を引きずる程度の力だ（それでもかなり強い力だが）。それで願を後ろに引きずり（若干）遅くしたのだ（意味無かった）。

その後、願がナイフで切り掛かる時、能力で若干反発させようとし

だが……早過ぎて間に合わなかった！

「ところで何分くらい戦った？」

「……調度10分くらいか」

我ながらよく戦えたな。

教務科

俺はあの新光と浩司の資料を捜した。

あれは超能力だったのか？

しかも遼はどっか行っただし。

あつた。

どれどれ……

『小野新光

（作者の都合により以下省略）

超能力：念動力』

やっぱり超能力者か。

浩司は超能力のことは一切書かれていない。

「なーにしているの」

後ろから伊椎翠いしこうりくが話し掛けてきた。

「……翠か。……柚梨佳はどうした」

「柚梨佳なら中庭で誰かと喋っていたよ？……男も居たけど」

その言葉を聞いた俺は頭の中にある何かがブチ切れて光の速さで中庭に向かった。

むろん教務科の窓硝子が割れたのは言うまでもない。

少し遡って中庭。

新光と浩司、春奈、香苗は中庭に置いてある椅子に座っている。因みにあの戦いが終わって既に三十分は経っている。

「はあ〜散々な目に遭ったな」

「全くだ」

あれほどボコボコにされたのにピンピンしている二人。

「まあ〜喧嘩しないでよ。治療するのは私だし」

ぷうと口を膨らます香苗。

かすり傷があったから香苗の能力『治療』^{ヒールング}で治してもらった。

この能力の制約は一日の中で合計三十分しか使えない、だそうだ。

「春奈、白雪はどうだ？」

「今、鷹が監視しているけど……異常は無いみたい」

そうか……ならいいや。

「ところでシン。貴様が放った銃弾は何故爆発した」

ああ、それか。

俺は弾倉から一発、弾を取り出し机の上に置いた。

「これは？」

「……………VT信管、と言えはわかるか？」

そう、爆発したのはこれ、VT信管。

対空兵器にも用いれられているこれをEJがこれを改良・銃弾化にし、俺に渡したものだ。

「これが、か……………」

「あ……………」

どうした春奈？

俺の後ろに何か居るのか？

「あ、あの〜〜新光くん。ですか？」

後ろに何か居た！？

その正体は桂柚梨佳。「かきうめい」

「そ、そうだが？」

「あ、えつと……………」

柚梨佳がモジモジしている間に何かズドドド！と表現出来ない音がしてくる。

「袖梨佳くくく!!」

「きゃ」

現れたのは願。

しかも袖梨佳を抱きながらズザー!とオーバーランをしてだが、
そして、

「俺の袖梨佳に手を出すな――!!!!」

いや、出してないし。

しかも袖梨佳は顔赤くなっているし。

「願くん!何勘違いしてるの!?!」

「何!?!何かされたんじゃないのか!?!」

「されてないよ!?!」

なんだ?

このカオスは?

「と、とにかく落ち着け」

「これが落ち着いていられるか――!!」

駄目だ。

誰か止めてくれ。

9・色金VS特殊能力(後書き)

願が弱く感じてしまったらすみません。

願「弱すぎだボゲエ！」

ひでぶ！

闇に紛れる生命体

願が暴れて数分、ようやく止めれた。

止めたのは柚梨佳でトドメは「もう願くんなんてしらない！」で止まった。

もうなんて言えばいいか……

「……もういいか？」

俺は苦笑いをしながら言った。

「ああ、すまないな。それよりも新光……お前の超能力は」

願が真剣な話を持ち込む寸前になんか聞いたことある声が……

「見つけたぞおー！」

その正体は遼だった。

しかもずぶ濡れで上半身裸であるが。

その理由は時速数百キロの速さで東京湾にたたき付けられたせいである。

「あ、遼か。てかなんで裸だ。俺は男の裸なんて興味ない！」

「いや！狙ってないからな！」

いつもよりカオスが増した……

「……で、話を戻すが新光、お前の超能力は一体なんだ」

願が真剣な顔をして俺達の能力を聞いてきた。
超能力……いや、特殊能力だが何故聞いてくる？
一応答えるか。

「そうだな。その超能力……いや特殊能力を教えないとな」

その時浩司は何か言いたそうな顔をしていたが許してくれよ？
相手は悪魔なんだ。
言わなかったら殺される。

願は全て話した。

『色金』というものを操ることを。

全ての『超能力』を操作できることを。

そして願に全て話した。

『スペシャル特殊能力』、『制約』のことも全て。

話終わった時に願は啞然としていた。
俺達も啞然としたが。

「特殊能力……そんな能力があったとは。

そうか、体質か。

そして制約。厄介だな」

願はぶつぶつと呟いていた。

お前のほうが厄介だぞ。

このチートめ。

「ということは特殊能力は色金を使わないのか」

色金……よくわからないが超能力を統制させるもの、ということらしい。

そして願はそれを制御出来るようだ。

だが今回の戦いでその制御……もとい封じることが出来なかったことから色金は使っていない、ということになる……らしい。

このチートめ。

「まあそうなるな。

俺だって知らなかったからな」

わはは！と願と俺は高笑いをする。

なぜ願も笑うし。

「新光、白雪さんが帰宅すると鷹から連絡来たわ」

春奈が手を頭に当て言った。

「そうか、じゃあキンジの部屋に行くか」

立ち上がり荷物を持ってキンジの部屋がある寮に向かおうとしたが。

「待て新光。俺達も行く」

願がそういつた時に新光達は思いつきり冷や汗を流していた。

俺達は悟った。

こいつが来ればキンジの部屋が壊滅すると……

「ははっ、キンジの部屋を壊すために行くんじゃないからな」

心を読みやがったな。

キンジの部屋。

「キンちゃん！お熱は！？」

「ああ、大丈夫だ」

夕方、キンジの風邪が治り白雪とキンジの（一方的な）イチヤイチヤタイムが始まった。

しかしその世界は一瞬にして崩れ去った。

「おい、キンジ。生きてるかあ」

願が先頭を仕切りズガズガと入ってきた。

その時のキンジと白雪の表情は……

（　　。　　。　　。　　）
であった。

「お、おま！願！？」

「な、なんでここに！？せっかくキンちゃんと愛の世界を……」

二人共たじたじだが白雪に関しては何かおかしい。

「……まあ、それよりなんで白雪がここにいるんだ？男子寮だぞ？」

願はそう問いながらまあ白雪だしおかしくはないな、と思っていた。

「まあいろいろあつてな」

新光が苦笑いしながら答える。

「……ところで願くん。あそこにいる露出狂をどうにかしてください」

露出狂とは遼のことだ。

ここまで来るのも上半身裸＋警官から白い目を向けられていた。もちろん白雪の目は冷たく黒く濁った目で見ている。キンジの裸見たら赤くなつたくせに。

「OK、Ja」

願は英語、ドイツ語で返事をした。

そして振り返り拳に色金の気を溜める。

まてこら、破壊するつもりか。

「ま、待て！早まるな！そ、そうだ。話せばわかる」

「問答無用、あと服を着ろ」

色金の気を纏った拳が遼の腹に炸裂しキンジの玄関から射出した。

因みに被害はキッチン中破、玄関全壊、転落防止の柵大破、遼の飛距離553.5m(＋マンシヨンの角に激突を含む)

この光景に俺達の顔は

(。、。、)

こんな風になっていた。

因みに翠と柚梨佳は泣きじゃくってました。

「さて、新光。説明をしてくれ」

ニヤアと微笑む願に対して新光と浩司、香苗は冷や汗を出していた。鷹と春奈は既に帰っている。

余談だけど春奈と鷹とはある事情で（春奈の）屋敷に同居中。

説明するの面倒ので……

青年説明中……

「魔剣……そうか。お前達が狙われている理由凄く解る」

白雪はSSRの優秀な武偵、そして新光らは特殊能力という俺の能力封じにも効かない能力だ。

そして魔剣……多分あいつか。

イ・ウーのあいつ。

「わかった。俺達はお前達を護衛する。Any objection's, Lady?（異論はないな?レディー）」

うん、何故英語で確認する。あとレディーじゃない。

「い、いいのかよ」

「友人を見捨てる訳にはいかないからな。柚梨佳も翠も異論はないな?」

「「うん!」「」

「おう！」

見事ハモる二人と血を流している露出狂。

「露出狂じゃないし！ちゃんと服着て来たから！」

露出狂もとい遼は大音量で叫ぶ。

「うるせえ。近所迷惑だろうが。俺は病み上がりなんだ」

キンジが尤もな意見を出した。

「じゃあ……」

願が勝手にリビングに置いてある棚を物色し始める。

そして……

「ポーカーやるうぜ」

トランプを取り出しながら言った。

結果は願が全て21で揃い圧勝。

皆からチートすぎだろ！と叫んでいたが無視。

そして願、翠、柚梨佳………遼は女子寮に向かっていた。

周知メールで『SSRの生徒を中心とした失踪事件に注意』と出ていたが二人はSランク（実力はR）だが念には念をと思いつき添う。

「いいのに……私は大丈夫だよ」

「いや、お前達二人が心配で心配で心配で……」

その言葉で翠と柚梨佳は顔が赤くなる。

「……この野郎」

遼が黒いオーラを出しながら呟いた。

十字の道路が見えた時、その真ん中に黒い服を来た男がいた。

……なんだあいつ？

ど真ん中に突っ立っていて……

その男の顔は真っ直ぐ俺に向いていた。

視線もしっかりこっちに向いていて俺と目が合った。

「……萩原願くんだね？」

男が俺の名前を呼んだ瞬間街灯、建物の明かりが消えた。

「……ふん、お前がSSRの武偵を狙っている犯人か？」

俺はサムライエッジを取り出し構える。

だが男は銃を向けられているのに武器も取らずに冷静な表情をしていた。

「悪いがそれは俺じゃない」

男が否定した瞬間に俺の隣に何か倒れた。

それは遼、柚梨佳、翠であった。

「皆！てめえ！」

怒りに任せ色金のオーラが滲み出てくる。

「安心したまえ。彼らは眠っているだけだ」

「ざけんな！てめえの狙いはなんだ！！」

「『あの色金』についてだ」

あの色金……『暗黒色金』のことが。

その暗黒色金を管理しているのは『大和』。

もしこれが無かったら、おそらく日本は無かっただろう……

こいつは……一体何を企んでいる？

「ふ、そんな顔をするな。俺は君達『大和』を喧嘩しない。……ただ忠告するだけだ」

「忠告……だと？」

オーラはまだ出ている。

男は俺の横を通ろうとした。

「色金や能力を狙うヤツがいる。我々ヴィンチェンゾ・ファミリアも数人そいつにやられた」

ヴィンチェンゾ・ファミリア……ロシアの殺し屋。しかも超能力者中心のいけ好かない組織だ。

「だからなんだ？そんなヤツ俺が逮捕してやるぜ」

「ふー、逮捕……か。甘いことを考える」

煙草に火を点け男は吹かしながら言った。

「ま、そんな見方があるな」

男は歩き始め願の横に通る。

「せいぜい頑張りたまえ」

最後の言葉を聞いた後、男は闇の中に紛れ消えていった。

「……………ん……………げ……………げ……………願！」

「はあっ！」

気が付いたら街灯、マンションの明かりが灯っている。
そして目の前には誰もいない。

そして……倒れていた筈の皆はキョトンとした顔をしている。

「だ、大丈夫か？お前急に立ち止まったんだぞ」

「願くんどこか具合が悪い？」

「なんなら私達の部屋で休もうか」

なんだこれは？何かおかしい。

「お、お前倒れたんじゃ……」

遼、翠、柚梨佳は何もなかったかのような表情だ。

……気のせいだよな？

俺達は女子寮に向かって再び足を動かした。

某所

夜の道に男女二人は走っていた。

「は、走れ久美！」

強襲科の男が久美と呼ばれるSSRの女と何かから逃げていた。
そう……何かに。

公園に逃げ込んだ二人は互いの銃を取り出す。
足音……カチャ、カチャと鎧を着たような音。
闇から現れたのは足に金属のブーツ、そして見慣れない黒い鎧、
そして真っ黒な面で顔は認識できない。
見た目は人間だ。

「く、ここは俺が食い止める。お前は先に逃げろ！」

「だ、だけど」

「いいから行け！」

コルトパイソンを握っている男は得体の知れない人間に撃つ。
ドオン！

銃弾は鎧に貫通をしたがみるみる傷が塞がっていく。
まるで細胞みたいに……
そして何もなかったかのように歩き始めた。

「うそ……だろ……!?!」

腕が変形し始めた。

手が無くなり代わりに銃みたいな形。

その銃みたいなものから吐き出された緋色の銃弾はコルトパイソン
に当たり叢びらの中に落ちる。

そして……

ドスッ！

「あ、あが……」

強襲科の男の頭に注射針のような白い針が刺された。

その針は鎧の人間の腕から伸びたもの。
男は痙攣したまま何か針に伝わり鎧の人間へ流れ込んでいく。
水分が、精神が、全て吸われていく。
吸い付くされた男は服も皮膚もミイラのように全身灰色と化し支えも無く地面にたたき付けられた。
その衝撃で男は砕け散り粉末状の灰となった。
人間という原形を留めずに。

残るのは一人、SSRの久美と呼ばれた女子。

「い、いや……」

久美が握っていた銃、MK23 SOCOMを歩み寄ってくる鎧の人間に撃つ。

銃弾は黒い面を貫き面が落ちた。

そして久美は見た、その鎧の人間の素顔を。

「……ば……化け……うっ！」

伸びた針は久美の胸に突き刺さる。

力が……命が……奪われる。

息絶え、灰と化した久美から針が外れ腕の中に戻っていく。
そして破損した黒い面を顔に付ると面が再生し顔を覆った。
そして鎧の人間は用のない公園から去っていった。

公園に残ったのは緋色等の粒子と風で崩れ去る武偵生徒しかいない。

10・写真の中にある時代（前書き）

今回は某アニメに関する話が九割含まれています。

10・写真の中にある時代

次の日 武偵高

「はあ！？アリアと喧嘩した!？」

昼休みの終わり頃にアリアがノーベルドバカ賞!とか叫んでいたから屋上に行ったらキンジが仰向きに倒れていて給水塔に「バカキンジ」と撃ち抜かれていたが……なんて言えばいい?これ?

で訳を聞いたら……まあなんて言えばわからないがとりあえずそう言った。

「ああ、あいつ勝手に白雪と結婚しちゃえばいいのに、とか言っているからな。それにデュランダルなんていないし」

キンジがデュランダルは居ないと断言した。

草加のやつ、嘘をついたのか?

いや、あいつはそんなことはしない。

「とりあえず、白雪の護衛はどうする?今レキが監視しているが」

「白雪は……夜俺が護衛する。寄り道したいところもあるでな」

キンジが何か考えていたかのような言い方をした。

そうか、今日花火だったか。

「わかった。任せるわ」

「新光はどうするんだ？」

「俺は……浩司とレキと香苗、平賀、願達と一緒に花火見に行くんだ」

そう、今日いきなりレキが貴方を護衛しますと言われたし平賀に関しては四日くらい前に注文した例の物や五式自動小銃を聞かないといけないし浩司、香苗、願達はいつものこと。

「そうか、まあ会うかもしれんな」

確かに会いそうだ。

夕方、モノレールの駅の前で待ち合わせをした。

俺は黒に近い茶色の服と黒いズボン。

浩司は上下黒でネクタイ。

香苗は青い浴衣でポニーテールから普通のロング、背中にはいつもの一　式機関短銃を背負っているが。

願と遼は普通の武偵制服で翠や柚梨佳は浴衣で……綺麗すぎる。

ナンパまがいな事したら願がキレたのは言うまでもない。

そして平賀も浴衣だが……子供っぽいのは分かりきっているが……あれはあれでいいな。

レキはいつもの武偵制服にドラグノフを肩にかけている。

「皆集まったからどこかに食べに行こうか」

実はと言うとまだ食べていない。

どこかの売店で食べればいいが……

「あ、ごめん。既に飯食ったわ」

「「実は私も」」

遼、願、翠、柚梨佳はそれぞれハモリながら言った。
お、お前達。なんてことを……

「あ、でしたら私、ここで食べたいです！」

香苗が何かチラシを取り出し見せた。

どうやら香苗は中華街に行きたいらしい。

その中の店『招財飯店』が一番良いらしい。

「……じゃあ行くか」

モノレールに乗り電車で葛西臨海公園まで行くがモノレールの中で
平賀は俺にアレを渡した。

それは普通のアナログ式の腕時計。

だが、防水等雷に打たれても大丈夫な腕時計で一時間のストップウ
オッチが組み込まれている。

かなり高かったな。これ。

「ありがとうな、平賀」

「ありがとうなのだー、そして頭撫でるのだ」

平賀が頭をこっちに寄らしてきた。

全く平賀は……と思ひ撫でる。

「うにゃーなのだ」

猫か、と心の中で突っ込んでおく。

あー、皆変な目で見てるなこんちきしょー。

「新光さん」

隣に座っていたレキが話し掛けてきた。
どうした？

「私にも撫でて下さい」

へえー、レキにもそんな趣味？があつたのか。
とりあえず撫でておく。
しかし何故だろうな？

「レキも甘える時もあるんだな」

「いえ、こうしていると昔思い出すんです。あの人と同じです」

あの人？

レキの友人かなんかか？

「新光、お前。ロリコンだったのか？」

願が白い目？で見ている。

もちろん皆も。

あ、でも香苗はほほえましい顔だが。

「俺はロリコンじゃないから安心しろ、願」

ただ作者はロリコンだ。

「何が安心しろだ」

おーい、刀出すなよ。

葛西臨海公園の外れにある中華街。

「凄い賑わいだな」

「そりゃ祭だからだ」

新光は賑わいに感心し願は呆れたような事を言う。

殆ど中華の店が立ち並ぶ店は賑わっていた。

五年前にあの事件があったのに。

「そういえば五年前中国とロシアの問題があったな」

「ああ、中国軍がロシアのシベリアに進駐したあの事件か」

「ああ、あれか。俺達はシベリアに進駐した中国軍を殲滅する作戦
あつたなあ」

浩司と新光はそんな事件を思い出し願、遼、翠、柚梨佳はああ、そ
んな作戦あつたねえ、と思い出していた。

五年前、中国軍五個師団がロシアのシベリアの一部を武力制圧した
事件。

これをロシアが日本の願らに中国軍殲滅作戦を頼み僅か一日で殲滅

した。

中国は日本とアメリカがロシアに攻めてくれと言っていた事を主張したが誰も信じなかった。

まあ、本当に言っていないけどな願曰く。

その事を新聞に取り上げられ中国の株が急落、中国企業が倒産するのが急増した。

所謂自業自得。

五年経った今は一部を除き回復している。

例としてこの中華街がそれだ。

五年間誤解を解いた事が大きい。

「あ！ここですね」

香苗が指を指した先には少し古ぼけている店だった。

だが新しく見えるこの店が『招财飯店』

しかも看板に『おいでませ招财飯店』と書かれていた。

「……………センスえ」

遼、言うなよ。

入るとかなり広々としていていかにも中華とも見える。

「あ、お客さん！？いらつしやいネ！」

奥からチャイナ服を着た中学生くらいの歳の子が出てきた。

かなり若いのに働くんだなあ、と思った。

「ありや！？その服は武偵高の生徒だね！」

ここでも武偵高の印象が高いのかそれとも有名なのか知っているん

だな。

「さ、座ってネ！」

まあ、とりあえず座るか。

「……………どれにする？」

とりあえず俺はパオズで。

「俺は炒飯」

「あ、私も」

浩司も香苗もかよ。

願達は……………飯食ったんだな。

「ところでこんな若い子が働くなんてな」

遼が意外だ、と思っている。

実は俺もそう思っていた。

「富貴蘭はピッチピチの十三歳の看板娘だよ！」

へえ、富貴蘭か。

「ここに働いているのはお前だけか？」

「うづん、風蘭はあちゃんや店長も居るヨ！あ、今呼んでくるね！」

浩司は富貴蘭に聞き彼女は風蘭と言う人を呼びに行つた。
そして十分後、富貴蘭と共に現れたのは九十はいつている老人、あ
の人が風蘭さんのようだ。

ただ風蘭さんは俺達を見た時に目を見開いて眩き近づいてきた。

「アオイさん？カズラさん？」

風蘭さんが俺の顔や浩司の顔に手を添え、まるで幻であるか確認す
るように。

「……似てるけど違うね。ああ、ごめんね」

「い、いえ。そのアオイさんとどんな関係だつたんですか？」

「……葵さん、葛さんは日本人で始めて友達になつた人達なのよ。
あの写真に写っている人だよ」

壁の額縁に納められている写真。
白黒だからかなり昔のだろう。

「あれは1931年黒龍江で撮つた写真だよ。左から棗^{なつめ}さん、葵さ
ん、そして真ん中の前に写っているのは私、その後ろは雪菜^{ゆきな}さん、
一番右なのは葛さんだよ」

棗という男はこの写真の中で一番背が高い。

そして葵という男はかなりあれだな。うん。

で真ん中の少女は風蘭さんでその後ろにいる……お嬢様かな？その
人が雪菜で隣の黒服でピシッ、としている男が葛か。
なんか、似てるな。皆と。

「へえー、かなりカツコイイですね」

「うん、特に葵さんとか葛さんとか」

「……………」

翠、柚梨佳はその写真をまじまじと見て願はなんか俺達を睨んでいるし遼はいつの間にか料理を注文しなんか腹が膨れている。

「「だけど願くんの方がカツコイイよ」」

「お、お前達……………」

ガシツ、と二人を抱きしめる願。

もちろん二人は顔が赤くなりすぎて失神しているが、そして遼はおかわりを頼んでいたがスルーで。

平賀もおお、青春だねえー。と言っていたがそれもスルーの方向で。

「この人達と会ったのも1931年でその後上海事変で新京に避難したよ。店が失くなっちゃったから」

上海事変って確か満州事変後の武力衝突のあれか。

どうやらそれで店を失ったと。

「それでこの写真か」

「うん、葵さんや葛さんは私の店の為に写真を作ってくれたりお世話になった人ね。そして別れたのは満州の式典で関東軍が乱入してきた時」

満州の式典？溥儀（ふい）が即位する式典のことか？でも自国である関東軍が乱入してきたのは何故だ？
そんなの歴史にもなかった。

「その日から二年、皆と会わなかったね。ああ、でも雪菜さんは会ったね。でも葵さんや葛さんは……」

そうか、よくわからないけど何かあったんだな。

「ごめんなさいね。昔の話を聞かしてしまつて」

「いえ……」

こんな時どう言えばいいのだろう……

「ちゅ、ちゅ。料理来た！」

富貴蘭と奥から出て来た店長らしき人がパオズや炒飯を持ってきた。願や翠らは食べないのはいいとして遼はおかしいくらい太っていた。例えを言つとバラエティー番組で出てくる世界一太っている人間……くらいに。

そして風蘭は横目で写真を見ていた。

あの時の事を……

『葛さんはこの写真に入らないか？』

子供の頃の風蘭は葵に言った。

そう、あの時葛さんは居なかった。

葛さんはとある事情があつて居ないと。

『え、ああ。どうしよう。そのままでもいいじゃないか？』

『駄目ネ！葛さんも入らないといけないヨ！』

『まあ、葛の写真があるから切り合わせれば』

そしてあの写真に葛さんの写真を切り合わせた。

この写真を貰ったのはあの事件の二年後、それでも葵さんとは会わなかった。葛さんも。

そして、新光も横目で写真を見ていた。

写っているあの人達は俺達と似ている。香苗に似ている人はいないが俺、浩司、鷹、春奈……やはり似ている。

もしかしたら俺達もあの人達のような道を辿るのか？

粒子を纏いし者

招財飯店から去って今度は売店と超定番な射的。

願はもはやチート技術で品を取って取って取りまくる。店長泣いていたけど。

遼に関してはある意味論外。

遼曰く「願よりすげえ物取ってやるー！」とかで明らかに重そうな物を狙っていたが落ちず一万くらい消えたとか。

でかわりに願がやったらポトリと落ちたが。

遼はorz状態。

で、平賀もある意味調子に乗って、

「あれを取ってなのだ」

指を指した方向は重そうな工具一式。

普通取れんから。

「いや、あれは「あれを取ったら今度の注文タダにするのだ」よし、平賀のためだ」

とは言ったものの……無理じゃないか？

こうなったら能力で……

「シン、能力使うな」

浩司、ばれていたか。

「おう、あんちゃんやるかい？」

仕方がない。

コルク銃を持ち息を整え撃つ。

コン、と工具の箱（空）に当たりグラグラ、と揺れるが倒れない。

「あー、惜しいねえ」

どこが惜しいんだよ。

どうみても落ちない仕様だろ。

もう一回！

コン、と当たりまたグラグラ、またか、と店長は思ったが後ろに倒れた。

「な!？」

店長は驚いているが俺は指輪の重力操作で箱にかかる重心を移動させたのだ。

まあ揺らさないと意味がないけど。
で、取った工具一式はかなり重い。

「ありがとうなのだー」

「はは、で、約束の注文だが……ゴニョゴニョ」

「あや?や?やー、わかったのだ」

よかった、アレ欲しかったんだよなあー。

そして願の射的無双を終え（輸送料は店側負担）葛西臨海公園に来た。

多分キンジも居るはず、来てるはずだ。
そして花火が打ち上がった。

「綺麗だねー」

「ああ、……」

願、何か言えよ。

ほら、君の方が綺麗だ、とか……サムイな。

「でも凄いですよね。ほら、花火のせいかこころへんにも綺麗なのが舞っていますよ」

確かに香苗の言うとおり、こころへんに緋色や黒色等が舞っている。しかしおかしいな。

今の花火ってこんなのやるっけ？

「……どうした願？何を考えている？」

浩司はこの舞っているものを見て考えていた願に声をかけた。

「いや、なんでもねえよ……おい？何か悲鳴聞こえなかったか？」

悲鳴？花火の音で聞こえなかったが。

願は目を閉じ集中をし始めた。

そして何か目を開けわかったかのような顔をする。

「お前ら、俺についてこい」

花火を背にし願は走って行った。

もちろん俺達も追いかける。

俺は微かに悲鳴を聞きその方向、建物の裏道に進む。
あの時、香苗が言っていた綺麗なものが舞っていた。
俺は知っているものだ。

あれは粒子、色金から放出される粒子だ。
粒子は普通見えない筈、だが見えるということはかなり高濃度とい
うことだ。

だが何故？

新光達はついてきてるな。
建物の裏道に入ると粒子の多さが多くなる。
この先にこれの正体が解る筈。

「オウ……イノチダケハ……」

四方五十メートルある空間で片言の言葉を聞いた。

外人……恐らくアメリカ人だろう。

その人を追い詰めている人間がいる。

黒い鎧と黒い鎧のようなブーツが特徴の人間だ。

性別はわからない。

……片隅に人の形をした灰？
なんだ？

鎧の人間は右腕を外人に向けプシュ、と白い針のような物で外人の
眉間を貫いた。

「あ、あが……」

貫かれた外人は痙攣しながら目が白くなり身体が枯渴してくように

痩せてく。

もしかしてコイツ……人の命を吸っているのか!?

全て吸い付くされた外人は灰色となり倒れ人の形から崩れた。

間違いない。

コイツは人を殺した。

そして最近の失踪もコイツが犯人。

灰になればわからんからな。

「動くな！武偵庁特殊部隊だ！殺人の現行犯で逮捕する！」

サムライエツジを構え鎧の人間に向け構える。

鎧の人間は振り向き、

「……イロ、カネ……」

微かだが鎧の人間はそう言った。

瞬間白い針が腕に向かいもの凄い速さで伸びてきた。

俺は漆黒のナイフで針を切り刻んだ。

もし、あれに喰らったら俺は灰になっていたかもな。

だがコイツ、色金と言ったな。

色金や能力を狙うヤツがいる。

あの男の言葉の事を思い出す。そうか、コイツが俺の色金を狙うヤツか。

確かにコイツを逮捕するには骨が折れるな。

「願！」

追い付いた新光はそう叫びさらに皆は目の前の鎧の人間の存在に気付き銃を構える。

「お前ら下がれ！コイツは今までとは一味違う！」

俺はそう警告したがもう遅い。

突如地面に光の輪が鎧の人間、俺、新光と浩司を囲み鎧の人間が身体から粒子を吐き出し半径五十メートルの粒子で出来たドームを作りあげた。

やばいな。これでは逃げねえ。

しかもあんだだけの高濃度の粒子を吐き出すあの鎧の人間……いや、化け物だな。

俺の虎徹が共鳴してる。

間違いねえ、この化け物、色金持ちだ。

「新光、浩司。あの化け物は俺が仕留める。手出しするな」

「俺、来なければよかった」

「全くだ」

新光は苦笑しながら後悔し浩司も後悔している。

この様々な色の粒子で閉ざされた空間に新光はルガー拳銃を、浩司はコルトM1911を、俺はサムライエッジを化け物に向けていた。化け物は右手を引っ込んだような……右腕に穴が開いたアームキャ

ノンのような銃口がこちらに向いていた。

粒子を纏いし者（後書き）

たまに活動報告で次回予告しています。

チートVS化け物

化け物は右腕の銃口を発砲した。
緋色の銃弾だ。

だがサムライエッジで打ち砕く。そしてもう一発撃ち化け物の左肩を撃ち抜く。

だがサムライエッジで撃ち抜いた左肩に開いた穴がみるみる塞がっていく。

成る程、吸血鬼みたいな回復機能もあるのか。

「フツハツハツハツ！」

化け物の野太い笑い声が粒子で出来たドームに反響する。

ちっ、調子に乗りやがって。

化け物は右腕の銃口から青い散弾を吐き出す。
願は虎徹を抜き振るう。

「『^{ガンゾード}銃剣』」

虎徹を振った時に生じた衝撃波の銃弾は青い散弾に当たり消滅し残った衝撃波の銃弾は化け物に襲い掛かる。

だが化け物は目の前に黄色いシールドのようなものを展開し凌ぐ。

ちっ、シールドもあるのかよ虎徹はさっきから共鳴しまくってるし斬りたい。

だが斬りかければさらに共鳴するかもしれない。

化け物の脚が粒子により浮きスライドするように動き始め右腕の銃口から青い銃弾が発射される。

願は前に走り肉薄する。

そして青い銃弾はさつき願が立っていたところに着弾したところが凍りついた。

氷の超能力か。

粒子は化け物に集まり新たな銃弾が発射される。

微かに銃弾と空気の間凍りついているのが見える。

あれが『超能力』ならあれでいける。

「シャットダウン（能力強制終了）」

願は呟き虎徹で斬る。

本来なら凍る筈だが虎徹は凍らず弾が真っ二つに斬られ地面に落ちる。

しかし虎徹の共鳴が一層激しくなる。

くっ、銃弾にも粒子が纏っていたのか。

このままでは虎徹もやばいことになるな。

走りながらそう思い漆黒のナイフで化け物を一刀両断する。

ズル、と斬られた身体がずり落ちて倒れる。

「……なんだよ、あつけねえな。おい、新光、浩司。終わったぞ」

二つに別れた化け物の身体を背に向け待機している二人に声をかけた。

だが新光、浩司は険しい顔をしたまま銃を構え続けている。

ズル、ズル、と妙な音を聞き振り向くと異様な光景が目についた。

「……マジかよ。なんだよコイツは」

その光景は二つに別れた身体の切り口から触手のようなものが出ていてそれが二つから一つに元に戻るように接合され復活を遂げた。

復活した化け物は右腕の銃口を上へ上げ白、黒、青の粒子の大きな弾を吐き出した。

あんなの喰らってたまるかよ！

「フー、S・HSSモード。能力破壊」
キャンセル

息を吐きS・HSS化になり願がキャンセルと呟くが粒子の弾は消えない。

「チツ、今度は特殊能力か」

願は悪態をつき漆黒のナイフを持ちまた化け物に肉薄をする。

そうか、コイツは超能力、特殊能力両方を持っているな。

超能力なら精神力のかわりに粒子を取り込み超能力を発動する。

特殊能力なら身体に貯めている粒子を変換し能力を発動させている。

コイツの制約は……体内にある粒子の消費。

まったく、まるでコイツ色金そのもののように見えるぜ。

だがこれで仕留める、人にはやってはいけない一撃必殺。

粒子の弾が願に向かって走るが弾より速く動き粒子の弾は願が居た1秒前の位置に着弾し白い閃光、ブラックホールみたいな引力を持つ塊が現れたり、冰山くらいの大きさを持つ氷柱が立つが願はそれを無視しナイフを化け物の腹に突き刺す。

『絶』から暗黒色金を利用した『絶対零度』
だがこれはそのアレンジ。

漆黒のナイフから出すオーラで内部から切り裂く技。

「『爆』」

刺された化け物は内部から滲み出る暗黒色金のオーラをモロに受けバン！と破裂した。

本来なら粒子も出るはずだがオーラで切り裂かれ一部を残し消えていた。

これで終わった……いや、S・HSSが警告をしている。まだ終わっていないと。上を見上げるとドーム状に覆われていた大量の粒子が集まりだし粒子が化け物の形を創りだしました復活した。

ちっ、あれでも駄目かよ。

化け物は粒子に身体を纏い始めそのまま願に向かって急降下してくる。

体当たりか！

願は虎徹で急降下してくる化け物を止め、弾く。
だが粒子で虎徹がさらに共鳴しだす。

くそ、虎徹が持たんぞ。

弾かれた化け物はズザア！と地面に激突、陥没し粒子が拡散する。そして化け物は両腕を合わせ小さな銃口ではなく大きな銃口へと変わる。

そこから粒子が集まりだす。緋色の光が。

「あれは……まずい！二人とも逃げろ！」

願は虎徹を地面に突き刺し力を込める。あれは恐らく緋緋色金を利用した能力……緋弾！

あれは虎徹やナイフでは防ぎれない。

ならば『絶対零度』の防御型。

化け物の銃口がみるみる緋色の光に染まり直径二メートルまで広がる。

そしてパシュン！と閃光と銃声とは違う妙な音が響く。

「『絶対防御』」

虎徹を中心にドーム状の結界が張られる。

従来の『絶対零度』では緋弾の威力に負ける。

なら『絶対零度』の高い攻撃を防御に変え例え核爆発が何発起きようとも決して壊れることのない『絶対零度』の防御型……『絶対防御』を使う。

緋弾はその絶対防御を包みこみ緋色の光に染まる。

新光と浩司は緋弾に当たらない安全な位置に移動していた。

そして緋色の光が収まり緋弾の弾道上には地面がえぐられ蒸発していた。

しかし願が発動した『絶対防御』は持ちこたえていた。

「くそ、緋弾を……緋緋色金を持っているのかよ!？」

虎徹を地面から抜き走る。

化け物は両腕を元に戻し両手から粒子が集まりだす。

粒子の攻撃か!

だが遅い!

化け物の懐に入る願。

虎徹で斬りかかる。

ガキイ!と何かが折れ、ギギイ!と虎徹と何かが合わさる。

そして化け物から黒い空間が展開し願を飲み込んだ。

その黒い空間は……超重力化された空間だった。

「願!！」

明らかに傍観していた新光は叫ぶ。

「くっ、……おいおい。それは絶対おかしいだろ」

超重力の空間で遥かに重くなった身体と虎徹を持ち上げそのおかしいものを指摘する。

化け物の両手には二つの刀。

漆黒の刀とさつき折れた緋色の刀。
俺には解る。

あの刀から色金のオーラが滲み出ている。

緋色金と黒く染まった…色金を…

暗い夜は静かに動く

おいおい、かなりおかしいぞ。

色金が二つある……それだけでもおかしい。

色金には相性があり、相性が悪い色金もある。

それなのに色金が二つ持っているのがおかしい。

暗黒色金と虎徹でも共鳴しやすいもの（共鳴中）

しかもあの漆黒の色金は俺の暗黒色金と殆ど一緒だぞ。

「うっ！」

身体が鉛のように重く思うように動けない。

逆に化け物はこの超重力に慣れていているようでかなり素早い。

この空間はかなり薄暗いが化け物の動きは察知できるが……

やばい、早く身体慣れる。

ガキィ！と漆黒の刀と漆黒のナイフが噛み合う。

虎徹だとどうなるかわかんねえぞ。

さらに化け物は右腕で願を殴る。

それを左手で防いだが今度は脚で腹に蹴られよろける。

このやろう……銃使いたいがこの空間内だと使えない。

折れた緋色の刀が粒子で修復し、緋色の刀は願の額を斬る。

「ぐうっ！」

額から鮮血が流れ視界が赤く染まり化け物の位置が特定しづらくな
った。

このままでは埒があかねえ。

共鳴しまくっている虎徹を握り念じる。

共鳴しているのは粒子、色金のせいだ。

ならばその共鳴しているのを力に変え化け物に当てる。

「『震洋』」

共鳴している力を化け物にぶち込む。

共鳴している虎徹を化け物の腹に下から上に斬る。

緋色の刀は砕け散り漆黒の刀はヒビが入っただけ。

だが化け物の腹に大きな切り傷を負わせた。

その瞬間、重力を支配していた空間が解かれ粒子で造られたドーム

が見えた。

化け物は回復せずに腹に切り傷が残ったままだ。

『震洋』が強かったか、あるいは色金を使った技しか効かないのか。

化け物は漆黒の刀を粒子に分解し脚に粒子が溜めて、爆発し音速の
速さで殴りかかる。

虎徹で音速の速さで迫りくる化け物の拳に切り付ける。
しかし、

「……くそっ！」

確かに切り付けた。

だが化け物の拳と虎徹の間に黄色いシールド。

そこに虎徹が止まっていた。

受け止めれた。

それだけではない。

右肩に痛み、その正体は白い針が刺さっていた。

その元は……化け物の左手の甲から伸びていた。

やばい、この針は人の命を……！

「う、ぐあ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……！」

針から力が抜けていく……やはり……生命力を！
視界が……霞む……

「願！」

新光がナイフを持ちながら叫び右肩に突き刺さった針を切断する。
願は力を込め切断された針を抜く。

「く、助かった」

だが……力が入らねえ……

願は虎徹を杖がわりに立ち上がるが新光はそれを制止させた。

「願、よく頑張ったな。後は俺が……！」

やる、と言いかけた時に新光の首筋に白い針が突き付けられていた。

「……………やばい」

明らかに失態を犯した。

願は呆れた顔をしているし浩司は動きたいが動くことができない。そして新光は冷や汗を流しながら息を呑んだ。

化け物は近づいてきた。

針を突き付けながら……刺す気はないのか。

化け物の表情を読み取るが黒い仮面で隠されており読み取れない。

ソウカ……

頭の中に声が響く。

一体誰の声だ？

化け物のか？

伸びた針を首筋から離し左手の甲の中にしまう。

そして用が無くなったのか脚に粒子を溜め、粒子のドームを突き破った。

それは呆然と見るしかなかった。

「帰ったのか？」

粒子で造られたドームが崩壊するように崩れていく。

上からゆっくりと。

「いや、帰ってくれた……と、言うべきか……」

願は息切れをしながら立ち上がる。

崩れた粒子はまるで役目を終えたかのように消え向こうから平賀、

レキ、香苗、翠、柚梨佳、……遼が見えた。

かなり驚いた顔をしているな。

あの化け物は一体何だったんだろう……

「新光、……あとは頼む」

額から血を流していた願はゆっくりと前へ倒れた。

「願！？おい！！」

倒れた願に呼び掛ける新光の声と花火の音が建物の間に木霊した。

某所

花火が鳴り響く中、杖を持つ白髪まじりの老人は人気が少なく警官が佇んでいたが老人はそれを気にせずに通る。

通路の中に進むとぐちゃぐちゃと耳障りな音が響く。

それはすぐにわかる。

通路の片隅に二人の少女……歳は八か九くらいの少女。

その少女の口と手に血がこびりつき人の手が握ってあった。

その片隅には人の身体……死んだ遺体だ。

そう、この少女達は死んだ人を食べていた。

「エルサ、テルア。食事は済んだかね？」

エルサとテルアと言う少女達は髪を上へ上げ玉にし纏めた特徴的な髪を揺らしながら二人の特徴的な目、赤い左目と青い右目の瞳を煌めきながら振り向く。

「あ！アーネストおじさん！」

二人の少女はアーネストおじさんと呼ばれる老人に近づく。

「ほっほ、口と手に血が付いてますぞ」

老人はハンカチで少女達の口に付いていた血を拭う。

「「むきゅ」」

そんな事していると地面に電気が走る。

この演出は何度見ただろう。

空気に目に見える程の電気の粒子が集まりだし、次第に人の形となった。

それは銀髪で服装は銀一色の男。

「ウヒヤヒヤヒヤ！」

この下品な笑い声は以前、新光に奇襲をかけたあの男だ。

「カザフ、また問題起こしてないかね？」

「してねーよ。………そういえば『能力喰い（スキルイーター）』が現れたようだぜ？」

能力喰い………そいつは人の生命を吸い取り、己の生命力に変え相手の能力を奪う謎の化け物。

能力喰いとは日本のEJがそう呼んでいたが。

「ほお、会わない事を祈るのお」

そしてそんなヤツと会ったら……逃げろ、と言われている。

「皆集まったな？」

後ろから男の声がした。

その男は黒い服で顔の目元から鼻に沿って骨格が浮き彫りになっているこの男は前、願と接触した男だ。

「ボス、いよいよ明日だな？」

カザフは身体から電気を放電させながら言った。

かなり楽しみにしているようだ。

「ぶうー、私達は出番がないなあー」

「ないなあー」

エルサが不満を言っつてテルアは復唱をする。

「出番はまだあるから辛抱しろ。では再確認だ。『雷撃』のカザフ。『瞬身』のアーネスト。『紫電の道化師』のガンド。

お前らは明日、東京武偵高に潜入、『桜井機関』の能力を持つ者を捕縛しろ。邪魔する者がいれば最悪殺せ。いいな？」

11 氷の魔女

「……………うゝ、だる」

朝起きたら知っている天井。

あ、そうか。あの化け物と戦って気を失ったのか。
誰かが運んでくれたか？
まあ誰かわかるけど。

「ふあ」

欠伸をしながら起き上がり髪をセットする。
その時、気付いた。

額の傷がないな。
あの時切られたのに……

「で、なんでお前らがここにいるんだ」

リビングに出ると翠と柚梨佳が朝食を摂っている姿を目にした。
しかも冷蔵庫に入れていた材料を無断に使ってだ……

「無断とは何？ 私達はズーとアンタのベッドの中に「嘘つけ」はい
……………嘘です」

「はあ……………で俺の額の傷が治っているのか知ってるか？」

「それは香苗さんが治したんだよ」

へえー。

「まあいいや。それより早く行くぞ」

「えー、アンタご飯食べないの？」

「……………遅刻するぞ」

「あ……………」

お前ら……………

・武偵高

「目立つことするなシン」

アドシールドで待機室にて待機している新光らは魔剣を確保する作戦を練っており浩司がアドシールドが中止になるような行動をするな、と先に釘を刺しておく。
まあ、そうだけどさ。

「大丈夫だって。敵はただ一人だけだぜ？」

「何が大丈夫だ。昨日の化け物、ヴィチェンゾ・ファミリー、そしてイ・ウー。敵は多い。あのときに願が居なかったら死んでたぞ」

確かにな。

「話の途中みたいだがいいか？」

願とチア姿の柚梨佳と翠が入ってきた。

「おお、柚梨佳と翠かわいいなあ」

「あ、ありがとうございます」

「そんなことより新光。何か変化あったか？」

「ああ、あったぜ。今日の朝、メールで脅迫状が来た」

新光は自分の携帯電話を願に渡し願はそのメールを見る。

見て数秒後、願の顔が形相に、まるで般若みたいな顔となる。
ああ、見せなかったほうがよかったな。

「新光……魔剣ぶつ殺す！」

魔剣よ……お前あんな脅迫状にしたから願怒ったからな。
自業自得だ。

「ねえ、どんな脅迫状なの？」

翠は願がもっている携帯電話を見ようとすがすぐ新光に返した。

「ええ〜見ても「駄目だ!!!」「怖いよ〜」

まあ、色々大変だな。

気を取り直し、説明するか。

「じゃあ、説明するぞ……」

これで魔剣を捕まえることができたらいいな。
まあ、願がやってくれるさ。
うん……

中庭に白雪を呼び護衛をする。

白雪は暇だと言ったから大丈夫だからいいがキンジは一体何を
しているんだ。

「いきなりですまんな白雪」

「いえ、気にしてません」

白雪はニッコリ笑う。

遠くで競技の合図である空砲や狙撃銃の銃声が鳴り響く。
流石武偵高、まるでどこかの演習場かどっかに似ているな。

「白雪は凄いやな。成績優秀、部活で部長もろもろ」

これがキンジの台詞だったら白雪は赤くなっただらうな。

「キンジは幸せ者だな。こんな綺麗な人と一緒に居て」

逆に俺は……

おっと、もう昼飯か。

「もう昼だから飯食うか」

と、言った時にメールが来た。
通知メールだ。

「！ケースD7！白雪が、だと!？」

これはアドシールド期間中に事件が発生したという符丁。

しかも一部の者のみ通知するケースだ。

じゃあ今ここにいる白雪は一体……

新光はゆっくりと、白雪に問う。

「お前は一体何者だ」

その返答は口ではなく白雪は攻撃してきた。

紫色の電気が帯びた氷を出して。

超能力、白雪を狙い者……となると魔剣か。

ルガー拳銃で氷を叩き落とす。

それと同時に白雪の周りに銃弾が降り注ぐ。

誰が撃った？

そんな事はわかりきっている。

「魔剣！てめーをぶっ殺す！」

89式小銃をもっている願だ。

作戦はこうだった。

魔剣は白雪を狙っているならあえて狙いやすいところに置いて誘き寄せ願が捕まえる作戦だったがまさかもう白雪が拐われたとは思わ

なかった。

銃弾で煙で視界が捕らえず、晴れたら白雪……魔剣は居なかった。

「やられたな」

新光はルガー拳銃をしまい魔剣が立っていた所に向いていた。

「……魔剣と白雪らしき気配を見つけた。ジャンクショ地下倉庫だ」

地下倉庫って……えげつない所を選ぶとはな。

「なんで教えてくれなかったんだ？」

そうすればこんな茶番も省略されたのにな。

「忘れてた」

何故だし。

「キンジにも「連絡した」はや！」

こいつ、意外にというか用意周到だな。

「行こう、事件は地下倉庫で起きているぞ」

そうだな。

早く行かないと白雪が危ない。

こうして新光と願は地下倉庫の入り口、9番地下倉庫に向かう。

新光達が9番地下倉庫に着きその入り口にキンジがピッキングで開けたところだ。

「おうキンジ、やっと来たか」

願がニコニコしながら話しかけた。

「願、お前あんな起こしかたないだろ！下手すれば死んでたぞ！」

キンジによると寝ている時に自分の周りに一センチ離れた場所の斬撃で起きたようでそれから願からの電話で脅迫され、ここに来たとキンジ曰く鬼畜！と言ったが確かに鬼畜だ。願にあのメール見た瞬間に魔剣を殺す勢いだし。

「遼達はどうする？」

遼達は鷹や春奈の護衛だがここに呼びつけるか。

「ここに呼びつけるがここに待っている訳には行かない。新光、ここは通信科が使っているスパコンの部屋に繋がっている。そこから向かえと伝える」

確かにここに待つのも時間が勿体ない。

浩司達がスパコンの部屋から侵入し挟み撃ちなら魔剣も無事では済まない。

そして願はVランクだ。

やられることはないだろう。

新光は春奈に連絡をとる。
これで終わるんだな。護衛が。

「よし、行くぞ。魔剣ぶつ殺す！」

ただ、願。魔剣からのメールで怒りすぎだ。

地下倉庫……それは火薬が積んでいる場所だ。絶対行きたくない場所。

もしここで引火、誘爆なんて起こしたら巡洋戦艦『フッド』の如くふっ飛ぶ。

そう、文字通りフッドがふっ飛んだ、と。

そんな訳で願は漆黒のナイフ、キンジはバタフライナイフ、俺は一般のナイフで進む。

「新光」

願は新光に小さな声で話しかける。

「昨日、化け物と戦ってから力が半分程度しか出せねえ」

は？なんでだ？もしかして最後の攻撃でか？

「心配するな。半分でも瞬殺できる」

有りがたいな、それでも倒せるとかもはやチートだな。
すなわち、手加減しても勝てるとな。

「ふ、やはり来たか。欠陥品の武偵と小野新光」

どこからか低い男喋りの女声が聞こえ新光達の周りにある火薬、地面が凍りつく。

やはり……ここにいるんだな。

闇の向こうから銀色の刃物が新光に迫る。
だが。

「あめえよ！」

願がナイフではたきおとし刃物が地面に落ちる。そして、そこが凍りつく。

超能力か……

「私に続け（フォローミー）お前の力、教授から聞いた。かなり面白い能力だ、と」

特殊能力のことか。

「知らないか？知らない人について行ってはいけないとな」

「ふっ、白雪がどうなってもいいのか？」

くっ、足元見るとはな。

そんな時、かなり久々に聞いたアニメ声が地下倉庫に響く。

「見つけたわ！魔剣！未成年者略取未遂の容疑で逮捕するわ！」

アリアだ。

ありがたい。
これで勝算が高くなった。

「ホームズか、だが私はG12だ。ただの武偵に私に勝つとでも？」

「てめえ、俺のこと忘れているな？」

願はドス黒い声で言う。

ここに来て若干無視されて怒ってるな？

「お前は！」

魔剣の声が叫びのような声をあげる。

もしかして知り合い？

「てめえ。俺の翠や柚梨佳を一度ならず二度とまでも狙うとは
万死に値する！」

「ま、まで！今回は違う！」

なにこの会話、面白い。

「前は見逃したが今回は許さん！」

「くっ、ここは退かせてもらおう」

声が段々と遠くなる。

逃げたか？

「はは！どこに行こうというのかね？」

漆黒のナイフを握りながら魔剣を追いかけなるべく先に歩き進む願。
一種のホラー映画か。怖いわ。

魔剣瞬殺

「キンちゃん！」

願が歩いて行った先に鎖で縛られている白雪がいた。しかもこの鎖はドラム型の錠に三つの鍵で開けるタイプがつけられている。

浩司の能力で飛ばせば簡単に終わるが……

「白雪！大丈夫か！？」

キンジは白雪の肩を掴み異常がないか確認する。

「私は大丈夫、だけど願くんが高笑いしながら昇って行ったけど……」

あいつ……白雪を助けるよ。

「……おいおい、やばいぞ」

足元に何か冷たい感触が……水、いや、海水だ。

恐らく魔剣は排水口を破壊したな。

海抜以下であるここは海水も入る。

魔剣は俺達ごと消す気だ。

同時に魔剣は願に消されるが。

「アリア、新光。先に行つてくれ」

キンジは学生証の中から解錠キーを取り出した。

キンジは解錠するようだな。
俺達は何もできない。
先に進むしかない。

「アリア、先に行こう」

先に進み願と合流しよう。

・スパコン室

梯子を昇りきり次は広い部屋であった。

そこにスパコンが並んでいる。

そして目の前に願がいるが俺達は絶句した。

そう、願は鎖を持っており繋がれているのは欧州の昔の騎士みたいな格好をしている白人の女だ。因みに倒れているが。

「願……何やっているんだ？」

「おう、新光。こいつはあの魔剣だ」

へえ、こいつがか……

「そしてこいつは30代目ジャンヌ・ダルクだ」

あれ？ジャンヌ・ダルクって百年戦争の英雄じゃないか？
けどそのジャンヌ・ダルクは……

「火刑された、と知っているだろ？だがこいつはそれを影武者だと

ほざいている」

そーなのかー。

「どこかで願、このジャンヌ・ダルクは知り合いなのか？」

「知り合いもなにもこいつ俺や翠達を狙っていたんだぜ。まあ半殺しにして命乞いしていたこいつを見逃した結果がこれだが。おい狗2号（1号は遙）！起きろ！」

ガスッ！と蹴る願。そのたびにジャンヌはビクビクと痙攣する。

「う、うう……」

ジャンヌは半泣き状態でまだ蹴り続ける願。おいやめる。ジャンヌのライフはもう0だ。ジャンヌは何か喋りたい目でこっちに向いている。

「あのさ、ジャンヌがなんか喋りたいみたいだからさ、少し時間をあげないか？」

「……そうだな。3分間待つてやる」

3分しかないって鬼だな。

願は拘束しているジャンヌを解き話せる状態にする。

それと同時にキンジと白雪が濡れた状態で来た。

どうやら浸水した海水を頭まで被ったようだ。しかもキンジはヒステリアモードに入っている。

白雪と何かしたのか？

「お、キンジ。なつたか……」

ヒステリアキンジはかなり役立つ。
もう遅いがな。

「ああ、で魔剣はこいつなのか」

キンジはベレッタをジャンヌに向け構える。

「まあ、そつだな」

ジャンヌは 洋風の大剣を取りだしまるでさっきのはなかったかの
ような顔をする。

すげえな。大抵心折れるのに……

ジャンヌの頭上が明るくなりジャンヌの美しい顔が一層際立つ。

「遊びは終わりだ。今のは芝居だ、ここからが」

本番だ、といいかけたジャンヌだが突然閃光と爆音がジャンヌ、新
光達に襲いかかる。

そつ、それは落雷みたいなものだ。

「ああ！目が！目があゝ！」

願は笑いながら呻きじゃない呻き声……いや、笑い声をあげる。
そんなの無視し砂ぼこりが立ち込めジャンヌの姿が見えない。

「ケケッ！『遊びは終わりだ』？五流風情が生意気なことを言うな
あ」

砂ぼこりが晴れ視界にジャンヌは確認できたがそのジャンヌは地面にめり込んでいた。
正確には誰かの手がジャンヌの頭を掴み地面に叩きつけたのほうだ
が。

その誰かというのは銀髪の男。

何者だ？放電しているのを見ると超能力者か？

「お、お前は何者だ？」

ジャンヌは地面にめり込んでいる状態で苦し紛れにその男に問うが男は無言で足に電気を溜め放出、時速数百キロの速さでわしづかみしたままのジャンヌを壁に叩きつけ顔が壁にめり込む。

声が出ないジャンヌをそのままスライド するかのようにしジャンヌの顔が通った後が壁に残る。

「さて、雑魚第1号の退場だな」

壁から離し口や鼻、頭に血が流れているジャンヌに男は右手に電気を溜めドドメを誘うとするが……

「待て！俺の玩具に手を出すな！」

願は虎徹で男に斬りつけるが紙一重に避けられ手から離されたジャンヌは頭から地面に叩きつれられ呻き声もあげずに部屋の片隅に当たり止まった。

やばいな。ジャンヌが死んじまうかもしれない。

「アリア、ジャンヌと白雪を安全な所に避難させる。手錠も忘れるなよ」

「分かってるわ」

アリアはジャンヌの所に行き引きずりながら安全な所に避難させる。

「キンジ、俺達は願に援護するぞ」

「おう」

ルガー拳銃にドラムマガジンを挿入する。

「キンちゃん。怪我しないでね！」

「大丈夫だ。白雪は避難していてくれ」

「で、お前は何者だ！」

願はスパコンの上に着地した銀髪の男に向け叫ぶ。

「俺？ヒヒヒ！俺はなあ………」

銀髪の男が触れているスパコンが放電しショートする。

「ヴェインチェンゾ・ファミリー、『雷撃』のカザフだ」

ヴィンチェンゾ・ファミリアー

「ヴィンチェンゾ・ファミリアー!?」

突如現れた男、カザフが所属しているファミリアー、ヴィンチェンゾ・ファミリアーの名を聞いた二人、願と新光は叫ぶ。キンジはなんのことも知らないような顔をする。だが、二人は知っていた。

願はその一人と会い色金を狙っているヤツがいると忠告されたことを。

新光は草加から、EJから、ヴィンチェンゾ・ファミリアーは新光達を狙っていることを聞かされたことを。

願にとってはヴィンチェンゾ・ファミリアーには関係ないのだが新光は別だ。

狙われているからだ。

「ウヒヤヒヤ! また会ったな小野新光お!」

こいつ、俺のこと知っている?

いつ会ったんだ?

そんなこと考えていたらどこからか手錠が飛んできてカザフの手首を施錠した。

投げたのはアリアだ。

「よくわからないけど器物損害の現行犯で逮捕よ!」

そんなこと言うアリアだがカザフは呆ける顔をする。

「なんだこれは？」

「対超能力者用の手錠よ！これであんたの超能力は使えないわ！」
自信満々に言うアリアだがカザフは逆に笑う。

「あめえよ」

カザフは施錠された左手をバチバチと放電させ手錠を切断し始めた。まるでプラズマ溶接のように金属を溶かしガチャン！、と切断、スパコンの上に落ちた。
その光景にアリア、キンジ、白雪は驚いた。

「な、なんで！？」

対超能力の道具付けられても能力は十分使える。即ち……

「成る程、特殊能力者か」

願は冷静に分析をした。
特殊能力……新光達が使う能力の名称。
制約に縛られた能力。

「知っているか。ならいいぜ、欠陥能力である超能力との違い、見せてやるぜ！ヒヤハハハ！」

カザフは全身に電気を纏い音速の速さで突撃し新光の横に霞み近くのスパコンを貫き壁に激突、クレーターが出来る。
新光、キンジは反応出来ず衝撃波で飛ばされるが受け身を取り体勢を整えるがその時目の前にカザフが居た。

右手を槍のようにし電気を纏わしキンジの右脇腹を貫こうとしたが
新光は能力、サイコキネシスを発動しカザフを飛ばす。
やはり強い。これが特殊能力者との戦いか。

「ヒヤハハ！そうか！ボスの言う通りだな、小野新光！てめえをヴ
インチエンゾ・ファミリーに入れてやる！指輪も貰うぜ！」

カザフは着地し高笑いをする。

ヴインチエンゾ・ファミリーは俺達の能力を欲していてそして指輪
も欲しいようだ。

時計のストップウォッチを作動させる。

約三十分、能力が使える時間。

「新光が狙いか！」

願はサムライエッジを、キンジはベレッタをカザフに向けて撃つ。

鋼さえも貫く威力をもつサムライエッジ。

人間であるカザフでもただでは済まない。

だが……

「こんなナマクラもんで効かねえよ」

手のひらを出すと電気が盾のような形の放射線状の電気が放電し、
バチツ！と銃弾が当たっただけで終わった。
防がれた。

それでも願はXD-9で跳弾を利用してカザフの周り、四方八方か
らの銃弾が襲いかかる。

「中々いい線いくなあ」

拳を地面に叩きつけ周りに大量の電気を放出し銃弾を弾く。
銃弾では効かないと見た願は漆黒のナイフ、ノワールを持ちカザフの電気を斬り、カザフ本人に斬りつける。
手応えある、と感じた願。

「いつてえな。一皮切れちまったじゃねえか。ヒヒッ」

全てを切り裂く事が出来るナイフが一皮一枚しか切ることができなかつた。

一瞬反応遅れた願に襲いかかる電気の刃。
だが願を引つ張るような感じに飛ばされ刃は空振りに終わる。
そう、引つ張つたのは新光の能力だ。

「くそ、奴のGはいくつだ!？」

願はカザフの能力の限界の底が見えないことに悪態をつく。
あの量の力を使うとしたらG30は下らない。

「G? 欠陥超能力の値なんてしらねえよ。それに一ついいこと教えてやる」

カザフは球体の小さな球を人差し指と中指に挟みこみ指先を願に向ける。

それを見た願は咄嗟に叫ぶ。

「『レールガン超電磁砲』か!？」

超電磁砲……最近ネットで見たことある。

現在米軍が実験しているもの。

馬鹿デカイ電力を消費しマツ八三の速度を誇る弾を撃つ。

そんなもの撃つたらひとたまりもない。

「皆離れる！」

願はカザフに肉薄し新光はキンジとアリアを引っ張り物陰に隠れる。カザフから発生する電気が球に流れていつでも撃てる状態になる。

「俺には制約なんて縛られていない」

グワァーン！と爆音が轟きマツハ三の球が肉薄してくる願に迫る。

・通信科棟前

浩司、鷹、春奈、香苗、翠、柚梨佳、……………遼は願が指示した通りにスパコン室に向かうため通信科棟に来た。

ここからエレベーターで地下に向かう。

この時春奈は新光とテレパシーで通信していた。

「今シン達は魔剣ではなくヴィンチェンゾ・ファミリーの一人と戦ってるわ」

ありのままを話す春奈。

このまま進めばヴィンチェンゾ・ファミリーと交戦する。しかも相手は同じ能力者、かなり強いようだ。

「このまま行けば全員無事では済まない。残る者は残れ」

浩司は冷酷に言う。

浩司なりの確認だ。

「残らないよ！願が戦ってるし！」

「仲間を見捨てないよ！」

「ふん！そんな雑魚俺がぶっ潰してやる！」

柚梨佳、翠は決意を込めた目をし、遼は明らかな敗北フラグを立たせる。

「……よし、行くぞ！」

そして通信科棟に向かおうとしたら通信科棟前に白髪混じりの老人、その手には杖が握られていた。

老人の鋭い赤い左目と青い右目のオッドアイが光る。

ただ者ではないこの老人は……

「はじめまして、『桜井機関』の者。わしの名はアーネスト、ヴィンチェンゾ・ファミリーの『瞬身』のアーネストじゃ」

目の前は……

ヴィンチェンゾ・ファミリー……草加とシンが言っていた組織、おそらく俺達を狙いに来たのだろう。

浩司はそう思い老人……アーネストは杖から、細い仕込み刀を抜き出した。

「ここから先は……行かせませんぞ」

一緒、アーネストの姿が消え気づいたら既に浩司の目の前に姿を現しており下からの斜め切りしてくる。

こいつ、俺と同じ能力か！？

浩司は半分驚きながら、刀の柄を手で受け止めアーネストが握っていた刀と浩司が消え後ろからアーネストの首の横に刀を突きつける。

その刀を握っていたのは浩司だ。

一回目。

「動くな。遼、先に行け」

「よし、行くぞ」

アーネストの動きを封じながら浩司はそう言い遼は翠達を引き連れ通信科棟を目指す。

アーネストは刀を突きつけられながらも手をあげる。

「動くな」

警告したがアーネストは刀を触れ、浩司が握っていた刀と共に消えた。後ろにアーネストの姿を見た浩司はデザートイーグルを取りだし撃つ。

アーネストは走り弾丸を避けながら姿を消す。そしてアーネストは遼達の前に現れ鷹が鉄パイプを持ち、叩くがアーネストが消え代わりに壁が現れる。そう、アーネストが鷹を棟の壁の前に飛ばしたのだ。

「ぐわっ！」

肩から壁に激突し鷹はダウンする。

「くそ！」

それを見た浩司は悪態を吐き遼達の所に行く。

「警告しましたぞ」

刀を持ったアーネストは遼達にそう言う。

すると浩司がアーネストの前に現れ手首を押さえる。二回目。

「先に行け」

手首をひねり背をアーネストに乗せそのまま地面に叩きつけるがアーネストが消え、距離を置く。

浩司は後ろに向きデザートイーグルで追撃、だがまたアーネストが消える。

棟の上に移動したと気づき撃つ。

一、二発アーネストの足元に着弾しまた消え、最初の位置に戻った。浩司は撃とうとするが力子、と撃鉄を叩く音が響く。

「弾切れかな？」

く、俺の能力はあと一回……

疲労感はなさそうだ。おそらく特殊能力者。やつには制約はないのか？

「ではこちらから行きますよ」

刀を構え斬りつけてくるアーネスト。

浩司は避け鷹とバトンタッチするように代わり鉄パイプで受けめる。突然銃声が鳴り響き銃弾はアーネストに襲いかかる。

「ぬー！」

アーネストは姿を消し少し距離を置いた。発砲したのは……

「なぜ戻った」

コルトSAA二丁を持っている柚梨佳であった。

どうやら柚梨佳は残りその他はスパコン室に向かったのだろう。

「加勢するよ」

「やれやれ、あまりやりたくなかったのじゃが……『ルーマニア式
剣術』」

・スパコン室

「しゃらくせえ！」

マツハ三を誇る銃弾をノワールで両断する願。
そこから空きになったカザフにハイキックを決める。
これでもあまり効いていないようだ。

「ケケツ、生ぬるいなあ！」

放電しながら体当たりしてくるがそれを避けスパコンに当たり火花
散りながらスパコンが爆散する。

成る程、『雷撃』か。
ただ目標に向かうだけの猪みたいなやつだな。

「来いよ、三下。格の違いを見せてやる」

煙が立ち込め新光達も煙の中に、そしてカザフは高笑いしながら出
てくる。

「ケケケツ！三下？おめえなあ……」

煙の中から新光はむせながら出てくる。

「げほっ、ヤバいな」

そこからキンジ、アリアも出てくる。
二人ともかなり埃が付いている。

「新光、今ならあいつに攻撃できるぞ」

ヒステリアモードのキンジはベレッタを構えながら言う。

確かにカザフは今願と戦っている。

期待はできないが攻撃する価値はある。

「よし。キンジ、アリア。カウント三から数える。零になったら――
斉射撃」

新光、キンジはカザフに照準を合わせる。

だがアリアは構えていない。

「三」

「ねえ、キンジ」

カウントを数える新光とアリアの声。

「三下っていうなら」

カザフの声。

「ん？なんだい、アリア？」

キンジはアリアに向き話す。

「二」

「仲間の中に『裏切り者』がいるのを気づかないとなあ！」

「外したら風穴よ」

ドスツ、グチャ！となんか嫌な音が響く。
なんだ？と思い新光は振り向く。
すると、新光は

「アリア？なにやっているんだよ!？」

そう、新光が見たのはアリアが素手でキンジの腹を貫通させたのだ。
防弾制服を着たキンジを。

目の前のは……（後書き）

やべえ、あんまり面白くないぞこれ。
次は挽回してやるぞおー！

絶対絶命

『ルーマニア式剣術』……そう呟いたアーネストは柚梨佳に刀を向け少しだけ手首を捻る。
ズガッ！と何かが切れた音。
ズズウと何か崩れる音。

「う、そ!？」

四階建ての数十メートルの長さの通信科棟が斜めに崩れ落ちた。

「柚梨佳!!今からでもいい!さっさと行け!」

浩司は柚梨佳一人、いや、俺達全員でもアーネストにはおそらく勝てないと思いき先行けと言う。

だが柚梨佳はそれを無視しまだ隠しているコルトSAAで早撃ちをする。

アーネストは反応できず肩に穴が空き血が飛び散る。

「ぐっ、不可視の銃弾か。……だが今度は効かないぞ」

「なめないで!」

コルトSAAで不可視の銃弾を撃つ。

「だから効かないと」

刀で弾き一瞬で柚梨佳の後ろに瞬間移動し首に刀をかける。

「言ってますがな？」

「くっ！」

柚梨佳は振り向きバックステップしながらコルトSAAを乱射する。だがアーネストは見事な刀捌きで銃弾をはたき落とす。

「さて、お遊びはここまでにしますかな」

「あの馬鹿者が！」

浩司はデザートイーグルをリロードしアーネストに向けようとしたらデザートイーグルが砕け散る。

「なっ!?!」

「い、痛い!痛い!」

デザートイーグルが破壊されたのに気がとられ、さらに柚梨佳の悲鳴。

見ると彼女の足元にはコルトSAAの残骸。そして刀は彼女の手首を貫いていた。

「武器を失った武偵はただの人間」

アーネストは手首に貫いている刀を抜き杖のグリップの形をした柄で殴り柚梨佳は気絶した。

「でやあ!」

少し遅れて鷹が鉄パイプで殴りかかるが鉄パイプは切られさらに首に殴られ倒れた。

「さあ、一緒に来なさい。私たちの楽園を創るために」

楽園を創る……その意味が解らず浩司はコルトM1911を取りだし撃つが刀で弾かれた。

「何をしても無駄ですぞ、さあ来なさい」

「……悪いがそれはさせん」

シユン！、とアーネストの目の前に瞬間移動したかのような速さで現れた男は刀でアーネストの刀を、アーネストごと吹き飛ばす。

「ぬう！」

宙に浮いたアーネストは瞬間移動で地に着く。

「ほお、貴方は……」

「き、貴様は……」

アーネストと浩司は驚きの声をあげる。

そう、現れたのは草加と共に居たあの男だった。

絶対絶命（後書き）

ぐう、頑張ってもこの程度か……orz

道化師

「アリア！どうしちまったんだよ！」

新光はキンジの腹を貫通させたアリアに問う。

だがアリアは不敵の笑みを浮かべる。

一体何が……

「ちよつと！？一体何があつたのよ！」

少し晴れてきた砂埃から聞き覚えのあるアニメ声。
まで、何かおかしいぞ。

「アリア！？」

そう、その正体はアリアだ。

だが待て、目の前にいるアリアは……

アリアが、二人居る！？

「あ、あたし！？」

「キンちゃんの仇いー！」

もう一人のアリアに驚くアリアと同時に武装巫女、白雪が刀を持ち
跳びながら切りかかるがアリアは避ける。

キンジを攻撃したアリアはかなり距離を離れる。

やばいな、キンジの出血が多いぞ。

「ふふ」

アリアは笑いながら紫色の電気を放電させ背が低いアリアから背がそれなりに高い女性へ、武偵制服から紫色の服、電気が通っている紫色の髪に変化した。

「ふふ……ふははは！ やつぱりかわいい子には油断するのね、油断大敵よ」

アリアに化けていたこの女性。

前、理子が化けていたやつを見たがあれは皮を被った変装、だがこいつはそれを無しでアリアに化けたのだ。
体型、声、特徴、武器も全部。

「おい、ガンド。そいつは中国人じゃねえ。殺す価値ねえぞ」

カザフはその女性をガンドと呼んだ。

「あらごめんなさい。面白くてつい」

おそらくガンドという女性はあの砂埃の中からアリアに化けた……のだろう。

そんな分析をしているうちに白雪は札を出してキンジにつける。すると淡い光がキンジの開いた腹を少しずつ塞げてく。

「もう許さない。キンちゃん、ごめんなさい。私が守らなかつたばかりに……ガンド、もう貴女は逃げられない」

白雪は決心したかのように頭のリボンをほどく。

すると白雪を中心に何かが渦巻きそして刀に焰が灯る。

そう、あれは白雪の超能力。

「星伽の巫女がその身に秘める、禁制鬼道を見るからだよ。私の本当の名前は　緋巫女！」

白雪は床を蹴り、ガンドに一直線に走る。

そして白雪はガンドに刀を振る。

するとガンドはその攻撃を避け刀は地面を抉る。

ガンドの避けかたはまるで新体操みたいな動きと人間ではないほどの跳躍力だ。

「星伽候天流の初陣、緋焰毘、次は緋火虞槌　これで決める」

「うふふ、やってみなさい」

数分間、刀の斬激とガンドの攻撃　フリスビー型の紫色の電気が繰り広げられた。

それを白雪は叩き落としガンドは白雪の攻撃を避ける。

繰り返された結果、白雪は息切れを起こしていた。

「あら？もう終わり？」

対してガンドは楽しそうにしていた。

これが超能力の欠点か。

「ま、まだあ……」

白雪は刀を構え、焰が一層激しくなる。

「そうそう、そのいき。私はここから一步も歩かないわ」

ガンドはその場に止まり白雪は一直線に走る。
これで決めるつもりだ。

「緋緋星伽神　！」

刀がガンドの前に止まった。

いや、白雪が止めた。

それは……

「キ……ンちゃん！？」

ガンドはキンジに化けたのだ。

そのせいで白雪は刀を止めた。

そしてキンジに化けたガンドは手のひらを白雪の顔に押し当てる。

「駄目だよ。止めたら」

キンジの声を出すガンドは白雪を壁まで飛ばす。

「きゃあー！」

飛ばされた白雪はロープ状の電気に繋がられ拘束される。

壁に縫い付けられた白雪は脱出しようとして試みるが脱出できない。

「そこでおねんねなさい」

「願！この遠様が来たぜ！」

エレベーターから春菜、香苗、翠、遼が出てきた。
春菜と香苗はすぐに新光の側に向かう。

「香苗！キンジを治療してくれ！」

香苗はすぐ頷き瀕死であるキンジの治療、特殊能力の治療ヒールングをかける。
だが香苗は深刻な顔をする。
かなりやばい状況なのだろう。

「翠！遼！来てくれたか！」

願はノワールでカザフと交戦している。

「勘違いするなよ願、俺はお前を助けに来たんじゃない。そこにいる奴を倒すのはこの俺だからな（訳：か、勘違いしないでよね！あんたの為に助けに来たんじゃないからね／＼）」

「……………はいはい（ツンデレですね、よく分かります。あとキモイ）」

敵であるカザフとガンドや瀕死のキンジ、拘束されている白雪にもその場に居る全員は異口同音をする。

「ねえ！？皆酷いよ！？」

「ケケツ、てめえ強いのか？」

「そうだが？後悔するなよ！」

「てめえがな」

「でやあー！　　くふう！」

遼の雄叫びと共にUSP45を構え撃つたのはいいがカザフの周りに発生している電気の鎧に弾かれリアットを食らいそのまま壁に当たりクレーターが出来上がる。

「なんか言っただか？」

ぐいぐい押し込まれる遼は何も反応しない。

返事がない、ただの屍のようだ

「ケケツ、よわ。そしてやっと本気だしたかあ？」

後ろに振り向くカザフ。

そこには願がいた。

だがその願は何かおかしかった。

腕、脚、頭などがさつきより三倍ほど膨れ上がっている。

いや、今も膨れ上がっていく。

「俺の友人^{キンジ}を死なせた罪、これは重いぞ」

今なお膨れ上がるこれは目の前に友人が死にかけているときに発動する暴走したHSSであった。

軽く暴走

「てめえーは俺を怒らせた」

身体が膨れ上がっていく。

これはover・H（ry）という通称O・HSS。

こいつは身体の中に一生分使うほどの力がみなぎってきた、的な感じに溢れてきてその量は身体が膨張している分に比例している。

HSSとは異性を（ryのだが稀に異性とは関係なしに発動する物もある。

その一つはこれ。

そしてこの能力の引き金は親友が死にかけているとき。

そして発動する確率は、顔が無くなって（消滅）もまだ生きているのが普通な遼が死んでしまったくらい低い確率。

数字にすると一京分の一の確率。

そして肝心の力は……

願は人指し指で壁を軽く触れる。

ズガガア！となんと部屋が百メートルも広くなった！

それほどの力が一分間ずっと……元の身体の大きさに戻るまで出せる。

欠点は力を消費しないかぎり膨らみ続け破裂（死亡）する。

「いくぜオイ！」

「速っ……」

光より速いと噂されているニュートリノよりも速く、カザフに近づ

普段の願なら無事では済まないだろう。
そう、普段なら。

「な……に!？」

「やはり貴様にはこの能力で倒すしかないようだな」

カザフにとって信じられないことが起きた。
生身である願がカザフの攻撃を止めたのだ。
クンツ、と飛ばされたカザフは理解出来ないままスパコンに直撃する。

一体誰が？新光か？いや、あいつは俺を見ず死にかけているやつを見ている。

すなわちあいつがやったのか。

何も素振りもしていない願に変化が起きていた。今までにはない殺気。

そして願の目が、白目の部分が黒く染まり黒い髪と瞳が黒く赤い色に染まっていた。

「さあ行くぞ。クソ野郎が」

「チツ！なんだそれは？」

突然オーラが変わったのを感じたカザフは体勢を整え変化した願に睨み付ける。

そう、願はこの能力でケリを着けようと思ったからだ。

『Demon Savant Syndrome』
という能力を。

「貴様には教えんゴミ虫」

「ほざけ！」

願の挑発に乗ったカザフは手を槍のような形状にして電気を流し足に電気の反発で高速の速さで肉薄する。

カザフは挑発に乗ったがそれでも願に勝てると思われていた。
だが……

「遅いぞゴミ虫」

高速の速さで肉薄したカザフを手で押さえつけ、ハイキックのカウンター。

カウンターを食らったカザフは飛ばされ体勢を整えたが離れていたはずの願が既に目の前に現れていた。

「な、に！？」

コンマ数秒の戦い、息を整えていないカザフは猛烈なラッシュを受

ける。

血を吐きながらカザフは拳に電気を込めて突く。

「遅いぜ！」

願はそう叫び額に迫り来る拳を避けて腹にカウンターを入れる。

急に速くなった願、これは

Demon Savant Syndrome、略してDSS。

身体能力、反射神経が約60倍にはねあがりカザフの攻撃はもう、蚊が止まったような感じに感じているのだ。

そしてカザフから見たら逆に速くなったように感じている。

腹にカウンターを受けたカザフは吐血し後退する。

だが後退したカザフの動きが止まった。

いや、止められたのだ。

足に絡み付いている願の黒いオーラに。

「オーラが実体化するだど!?!」

今までオーラを武器に利用したのを初めて見たカザフはありえないと心に叫び迫り来る願の蹴りが顔面に直撃し飛ばされたカザフは頭からコンクリートに直撃する。

「あああ!三下あ!てめえまだ動けるだろ?」

完全に口調が最高のハイに達している願は汚れた手を舌で舐め汚れを落とす。

壁に穴が空いたところから顔が血まみれになったカザフは手に電気を槍の形に変えて出てくる。

すでに出血多量ではないか？と思われていた。
いや、顔が青白くなっている。
そろそろやつは限界だろう。

「ぐうう！てめえ、調子にのるな！」

電気の槍が飛ばされ、願に迫る。

願は避ける素振りも見せずただ、赤黒い瞳は電気の槍を映している。勝った、と冷静に言ったカザフだが電気の槍はまるで犬が飼い主に戻って行くように願の前からUターンしてカザフに戻って行く。驚愕したカザフだが動けるはずもなく自ら投げた槍を受け身体を突き破り傷口から大量の血を吹き出し静かに倒れた。その姿を見た願は血溜まりになったカザフに近づき虎徹を手にする。

「『ベクトル操作』だ。ラット（どぶねずみ）が！」

虎徹を振り上げ、見下した目で凶器は降り下ろされた。

雷神

虎徹の刃はカザフを斬るコースになっていた。これは誰から見ても明らかにそうだと思っていた。

しかしその予想を反して刃はカザフを斬ることがなかった。

いや、正確にはカザフは粒子状に分解し、姿を消し空を斬ったのだ。願はすぐに状況を把握する。

奴は電気を使う、ならばこの粒子は電気。

そのような解析をしていたら独特の笑い声、後ろから無惨なスパコンの残骸の間に粒子が反発するように放電しながら集まりだし血も傷も顔色が戻ったカザフの姿になっていく。

「ケケケツ、危なかったぜ」

カザフの表情はかなり余裕を持っているように見える。願は虎徹を床に突き刺し赤黒い瞳が光り輝く。

「お前にはやはり拳だけで充分だ」

「何時まで余裕をこいているんだ？」

カザフは電気の反発でさらに速度を上げて願に肉薄する。

だが反射神経、身体能力が向上している願にとっては造作もない。軌道を読み膝でカザフの腹に打ち込む。

バンッ！と破裂したような音が鳴り響く。

手応えがある、だがカザフはニヤニヤとしている。

打ち込んだその重さは約5トン。内臓が破裂してもおかしくはない

のにカザフはまるで効かないような表情をしている。

「こんなものか？」

四方八方から無数の電撃が願に向かってくる。

電撃、いや、雷撃と言うべきか、その雷撃をすり抜けながら離れる。

距離をとりカザフの姿を見るとやつは黒いオーラを纏い薄く見えるがオーラで創られた黒い翼も見えた。

それにカザフの後ろに黒い電気の鋭い尾もあると確認した。

いままでのカザフではない、と願は微笑みながら思った。

「それがめえの本気の姿か、カザフ」

「そつだ、『雷神』と言うべきか。これでお前とは五分五分だ」

徐々に黒い翼が濃くなりその翼で滑空しながら黒い電気の槍を投擲する。

「何度やっても同じだ。この『ベクトル操作』で……」

願は絶対に逆らうことの出来ないベクトル操作を槍に向け操作する。

「……馬鹿な!？」

槍は方向転換をせずそのまま願に迫る、だが反射的に身を縮めこみ避けるがさらに横から黒い電気の鋭い尾が来る。

しゃがんだ状態から跳び跳ねて鋭い尾も避ける。

だがまだ攻撃が終わっておらず上から雷撃がくねりながら迫る。

空中に跳んでいる今の願はさらに空気を蹴って避けることは出来ない。

だが身体を捻ることは容易い。
身体を捻り雷撃を避ける。

しかし戻ってきた鋭い尾が下から突き刺す勢いで願を突き刺してきたが願はそれを拳で叩き落とす。

ゴソツ！と鈍い音がしたがビクともせず押し返され天井を貫き瓦礫が落ちる。

滑空し終わり着地したカザフは穴が開いた天井を見続けた。

数秒後、穴から落ちてきたのは願。

しかもDSSが解除されており髪や瞳は元の色に戻っているが傷はDSS状態のうちに60倍の自然治癒で治っていた。

しかし立つ気力が殆ど無く万事休すとなっていた。

なぜだ、なぜベクトル操作が効かないんだ。

カザフの鋭い尾が動きだしその鋭い刃は願に向けられている。動くことも出来ない今の願はこの凶器は自分を容易く殺すこともできると。

「ケケ、冥土の土産として教えてやる。『雷神』は特殊能力しか効かない。特殊能力者じゃないお前には勝ち目がない。ギャハハハ！」

高電圧になった鋭い尾は願に向けて放たれた。

紫電の道化師

すこし時を遡る。

願がO・HSS状態になった時からの別の戦い。

「うふふ、さあて殺っちゃおう?」

キンジに化けているガンドは紫色の電気を放電させながら本来の姿に戻っていく。

その光景はまるで道化師のように錯覚した。

「……カナ、キンジは大丈夫か?」

香苗は今なお苦しい、いやかなりキツイと思われる顔をしている。衛生科である香苗がこの表情をしているのは……

「出血が多すぎる、早く病院に行かないと」

だが武偵病院に行くにはここから出ること、出るためにはエレベータから出ることだがそのエレベータの入口には電気の柵で閉ざされている。

すなわち、出るためにはガンド、カザフを倒すことだ。

「ハル、俺は翠を援護する」

新光はトカレフを春奈に渡す。

翠一人ではガンドを倒すことは出来ないかもしれない。それに戦力が一人でも多ければこ有利となる。

「大丈夫なの？」

「大丈夫だ、な？アリア？」

「ええ、それにアタシに化けたあの女に風穴を開けてやるわ」

化けられたことに怒っているアリアは冷静にガバメントを取り出していた。

翠もS W A Tを取り出して構えていた。

それを見たガンドはふーん、と興味なさそうな目をしている。

「まさか坊やたち三人で私を倒そうと？」

「「そうよ！」」

「……だったら……私を楽しましてね！」

驚異的な跳躍力で翠に飛び掛かるガンド。

カザフとは違い、能力ではなく自分の足の強さで飛んでいた。

「くっ！」

翠は避けてS W A Tを三点バーストで撃つがさらにガンドは高跳びするかのような高さを飛び銃弾を回避する。

「逃がさない！」

アリアのガバメントが火を吹くが速すぎて弾が当たらない。

「ふふふ、お返しよ」

高く跳びながらガンドは円盤状の電気を放ち三人に襲いかかる。翠は弾道を見、銃弾で叩き落とす。アリアは円盤状の電気を叩き落とす事が出来ず後ろに下がり避ける。新光はルガー拳銃のVT信管弾で爆発させて消滅させる。ガンドが着地した時、爆発した煙の中から銃弾が飛んでくるが新体操をしているかのような回り方をして避ける。だが一発の銃弾がガンドの紫色の髪を散らす。

「……ちっ！」

舌打ちをしながら煙の中から姿を現した翠に向けて円盤状の電気を投げる。

フリスビーみたいな形をした円盤の電気を叩き落とすべく翠は引き金を引くが撃鉄の音しか鳴らなかった。

弾切れ……そう思った翠はすぐにマガジンを取り替えてすぐに叩き落とす。

ガンドは何か考えている顔をする。

どうやらこの戦い方では勝てない……と思っているのだろうか。

ズズーン！と向こうで轟音が鳴り響く。

願とカザフとの戦闘だろう。

「……はっ！」

またもやガンドは身体中から紫色の電気が放電して姿を変えていく。その姿は見たことある姿でもあり仲間の姿。

それは藍の色素が混ざった漆黒の髪と全身に傷痕が残っている人物に。

それは……

「「「……願」」」

翠は冷静にアリアは少し恐れて、新光は呟くように声を出す。

「さあ、ここからが本番」

願に化けたガンドは願の声で発する。

そして漆黒のナイフ、ノワールを取り出し舌でノワールの刃を舐める。

ガンドが持っているノワールは願が持っているノワールより刀身が長く、まるで刀のようなノワールだった。

コピーとオリジナルの差

「翠、援護する」

「いいよ新光、アリア。私一人で充分。あの偽者の願は私が倒す」

新光、アリアは加勢すると行動するが翠に止められさらに一人で充分と言われた。

それを聞いた新光は翠を見るが彼女の眼は『大好きな人に化けている奴を殺す』という眼になっており彼女は願という存在があつてこそ強くなる、と直感できた。

「一人でいいのかな？」

願に化けているガンドは刀に変形したノワールを振り回す。

振り回し周りのスパコンが豆腐の様に軽く斬られ半壊していたスパコンが影も形もなくなった。

ガンドの持つノワールの切れ味はオリジナル並に良さそうだ。

「取り敢えず……死んで？」

翠はSWATでガンドに撃つその姿は友人であろうとも容赦はしないと殺気立ち乱射する。

乱射とは言っても照準を定めており銃弾はガンドに直線に向かつていた。

「はっ！」

ガンドはノワールから発生した暗黒のオーラを360°纏わし銃弾

がバチバチと電気と接触したような音が発して弾かれた。弾いた後の表情はかなり余裕な、天と地の差があるような実力があると見せつけている。

「これでおわりかな？」

「何を言ってるの？」

ガンドは翠が言った事が一瞬分からなかったが周りにビシッ、ビシッと何かを弾いている様な音。

この音は弾いた銃弾が床、壁、銃弾同士が弾いている音。

銃弾撃ち（ビリヤード）の連携番。

ビリヤードの玉が全ての玉を弾き白い玉を残し全てを落とすような感じに全ての銃弾は油断しているガンドを当てた。

油断大敵……と言うのだろう。

油断していたガンドは更なる襲撃に気付かず致命傷を負った。

致命傷を負ったガンドは願を化けるのを止めて足取りが悪くなる。

「願はこんなに弱くない。願は油断せずに戦って必ず勝つ、そんな人よ。ガンド、あんたを逮捕するよ」

翠は見下した眼をしている。

そんな眼で見られているガンドだが気にせず後ろに眼を向ける。後ろに映るその姿を見て全員は絶句した。

「願は必ず勝つ？負けるんじゃない？」

ガンドが呆気ない様な口調で喋る。

「願！くそっ！」

願は倒れ黒い電気を纏っているカザフが止めを刺そうとしている。
新光は能力を使う前に時計を見る。
能力行使してから三十分は経っている。
すなわち能力が切れたということだ。
遠くからでは援護できない。
……いや、出来ていた。指輪の重力操作を。
その存在を気付いた新光だが既にカザフの一部であろう鋭い刃をも
つ尾が願に突き刺そうと動く。

「願いー！」

絶体絶命の願に翠は叫ぶ。

ガキイ！

と鈍い音が響いた。

願の前に一本の大きな氷柱が現れカザフの攻撃を止めたのだ。

「つち！これは！」

カザフは焦りを見せて後ろに下がる。

その瞬間に氷柱から小さな氷が床を沿い始めカザフとガンドに向かう。

道中にあるスパコンの残骸に触れて凍る。

ガンドは蝙蝠コウモリになり逃げた。

カザフは宙に飛びやり過ぎた。

願はすぐに状況を把握する。

この氷柱は一体何なのか。

氷と見るには使えるのは空気化しているジャンヌだがやつはこの頑丈でカザフの攻撃まで耐えられるほどの力はない。他にも誰も氷を操る能力者は居ない。すると第三者が……

ゴゴゴ、と氷柱が激しくなりそれが四つに割れた。

「やっと見つけましたで？小野新光はん、萩原願はん」

氷柱が割れたその中には中性な顔を持ち男か女か分からない人物が関西弁に近い言葉で喋る。

そしてその人の手には青い冷たい氷のような扇子が握られていた。願はこの人物何処かで見えた気がすると思った。

「ケケ、誰だお前は？」

その人は扇子を開いた時に氷の粒を撒き散らす。そして扇子で口を隠しこつ言った。

「EJ所属の雪風。どうぞよろしゅう」

コピーとオリジナルの差（後書き）

結局翠とガンドの勝負はって？
見ての通り翠の圧勝です。

12・援軍

「お、お前は……むぐっ!？」

突然現れた人物雪風に何か言おうとした願だが雪風は手で口を抑え込んだ。

雪風の肩に掛かるほどの長い冷たい色をした髪が揺らぐ。

「願はん、言つてはあかんよ」

面識がある様な言い方をする二人だが雪風は願の首を掴み翠に向けて投げ飛ばす。

「きゃ!？」

翠と新光は願を受けとめ願は叫ぶ。

「おい!何をする!」

「五月蠅いなあ。三下は黙っておくんなまし」

雪風は見透かすかのような冷たい眼で見ながら言つ。

「てめえ!」

「待て!願!」

願はノワールを取りだし襲いかかろうとしたが翠と新光二人がかりで止める。

「ケケっ、そろそろいいかあ？」

カザフは親切にも待つておりすぐにも戦おうとしている。

対して雪風は凄く静かに扇子で口を隠しながらカザフに振り向く。

カザフの雷神による黒い雷がカザフ本体から、もしくはスパコンがショートしていた電気が黒くなり雪風に襲いかかる。

「あぶねえぞ！超能力者のお前では防ぎれないぞ！」

願は叫ぶ。

確かにカザフの特殊能力は超能力者では太刀打ちすることは出来ない。

だが願は叫んだ瞬間にハッと気付く。

雪風が造った氷柱はカザフの攻撃を耐えたことを。

雷の閃光と爆発の衝撃で狭い部屋に響き渡る。

願、翠は爆音には慣れていているから大丈夫だが新光、香苗、春奈には慣れておらず耳を塞ぎ身を縮こまる。

煙が巻き上がりその中から傷ひとつ付いていない雪風がいた。

「てめえ、何をした」

「……別に水で防いでやったんや」

雪風は冷静に答えた。

そう、雪風の身体の表面に薄い水を纏っている。

普通、電気は水を通すが雪風が操った水は純度100%の水だ。

水の電気分解をするとき水に水酸化ナトリウムを入れると通しやすいと説明すれば解るだろう。

「ケケっ、電気が駄目なら物理的に攻撃だ」

カザフの雷神で造られた尾が動くが突如消えた。
いや、正確にはカザフの雷神が解けたと言っべきか、黒いオーラも消え失せた。

「今やな」

呟いた雪風は扇子を上挙げてひし形の氷を生成しカザフに投げる。
この間に十秒は経った。

カザフなら電気で撃ち落とすだろう。

「ちっ！」

だがカザフはそれをせずに避けた。

新光、願二人は疑問に思った。

十秒という長い時間をカザフは攻撃せずに避けたのか。

「そうか、分かったぜ！カザフの制約！」

先に気づいたのは願。

カザフの制約は雷神解除からのタイムラグを。

全壊寸前のスパコンに隠れたカザフはさらに数秒後、能力発動して出てくる。

「てめえ……俺たちの邪魔をするな！」

「邪魔……ねえ」

雪風は久世から聞いたヴィンチェンゾ・ファミリーの目的を思い出

す。

「はあ……復讐は何も残らへんよ。カザフやったな？もう勝ち目な
んかあらへんよ。なぜなら……」

扇子をパチン、と閉じた瞬間に雪風と新光達の間大きな氷の壁が
下から沸き上がり天井まで達した。
完全に隔離されて氷の壁は透き通っていた。
皆は気づいていない、その氷の壁の中に遼が入っていることを。

「てめえ！俺はまだ戦える！出しやがれ！」

願の叫びに雪風は振り返る。

「願はん、あんたは三下やから黙り。せめて新光はんを守りい」

雪風の軽蔑という言葉に血管がプチ切れそうになる。

三下はお前だろ！と叫びたいようだ。

雪風はそれを無視し上にあるスプリンクラーを見た。水が流れてい
る。

空気中に水分は沢山含まれている。

「あつし、水が大の好きやから」

色金の力

雪風とカザフの戦闘が始まって十分……
壁、床、天井にさらに穴が開きスパコンの残骸も雪風の氷によって完全に消え去った。
そしてスプリンクラーから流れる水を使い雪風は無限に近いほどの氷の攻撃をしていた。

「はっ！」

「うりゃー！」

扇子を突き氷の波動がカザフに当たり凍りつくがすぐに解かれカザフは電気を籠めた拳で腹に殴る。

「うっ、そりゃー！」

「ちっ！」

一瞬衝撃に襲われた雪風。

カザフの拳に水が覆われていた。

そう、勿論電気を通さない純度100%の水だ。

衝撃だけ喰らった雪風は少し後退っただけで扇子で凧ぎ払う。

その扇子の先から長い剣のような氷が現れカザフは避けて上に跳躍する。

「ちっ！」

上から何か来ると感じたカザフは電気の粒子になり避ける。

一瞬遅れてカザフが居た位置に巨大な氷柱が天井から生えた。もし、避けなかったらカザフは串刺しになっていたのだろう。

「はよ帰ってくださいな。怪我人がいるんねん」

雪風は少し下がったカザフに言う。

怪我人とは勿論のことキンジだ。

「ケケツ！断る！」

カザフは頑固なのか仕事に忠実にやるのか分からないが引き下がらない。

そんな様子を見た雪風は呆れた顔をする。

「やれやれやな、ならこれでもやるかや？」

眼を瞑る雪風。

カザフはチャンスと思っていたがみるみる表情が恐ろしい物を見たかのような顔をする。

「てめえ！その力は！」

空気が変わったのを気づいたのは全員。

だが一人……願は更なる衝撃を受けた。

「なんだあの色金は！？見たことないぞ！？」

願は雪風の中から色金の気配を感じ取った。

雪風の身体から虹色のオーラが滲み出て次第に青、毒々しい青に変わり瞳も青に変わる。

滲み出る毒々しい青のオーラは扇子にも帯びて雪風は閉じた扇子を前に上げる。

「終わりや」

扇子を開いた瞬間、雪風の周りが全て青い氷に覆われた。氷に覆われて、空いている空間は雪風の周りにしかない。扇子を閉じた瞬間に氷は全て砕け散った。カザフは砕け散ったのか？

いや、雪風の感触ではカザフは死んではない。上を見上げる。

穴がある。

しかも微かに光を射し込んできている。ここから逃げたんやな。

毒々しい青が身体から消え隔離していた氷の壁が下から水蒸気になり壁の高さが低くなる。

「キンちゃん！キンちゃん！」

中から白雪の声が聞こえた。

ガンドのロープが消え自由になったんだろう。

「止血しました。ですが血が足りません。武偵病院まで連れていかないと」

「よし、俺が背負っていく。願、へりを呼んできてくれ」

「分かった」

新光はキンジを背負い、願は携帯を取りだしへりを呼び出す。
ただこの光景を見ていた雪風は不安に思った。

草加はん、一人死んでまうけどええんの？と

死と『業』

アドシールドは中止になりました。

そう、EJの久世と言う男が助けに来て浩司は柚梨佳を連れて武偵病院へ。

そしてアーネストは野次馬が来たのを理由に撤退。久世も了承しました。

そして雪風の登場によりカザフも撤退。

重傷のキンジを連れて武偵病院へ。

ですが……現実には残酷でした。

・武偵病院

集中医療室の中から響き渡る電子音は一定の音を出していた。そうキンジは……

「キンジ！キンジ！バカキンジいー！」

「キンちゃーん！」

アリアと白雪は涙を溢しながら布団に伏せていた。

やはり、時間が経ちすぎたのか。

そう思ってしまう新光。

香苗は二人を慰めようとするが新光は止めた。

しばらくそっとしといたほうがいい、と。

新光が先に出て浩司、香苗も順に出ていく。

廊下に出て鷹と春奈と合流した。

鷹は頭に包帯が巻かれていて目立った怪我はない。

次は願と翠と柚梨佳と遼だ。

願と翠は目立った怪我はなく柚梨佳は手首に包帯が巻かれていたが彼女曰く神経とその周りの肉だけは斬られていなかったとのこと。

遼は重度の凍傷で入院。

しかも皆見舞いに行っていない。

理由は願達はこう言った。

遼は要らない子だろ、と。

酷いな。

新光は願にキンジの事を言った。

死んだ事を言った瞬間に願から殺気を含んだオーラを出した。

「キンジが死んだ、だと？」

「ああ」

新光は怯えずに答えた。

「そうか」

願はそれだけ言っただけで外に出ていった。

余談だがこの殺気で殆どの医療器具が故障、生命維持装置も壊れ殺気に耐えれずに数人死んだらしい。

・武偵病院 外

願はこう考えていた。

ヴィンチェンゾ・ファミリーを壊滅させてやると。

だが願の考えは思い通りにならなかった。

「やあ、どこに行くんや？」

冷たい青色の髪をしており、扇子を持っている人物、雪風だ。

「お前か、雪風。いや……京都武偵高校の遊雪電ゆめきごやう」

「覚えていて良かったで」

雪風…いや、電は嬉しそうな顔をする。

「当たり前だ。京都の超能力でズバ抜けている武偵だ。無限と言える程の攻撃できたからな。俺と勝負して武偵の中でかなり長い時間戦ったお前だが……特殊能力者だったとはな」

「ところで願はん、あんたあ、何処に行くのかえ？」

電は願が考えていたことを見据えたような目をする。
願は無言で殺気を立てた。

「……やっぱり三下やわな。これだけで殺気を立たせるとか腹立たしいや」

「なんだと!!」

電はさらに殺気が立った願を前にして怯えずに失神もせず、ただ軽蔑な目をしていた。

「復讐は幸せにもならん。ただ無と周りの不幸しか残らんで。あん

さは弱い、ただ仲間が傷付けられただけで怒り任せえで戦うなんてただの子供。傷付けられても冷静になり、能力喰いに半分も力奪われたあんさはヴィンチェンゾに負ける」

願は反論出来なかった。

確かに仲間が傷付いただけで怒り任せにしていた。

反省すべき点だろう。

「そして死んでいった者への『業』を背負い。まああんさの場合『業』なんて一切背負ってないやろう。だから強くならん」

願は軽蔑の言葉にムキになって叫んだ。

これも子供っぽいかもしれなかった。

「てめえ……『業』とか言っているがお前は背負っているのか！！！！！！」

空気が響き窓ガラスも全て割れて雪の様に舞う破片。

「願はん、京都の『氷山事件』知ってん？」

「ああ、知ってるさ」

『氷山事件』

京都タワー近辺に現れた氷山のことだ。

この事件で家屋は殆ど消え戦後のような風景に、そして犠牲者は不明。なぜなら氷山が壊れた瞬間に中に閉じ込められた人も消え去ったのだ。

犯人は捕まってない。

「あの事件。実はあつしが犯人や」

「何!？」

「あの事件の発端は能力喰いや。あんさも戦ったはずや、人の能力と生命を吸い取る化け物。そして奴はあつしの友達を操ってあつしに襲いかかった。幸い勝ったが操られた友達は奴に喰われた。その光景に見たあつしは怒り任せに奴にぶつけた。だが周りを見ていない自分は周りの人を氷山の中に閉じ込めてしまった。解除したら皆消え去ってもうた。自分は人を殺してもうた。悔いた。ただ悔いても皆戻って来ん。自分は決めたんや。皆の分まで生きて能力喰いを倒すんや。たとえ刺し違えても。もうこれ以上犠牲者を出すわけにはいかへん」

全てを告白した雹は一呼吸してさらに言う。

「だからな、冷静になりい。あんさの勝手な行動で無関係な人まで巻き込んでしまつて?」

数秒だけ間が空く。

「……そうだな、サンキューな雹。少しだけ頭が冷めたわ。あと一つ聞かせてもらつ。お前の中にある色金は一体なんだ?」

雪風は目を細くして願を見る。

軽蔑じゃなく、何かを調べるような目を。

「……知らへん」

「そうか、じゃあな」

願は踵を返し武偵病院へ帰っていった。
雷だけ残ったが木の陰から草加が現れた。

「どつでした？彼は」

草加が来る。

雷……雪風は草加の方へ向く。

「なんや、草加はんか。願はんは洗脳「リブレット」されてへん。当然、皆もや」

雪風は扇子を開き扇ぐ。

少しだけ空気が湿っており暑い雪風は自分の周りだけ水分を調節しており涼しいはずだ。

「彼らに言いましたか？『能力喰い』、いえ『破号』を」

「少しだけや。あんさも言わなくてもよいさかい？『EJ』、『虹色金』、『暗黒色金』のことを説明したほうが良い気がするが」

草加は首を振る。

「それらは今は言わなくてもいいです。この先の戦いの後の話です。それに、あの色金の存在は絶対に知られてはいけない。特に『大和』に。もし耳に入ったら奪いに来るでしょう。『大和』は欲深い組織だ。もしそうなら我々が全力で阻止しなければならぬ」

「どつちもどつちやな」

草加は雪風の側を通りすぎたときに言った。

「雪風。あなたは何時洗脳されるか分かりません。あまりあの力を使わないで下さい。陽炎にも忠告してください」

「承知やで」

草加は武偵病院へ。雪風は足から氷を生成してスノーボードに乗るかのような形で滑って行く。そして雪風が生成した氷は脆くくだけ散る。

人氣が無くなったかのように感じたが木の陰に翠が居た。

そう、彼女は雪風と草加の話全て聞いたのだ。

「虹色金？暗黒色金？よくわからないけど願なら何か知っているかな？」

翠は走って草加よりも早く武偵病院へ入る。

廊下で願を探しているときに願達を見つけた。

願に向かって走っているときに黒いスーツを着ていて紫色のウェーブがかかった髪の毛の男はすれ違う時に気付かれないように翠の頭に手を添えてすれ違った。

その瞬間に翠は足を止めた。

「あれ？なんか忘れたような？まっ、いつか」

翠は何かを忘れたかのような顔をするがま、いつか とのことでの願の元に行った。

ウェーブがかかった髪の毛の男は少し後ろを向きまた歩いて行った。

命を与える少女

夜、武偵病院の廊下は暗闇に閉ざされており最小限の明かりしか灯っていないかった。

カツン、カツンと靴と杖が床に接する音がした。

闇の中からつ白髪まじりの老人と二人の少女が滲み出てきた。

『集中治療室』のプレートが掲げられており老人と二人の少女は無言で静かに扉を開けて入ってきた。

中は二人の女性とベッドの中に入っている男。その男の顔に布がかけられていた。

電子器具は止められており静かだ。

そして明かりでその人物が浮き彫りになった。

そう、ヴィンチェンゾ・ファミリーのアーネストである。

そしてその同行者である二人の少女、エルサとテルア。

アーネストはベッドの傍で寝ている二人、アリアと白雪が視界に捉えた。

彼女らの周りは妙に湿っている。

泣き疲れて眠ったのだろう。

アーネストは杖から抜刀せずにベッドの中に入っている男、キンジの顔にかかっている布を取る。

「エルサ、テルア。こっちに来なさい」

「はぁーい」

アーネストは静かに二人を呼び男の手を少女らに握らせる。
その男の手はひどく冷たい手だった。

「いいの？アーネストおじさん？」

部屋の壁がピリピリと静電気を発する。
その時二人はアーネストの方へ向く。

「いいのじゃよ。今回は同僚が無関係な人を殺してしまったからの
お」

同僚とはガンドのことだ。

アーネストはやりなさい、と目を配らせる。
少女らは互いに顔を見合う。

「エルサ」

「テルア」

そして笑顔でこう答えた。

「「大好き」」

瞬間、部屋に帯びていた静電気は医療器具を通りベッドの足を通り
ベッドの中に入っている男に集まった。

「…………ごほっ！ごほっ！」

男は噎せて空気を吸い始めた。
意識はまだ戻ってはいない。

仮に戻っていたとしたら微かにあるのだろう。

「遠山家……いや、遠山キンジ。我が同士の身勝手な行動により貴
方を死なせてしまったのを謝罪する。だが今度、我々の計画を邪魔

するなら今度は容赦せん」

アーネストは目を細めてキンジを見た。
そう、厳しい目をしていた。
だがキンジは聞いていない。

「エルサ、テルア。帰りますぞ」

「うん」

三人は音を立てずに部屋から出ていった。
その時の表情は誰も見ることはなかった。

蘇生、そして新たな場所へ

・武偵病院

朝早く武偵病院に来た新光達。

玄関に入ったら何故か慌ただしい状況になっていた。

「おい！444号室の患者は！？」

「い、生き返っています！」

等の声が響き渡っている。

チラツ、と願の方へ見ると冷や汗。

なんでだ？と疑問視する新光。

やばい、昨日の殺気で人殺したんだ。と呟く願。

「おーい、願？」

はっ、とする願。

「お、俺は悪くぬえ！俺は悪くぬえ！」

「ど、どうしたの願！？」

願の精神が弱冠壊れてくる。

全員あたふたと混乱し始めた

「おーい、何してんだ？」

しかしここで救世主が現れた。

要らない子である遼である。
なんか結構元気そうだが。

「酷いぜ皆。ちゃんと見舞いに「死にさらせえ！」なぜに!？」

見事なストレートパンチが遼の顔に直撃、シャンデリアに突き刺さった。

血が床に爛れ血溜まりになる。

それでも皆見て見ぬフリをする。

「……あー、じゃあ行くか」

気をとりなおして新光がまとめてアリア達がいる集中医療室へ向かう。

・集中医療室

入った時二人はまだ寝ていた。

だが何故だろうか。

その答えはすぐに出た。

「うう〜青いツナギを着た男とブルーベリー色の全裸のオッサンこ
つちに来るなあ!！」

妙なうめき声と叫びをしたのは紛れもないキンジ。

そして起き上がったキンジを見た新光達は幽霊を見たかのような顔
をして叫ぶ。

「「「「うわぁー!?!」「「「「

鷹と春奈は耳を塞ぐ。

そして寝ていた二人はビクッ、と起き上がる。

「くぎゅ!? な、何!? 何があったの!？」

状況を読み込めない二人だったが新光はキンジに指を指す。
それに釣られて二人はキンジの方へ向いたら固まった。

「よっ、アリア」

キンジの声で二人は涙目になりそして……

「ば、バカキンジいー!」

「キンちゃん!」

ガバツと抱き締める二人だがキンジの顔が青白くなる。

「おーい、二人とも。キンジがまた天へ召されるぞ」

「だって、だって……」

泣きじゃくる二人。

それほど嬉しかったのが新光達は分かっていた。

「キンジ、感謝しろよ。この二人はずっとお前の傍に居たからな」

かあ、と紅くなる二人。

「そうか、ありがとな。アリア、白雪。お前は星伽の守りを無視したんだな」

その言葉に白雪は少しずつ青ざめていく。

「あ、ああ……」

あたふたしている白雪を新光は手で白雪の頭の上へ置く。

「まあいいじゃないか。もう過ぎた事は戻ることはない。真っ直ぐ突き進むんだ」

「そう言えば魔剣……ジャンヌは？」

アリアの問いに願が答える。

「ああ、あいつなら今頃綴の拷問に遭わされているな」

満身創痍の奴に拷問かけるか？普通。

「……ん？キンジ。お前、眼の色が変わったな」

新光はキンジの眼の色が変わっていることに気づいた。
赤い左目と青い右目の瞳というオッドアイに。

「ん？そうか？」

「さて、と。俺達はアメリカに行かなければならないな」

願は振り向きそう言った。

「アメリカで仕事か？」

「まあ、そうなるな。お前、一回親父に会いに行けよ」

願は微笑みながら行った。

俺の親父は陸上自衛隊の一等陸佐。

あまり会えないしここ二年程会っていない。

「そうだな。明日休みだし、行ってみるか」

「じゃあな。新光」

願はさよならの挨拶をして出ていった。

明日親父に会ってみるか。

明日親父に会う。

願から見れば『仲間を見殺しした人物』

新光から見れば『仲間を犠牲にして多くの人を助けた人物』の元へ

蘇生、そして新たな場所へ（後書き）

次回はコラボ、白石さんの作品のあのキャラです。

先客でした阿良々木 雅さん、もう訳ありません！時間の流れるに
コラボ延期します！

13 父の元へ(前書き)

かなり短めです。

13・父の元へ

・横浜駐屯地

次の日、新光は陸上自衛隊横浜駐屯地に足を運んでいた。

今朝行こうとしたら親父からの電話、どうやら話があるとのこと。皆は来ていない。否、呼んでいない。

だから俺一人。

そして親父が来る間一人で部屋に待った。

そして数分後親父が来た。

言うまでもないが服は作業服だ。

親父……小野勝は俺とは違い黒い髪とすこしごつくなっている顔。

一等陸佐と小隊長兼司令官に相応しい顔つきだ。

「親父、久しぶりだな。今日急に呼び出すって何かあったのか？」

新光は最初は驚いたように、そして真剣な眼差しで言った。

まるで事件が起きたかのような……

「お前が来そうな気がしてな。道中ナンパしないようわざわざ電話したんだ」

勝は厳しく、そして過保護するような事を言う。

確かに俺はナンパをするようになった。

一年前、一学期の時にヨーロッパ留学の帰りに婚約者遊佐鈴音の死去から……いや、この話は後にしよう。

「呼んだ理由は他にもある……」

勝は手帳を取り出す。

古くさい手帳から一枚の写真が滑り落ち机の上に乗った。
写っているのは兄の姿。

俺は五年前、親父と兄と同じ自衛官になろうと思った。

だがその五年前に親父が語ったある出来事に俺は自衛官の道に進む
のを諦めた。

そう、今から語るのは五年前、中国軍がロシアのシベリアに侵攻し
たその後の話である……

子ども

シベリアに吹く冷たい風は作戦実行中の自衛隊の身体を擦り付けていた。

シベリアに侵攻していた中国軍は願達の活躍により大半は撤退した。だが中国軍はミサイルで首都モスクワに攻撃をするという情報が入った。

しかもそのミサイルは場所は分からず、ある送信施設からの電波しか受信しないミサイルだった。

小野勝（当時三等陸佐）は息子である小野光明おのこうめいにその施設に潜入させた。

なぜ一人で行かせたのか……

「小野三等陸曹が目標施設内に潜入しました」

通信機に耳を傾かしている自衛官。

皆はびりびりしていた。

この作戦が失敗したらモスクワの人々が死ぬからだ。

勝は手を後ろに回し次の指令はどうするか、考えていた。

「光明、時間はないが確実にやってくれ」

他の自衛官は耳を当てて言う。

『わかりました』

光明は指を額に当てて通信機を切りミサイルの変更指示を開始した。

「勝、なぜ光明一人で行かせた？」

願（当時二等陸尉）は疑問を寄せていた。
なぜ勝がこの作戦の指令になったのか。指令するのはこの俺じゃないのか？と。

そしてなぜ息子である光明を行かせたのか。
その時にザッツ！とノイズが走り通信機からアラーム音が響き渡る。
まるで光明の危機が迫っているような。

「どうした！？」

自衛官らはざわざわし始めた。しかし勝はざわざわせずにその通信機から発する言葉に耳を傾かせていた。

『自爆装置が作動したようです。しかもミサイル発射時間も短く…
…あと一分で自爆と同時に発射されます！』

通信機から爆発するような言葉に皆を蒼白させる。だが光明はこの危機に悲鳴のような叫びではなく楽しそうな叫びをする。

「光明！」

「小野三等陸佐！指示を！」

「勝！俺が光明を救いに行く！行かせてくれ！」

さまざまな言葉が飛び交う。

願も光明を救出すると言い出す。

だが勝から発する言葉はシベリアの風より南極に吹く風より冷たく
酷い言葉だった。

「光明、そのまま作戦を実行しろ。一つでも情報を送れ」

この言葉は光明の命を見捨てるような物だった。自衛官らも勝を見る。本気なのか、と。

「し、しかしこのままでは小野三等陸曹が！」

「光明！おい勝！いまなら光明を救える！行かせてくれ！」

皆は光明を救いたい一心に叫ぶ。

願も行かせてくれと言うがなぜ勝手に行かないのか。それは願は遊撃隊かつ勝の指令の元にしか動けない。勝の指令で行き現場では願の判断で動くという遊撃隊だからだ。

「勝！光明はお前の息子だろ！」

願はお前の息子だから助けたいだろ？と言うような感じに言う。

肉親を見捨てるなんてことは絶対はない、と願……いや、皆は思っている。

「願、お前は待機だ。光明、作戦を続ける」

『……了解！』

光明は勝の顔が見えるはずもないのに通信機に向かい微笑みながら言った。

「勝——！貴様あ！自分の息子を死なせる気か！」

願は勝を掴み叫ぶ。皆は止めたいと思うが願を止めることは出来な

い。

「願、直に命令をする。待機だ。」

「命令するなら今だろ！早くしないと」

その時通信機から多大なるノイズのような爆音が轟きそれから通信機から何も音が出なかった。

皆は分かっていた。この爆音の元は……光明はもう……願も力が抜けて手から勝を離す。

そしてモニターから画像が送られてきた。

その画像はミサイルの位置を示す地図であった。それを見た自衛官は小さく言った。

「小野三等陸佐……ミサイルの位置を示す地図です」

勝は遠目で画像を見て願に向けて指令を出す。

「願二等陸尉、今すぐそこに向かえ」

機械のような、まるで何もなかったかのような感じに。

その態度が願を怒らせた。

一瞬何があつたか分からないような速さで勝の首を絞め倒す。

「てめえ！息子が死んで悲しいとは思わないのか!？」

次第に首に力を入れる。

勝はそれでも苦しむような顔をしない。

その目は何かを見え透いたかのようなこれが運命だからかのような目であつた。

親父はこの作戦で必ずしこうなると分かっていた。しかも並の自衛官にやらせたらこの作戦は失敗する。だから機械操作が一番得意な光明に選んだ。

もし、光明ではなく誰かであつたら無駄死にとモスクワに死体の山が出来ていた。

兄は爆発する前に発射を停止させミサイルの位置を送り、散った。

親父が指示した『情報を送れ』というものを。

自衛隊内でも批判は多かったが世間では逆だった。

自衛官は命を張って国民を守るのは当たり前。政治家にも彼への批判や賞賛の二つに別れている。残酷だ、仕方がない等。

願は彼を恨んだ。仲間を軽々しく捨てるような奴と。

当時十二歳であつた俺はこの話を聞いたとき勿論親父を責めた。

この時の俺はまだ子供だった。

アニメのようにハッピーエンドは必ずあると思っていた。

だが現実では小説のように都合がいいなんてものは無い。

皆も辛いと思っていた。

だが一番辛いのは紛れもない指令した親父であることを。その事を気づくのは少し経ったあとであつた。

一つの命より多くの命を……

出落ち

「中国から輸入される輸送船。そこから輸入される肉を調査してほしい」

手帳を見て、そして引き出しから何か書類が引き出され新光に渡す。新光はその書類に目を通した。

見た感じ輸入のリストのようで違和感があまりなかった。いや、何か違和感があった。

肉…そういえばこれは『肉』しか表示されていないな。

「親父、これはまさか……」

「輸入業者からコピーしたものだ。業者も薄々気づいていたようだ。肉でもどこの国の牛、豚のどこの部位の肉か……表示されていないとなると知られてはいけない肉だろう」

知られてはいけない肉……その答えに辿り着いたのは……

「面倒なことになったなあ……」

リストの紙にとんとんと指で叩く。

現場に潜入しないと大半分らないぞ。

「横浜港に入港する輸送船に潜入し証拠を掴んでくるんだ。この調査はお前の他に鷹山勇治たかやまゆうじが行く」

鷹山勇治？親父がそいつを推薦するとはかなり期待しているのか？それに一人か。まあ潜入だし大人数だとあれだからな。

「鷹山の他に着いてくる奴いるが、いいだろう」

勝はため息をする。へんな虫でもいるかのような。

「鷹山はすぐそこの部屋にいる。『後は頼んだぞ。新光』」

『後は頼んだぞ』……この言葉は新光と勝の合言葉のような物。

新光は右手を拳にして突き出す。これは承知したの意味。

勝は微笑み新光は勝が書いた地図を貰い部屋から出てすぐそこの部屋を見て確認してからドアを開ける。

するとありえない光景が目突き刺さった。

「いよつしい！光稀イくぞお！おらおらおらおら！」

「ちよつ！らめえ！希ちゃんたすけてえ！」

「ふ、ふわああああ！」

「希！お前もイくかあ！」

なんだこれ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0098w/>

緋弾のエリア 重力と五式の銃弾

2011年12月18日00時47分発行